

八尾市文化財調査報告25
平成3年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書

1992.3

八尾市教育委員会

正誤表

頁	行	誤	正
図版目次右	13	上段、第2次出土平瓦、下段出土	第2次出土平瓦
10	17	淡褐色粘土	淡灰色粘土
31	16	瓦質土器三足の	瓦質土器三足釜の
	17	瓦質土器三足の	瓦質土器三足釜の
42	3	S D 01と	S D 01は
	11	蓮弁と大小の蓮弁を	大小の蓮弁を
48	24	一方の片肩	一方の肩は

正 誤 表

	誤	正
図版五	図版五 東郷遺跡 (91—08)	図版五 東郷廃寺 (91—08)
図版九	第2調査区 車壁	第2調査区 東壁
図版十九	SK 01、SD 02 包含～	SX 01、SD 02 包含～

はじめに

現代の多様化する社会においては、町に潤いのある暮らしが求められるようになり、物質的な豊さよりも心のゆとりある生活が望まれるようになりました。今日のような歴史ブームも、このような新しい時代のニーズに他なりません。

八尾市は大阪平野の東側に位置しており、古来より大和と大阪を結ぶ交通の要所となっていました。それゆえに、市内の遺跡をみると、古く旧石器時代から近世に至るまでの人々の生活の痕跡を認めることができます。したがって本市では、社会教育部に文化財室を置き埋蔵文化財保護の為に資料の整備に尽力してまいりました。その結果平成3年度では、東郷遺跡や太田遺跡で今まで知られていなかった寺院の存在が判明するなど、数多くの成果を得ることができました。これらの調査の多くは開発事業に先立ち遺構の有無を確認するために行われたものであります。このような貴重な文化財をいかに保存・活用するかが新たな課題となっております。

また本年度は八尾市で文化財保護条例が施行の運びとなり、これからも積極的に文化財行政に取り組んで参る所存であります。

最後になりましたが、これらの調査にあたり御協力と御理解を頂きました関係各位に対して感謝申し上げる次第です。

平成4年3月

八尾市教育委員会

教育長 西谷信次

例　　言

1. 本書は、平成3年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として八尾市内各遺跡で実施した遺構確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は八尾市教育委員会文化財室（室長 田中弘）が主体となって実施した。
3. 調査は八尾市教育委員会文化財室の米田敏幸、清斎、吉田野乃が担当し調査にあたった。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査についてその概要を収録した。
5. 本書の作成にあたっては、清、吉田が執筆編集を行なった。

目 次

1. 久宝寺遺跡（90-556）の調査	1
2. 恩智遺跡（90-558）の調査	6
3. 久宝寺遺跡（90-467）の調査	9
4. 成法寺遺跡（90-356）の調査	14
5. 弓削遺跡（90-553）の調査	21
6. 宮町遺跡（90-615）の調査	30
7. 東郷遺跡（91-008）の調査	34
8. 成法寺遺跡（91-014）の調査	38
9. 東郷廃寺（90-531）の調査	41
10. 花岡山遺跡（91-084）の調査	47
11. 久宝寺遺跡（91-150）の調査	50
12. 恩智遺跡（91-055）の調査	52
13. 萱振遺跡（91-166）の調査	55
14. 矢作遺跡（91-189）の調査	59
15. 中田遺跡（91-207）の調査	64
16. 久宝寺遺跡（91-247）の調査	66
17. 亀井遺跡（91-255）の調査	69
18. 龍華寺跡（91-313）の調査	73
19. 志紀遺跡（91-319）の調査	76
20. 東郷遺跡（91-330）の調査	80
21. 小阪合遺跡（91-345）の調査	82
22. 太田遺跡（91-185）の調査	85
23. 成法寺遺跡（91-392）の調査	91
24. 中田遺跡（91-409）の調査	94
25. 恩智遺跡（91-335）の調査	97

図版目次

図版一、久宝寺遺跡（90-467）	S F - 0 1 西壁断面 S K - 0 1
図版二、成法寺遺跡（90-356）	調査区全景（東から） 調査区中央（北から）
図版三、成法寺遺跡（90-356）	S E 0 1 S D 0 4（北から）
図版四、弓削遺跡（90-553）	第5調査区 遺構検出状況
矢作遺跡（91-189）	第1調査区北壁 第1調査区北壁 S K 0 1
図版五、東郷遺跡（91-008）	調査区全景（北から） 軒丸瓦出土状況
図版六、東郷廃寺（90-531）	上方テラス 下方テラス
図版七、花岡山遺跡（91-084）	調査区全景 第1調査区（南から）
図版八、太田遺跡（91-185）	第1調査区梵字瓦出土状況 第2調査区、東壁
図版九、太田遺跡（91-185）	出土遺物
志紀遺跡（91-319）	出土遺物
図版十、久宝寺遺跡（90-566）	出土遺物
図版十一、久宝寺遺跡（90-566）	出土遺物
成法寺遺跡（91-392）	出土遺物
弓削遺跡（90-553）	第5調査区出土遺物
図版十二、弓削遺跡（90-553）	第5調査区出土遺物
図版十三、弓削遺跡（90-553）	第5調査区出土遺物
図版十四、弓削遺跡（90-553）	第5調査区出土遺物
図版十五、恩智遺跡（90-588）	第1列ヶタ暗灰色砂層出土土器
図版十六、久宝寺遺跡（90-467）	出土遺物
図版十七、久宝寺遺跡（90-467）	出土遺物

図版十八、成法寺遺跡（90-356）	SK02、SK04、SK05、SK07出土遺物
図版十九、成法寺遺跡（90-356）	SK08、SK09、SK10出土遺物
図版二十、成法寺遺跡（90-356）	SE01、SP04出土遺物
宮町遺跡（90-615）	SX01、SD02、包含出土遺物
図版二十一、東郷遺跡（90-531）	90-356、包含層出土瓦、SK09出土陶磁
図版二十二、東郷遺跡（91-008）	90-615
萱振遺跡（91-166）	出土遺物
図版二十三、恩智遺跡（91-055）	91-008
図版二十四、恩智遺跡（91-055）	91-166
図版二十五、矢作遺跡（91-189）	出土遺物
図版二十六、太田遺跡（91-185）	91-055
恩智遺跡（91-335）	出土遺物
図版二十七、恩智遺跡（91-335）	上段、第2次調査出土平瓦、下段出土 出土梵字瓦
	出土石器
	出土石器、第1調査区出土石器

1. 久宝寺遺跡（90-566）の調査

調査地 久宝寺4丁目3番31号

調査期間 平成3年2月21日、3月3、4日

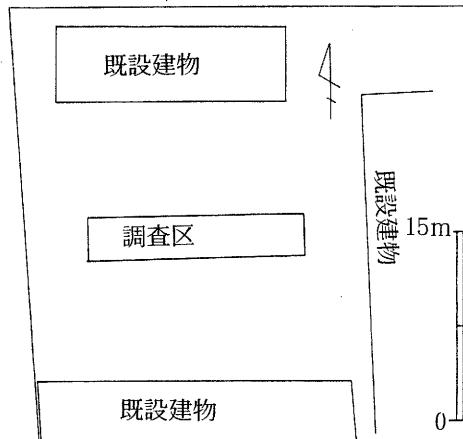
1. 調査概要

久宝寺遺跡は縄文時代晚期～近世にいたる複合遺跡である。そのうち特に、弥生時代後期から古墳時代前期を中心として集落が発展することがこれまでの調査から判明している。集落以外に多くの方形周溝墓や古墳が造営されており、大阪市文化財協会が実施した加美遺跡84-1区の調査（註1）や大阪文化財センターによる久宝寺南遺跡の調査（註2）さらに（財）八尾市文化財調査研究会が平成3年に実施した調査（註3）では、前方後方形の墳丘が検出されており中河内の古墳発生についての研究をするうえで重要な地域となっている。また、遺跡のなかに寺内町を包括していることも久宝寺遺跡の特徴となっている。

今回の調査は工場建築に伴うもので、2月21日に2.5m×2.5mの調査区を設け地表下2.8mまで掘削し、遺構及び包含層の確認を行った。その結果、古式土師器や弥生土器を含む暗灰



第1図 調査地周辺図(1/13000)



第2図 調査区設定図 (1/600)

色粘土層が地表下2.3m前後にあり、約0.4mの厚さで堆積していることがわかった。この調査をもとに申請者と協議を行ったが、建物の面積や掘削深度から生じる危険性により土層断面の観察を中心とした調査をすることになった。

その方法は3m×14mのトレンチを設定して、地表下約3mまで掘削を行い遺物包含層の拡がりとその時期幅の確認をするものであった。事業計画地の面積が狭く、周囲に既設の建築物があるため14mのトレンチを2等分し、2日に分けて調査を実施した。しかし、掘削深度が深いためトレンチが崩れ、中央部分の土層を観察、記録することはできなかった。

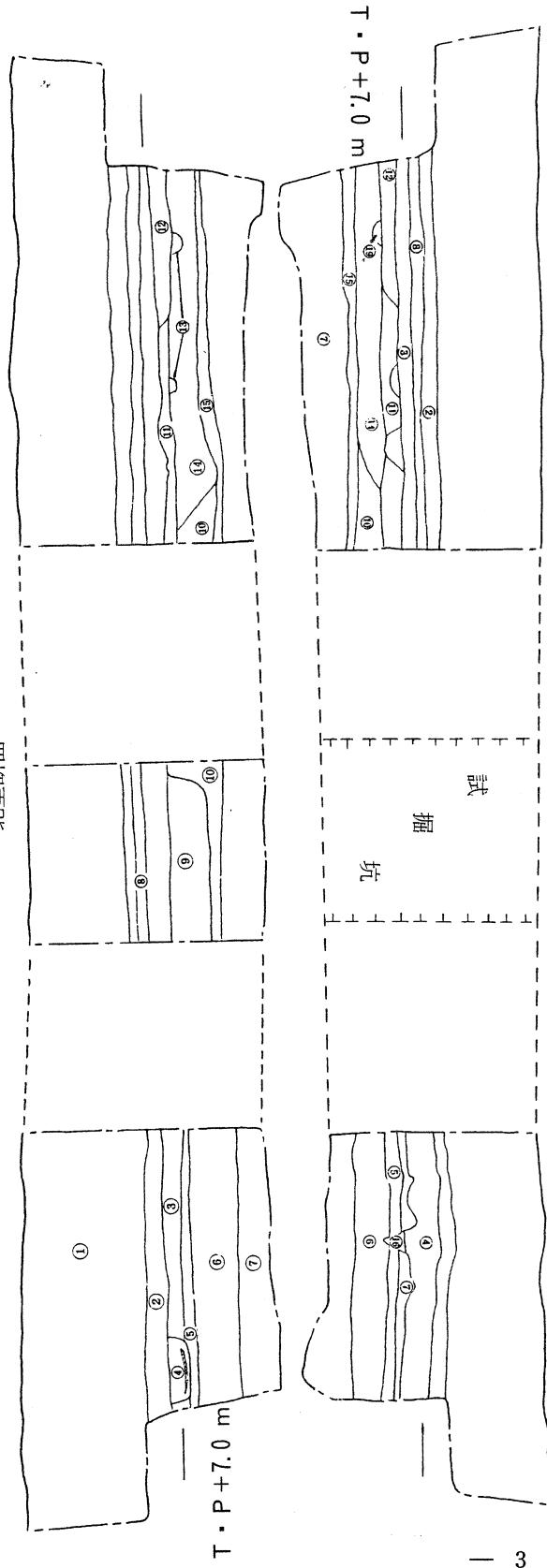
トレンチは調査地の東西方向に設定し、西側から掘削を開始した。土層断面を観察してみると旧耕作土はGL-1.1mでみられるが、それ以下では南壁と北壁では3mの幅しかないが層序に違いがみられる。

遺構は南壁で約TP+7mの暗緑灰色粘砂層を切り込む土坑がみられた。土坑は幅約0.8m、深さ0.2mで、木製の板が埋められている。時期は近世と思われる。北壁では約TP+6.8mの褐灰色砂質土層を切り込むピットを確認した。ピットは幅約0.2m、深さ0.25mで淡緑灰色粘砂を埋土とする。時期はやはり近世以降であろう。TP+6.6mで褐色微砂～淡灰色細砂層があるが、この層は東側の土層断面で見られず、トレンチ中央付近で行った1次調査では西に落ち込む肩部を確認しており、流路の一部と考えられる。

東側では西側とは違って、TP+7mから0.5mにわたって灰褐色粘砂・褐色砂質土が堆積している。この褐色砂質土は明褐色粘土の落ち込みの部分にあたる。遺構は南壁でTP+6.9mの淡褐色砂質土を切り込むピットが1基とその下部層である褐色砂質土上で杭跡のような小穴がみられる。時期は不明であるが、褐色砂質土より土師器の小片が出土している。

そして、このトレンチ中最も遺物が多く出土してのはTP+6.2mにある暗灰色粘土層である。遺物は弥生後期末を中心として出土している。

北壁断面



— 3 —

里側耕作

- | | | |
|--------------|-------------|------------|
| 1. 耕作土 | 8. 暗緑灰色砂質土 | 15. 灰色砂質土 |
| 2. 黒灰色砂質土 | 9. 黄褐色シルト | 16. 淡緑灰色粘砂 |
| 3. 暗緑灰色粘砂 | 10. 明褐色砂質土 | 17. 暗褐色砂質土 |
| 4. 明緑灰色粘砂 | 11. 淡灰褐色砂質土 | 18. 淡黄褐色粘砂 |
| 5. 灰褐色砂質土 | 12. 灰褐色粘砂 | 19. 淡褐色粘砂 |
| 6. 暗褐色～淡灰色細砂 | 13. 淡灰褐色粘砂 | |
| 7. 明灰色粘土 | 14. 暗褐色砂質土 | |

第3図 土層断面図 (1/80)

2. 出土遺物

1から7までは1次調査で出土した遺物である。3は黒色土器B類で、高台は断面は鈍い三角形を呈し底径7cmを測る。6. 7は弥生時代後期末の甕底部で、ともに底径4.5cmを測る。

8から36は2次調査で出土した遺物であるが、明褐色粘土層出土の8と9を除いては暗灰色粘土層からの出土したものである。9は黒色土器B類で、口径16.6cmを測り内面はヨコナデを施している。13はミニチュアの壺である。現高4センチ、底径3.4cmを測り、外面にヘラミガキを施している。器形は胴部最大径が下がっており、中期の特徴を備えている。甕底部は突出しないものが多くみられ、31は粘土の巻き上げ法が良くわかる例である。34は鉢と思われるが、外面と底部にハケメ調整を施し、内面にヘラケズリを行っている。

3. まとめ

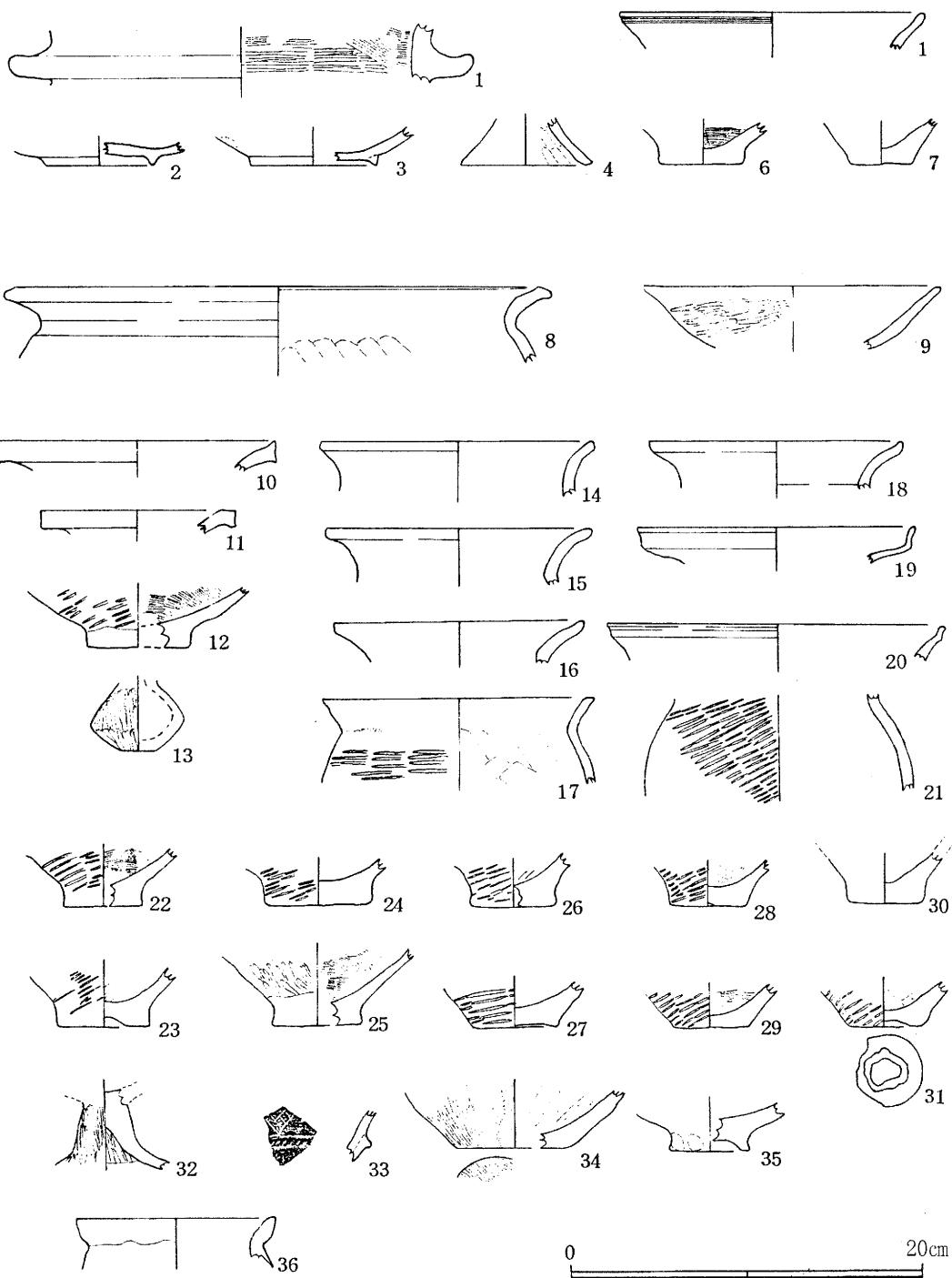
今回の調査は諸々の条件により地層の観察のみにとどまったが、弥生後期を中心とする良好な包含層の存在が確認できた。おそらく久宝寺遺跡ではいまのところ最も東部分で確認されたものであると思われる。今後周辺での調査によりさらに東に拡がる可能性もあり、期待されるのである。

(清)

参考文献

- (註1) (脚)大阪文化財センター『久宝寺南-久宝寺・加美の調査一』(その他2)昭和62年
- (註2) 田中清美「大阪府大阪市加美遺跡の調査-弥生時代中期後半の大型墳丘墓を中心として」『日本考古学年報』37 昭和59年
- (註3) 成海佳子「久宝寺遺跡の調査概要」『大阪府下埋蔵文化財研究会(第25回)資料』

1992.1.19



第4図 出土遺物実測図（1／4）

2. 恩智遺跡（90-558）の調査

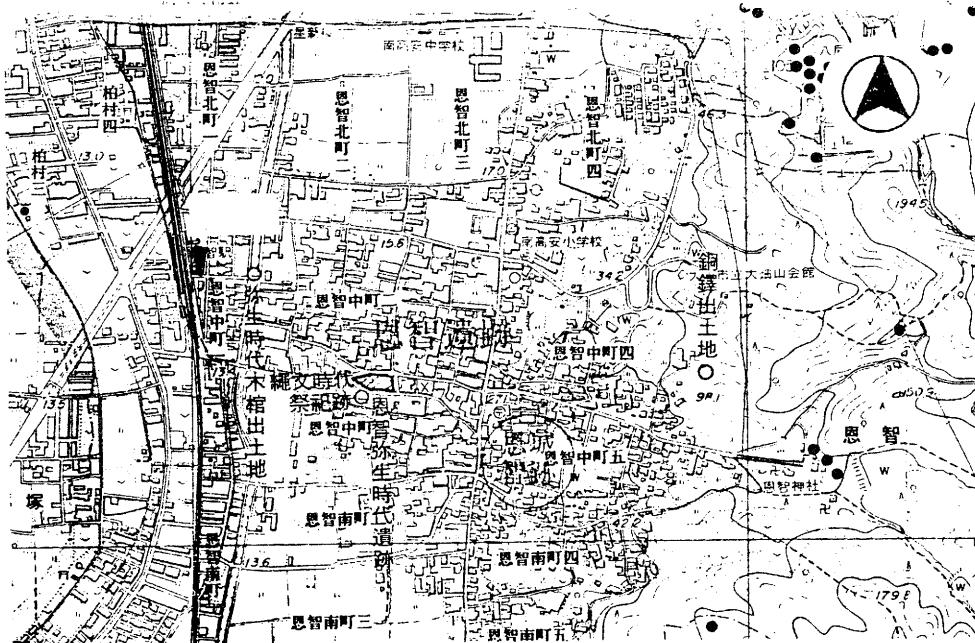
調査地 恩智中町1丁目81

調査期間 平成3年2月22日

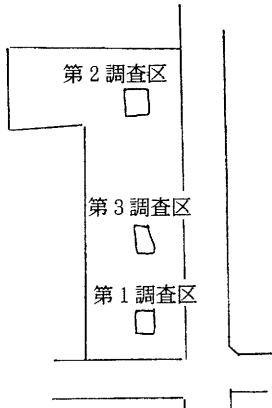
1. 調査概要

本調査は共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の南に第1調査区、北側に第2調査区、中央に第3調査区それぞれ設定した。第1調査区では地表下0.8m～1.3m（TP 10.7m～11.2m）で黄灰白色小礫混砂層を、さらにこの下の地表下1.3m～1.8mで弥生時代中期の土器を含む暗灰色砂質土層、暗灰色砂質シルト層を確認した。第2調査区では地表下0.8m～2.0m、（TP 10.0m～11.2m）で同様の黄灰白色小礫混砂層を確認した。この層は中央の第3調査区では地表下1.1m～2.0m、（TP 10.0m～10.9m）で確認した。この層は須恵器、弥生土器が多く含み、古墳時代後期を下限とすると思われる自然流路の埋土である。ここからは土師器片、弥生土器片、須恵器甕片、壺片、杯蓋片が出土している。

6は第2調査区の黄灰白色砂層から出土した広口壺の口縁部片である。口縁端部を下方に拡張し簾状文を施す。5は土師器の鉢の小片である。6は甕である。外面に縦方向のミガキを施



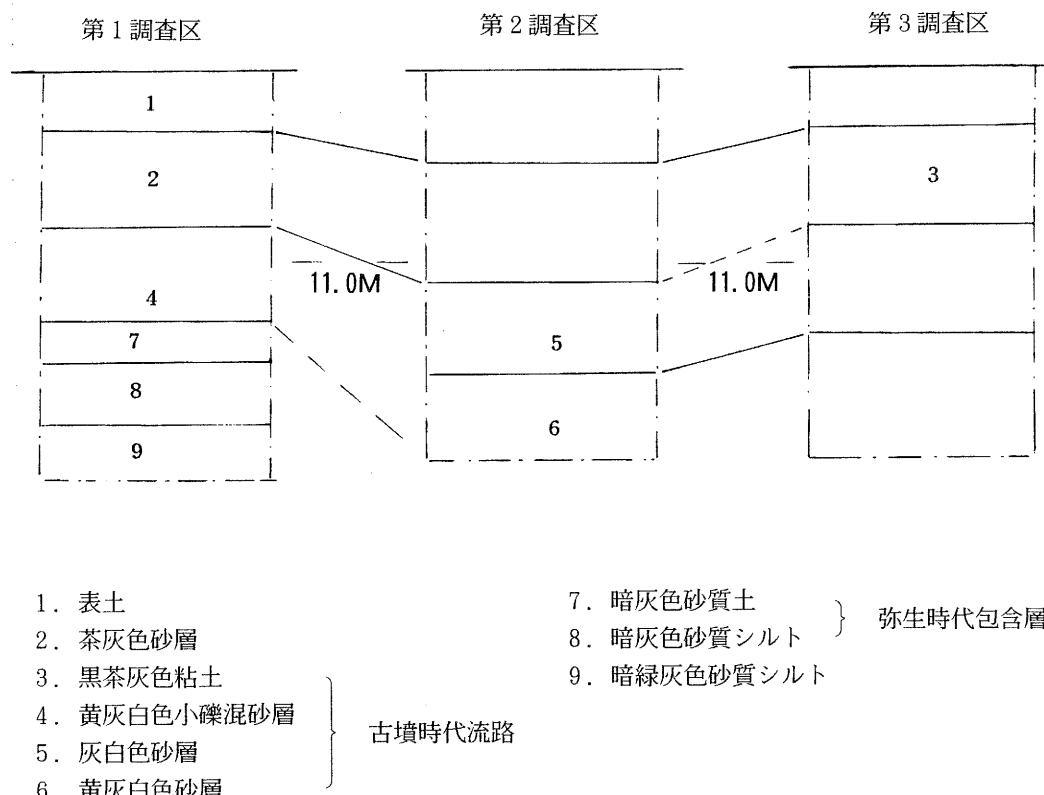
第5図 調査地周辺図 (1/13000)



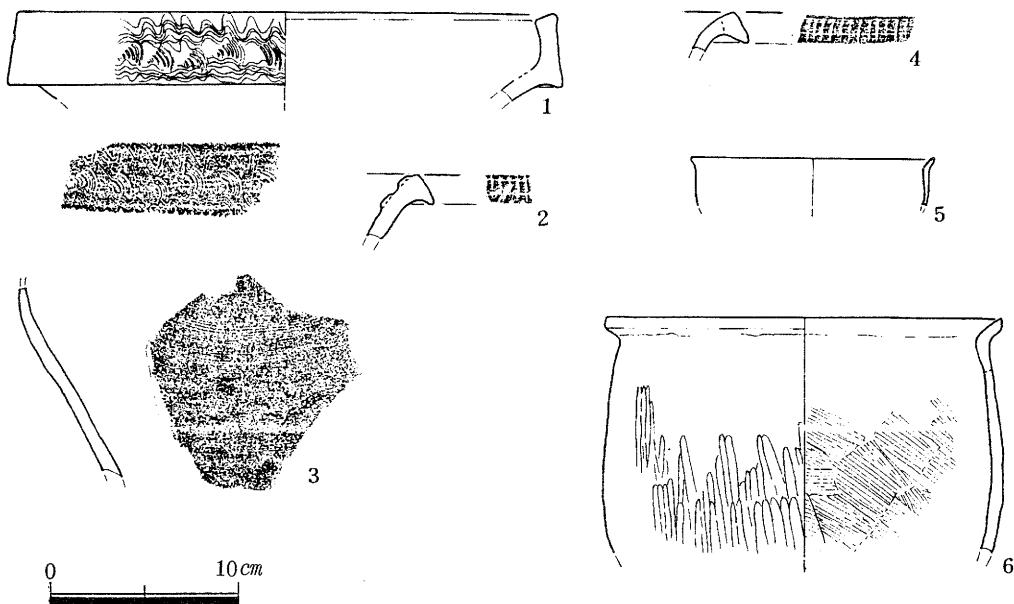
第6図 調査区設定図 (1/800)

ており、黒斑がある。第1調査区で確認し
灰色砂質土層、暗灰色砂質シルト層からは
弥生時代中期を中心とする土器が出土して
いる。1は広口壺である。口縁端部を拡張
し、波状文の間に貝殻文を施す。口縁下端
に刻み目を施す。2も4と同様の広口壺で
ある。

口縁下端に刻み目を施す。3は広口壺の頸
部から腹部にかけての破片である。全体に
磨滅が著しいが、外面に簾状文を施す。



第7図 各調査区基本層序模式図 (1/40)



第8図 出土遺物実測図（1／4）

2. まとめ

以上から本調査地周辺では弥生時代中期の包含層が良好に遺存しており、これをきりこむ比較的大きな自然流路が古墳時代後期頃までに流れていたものと思われる。当調査地の南側の恩智中町1丁目77の調査では弥生時代～古墳時代の包含層と弥生時代の遺構面が確認されており、^(註1)弥生時代中期の土器棺が出土している。またこの東側では恩智川の河川改修に伴う調査が行なわれており、^(註2)弥生時代から古墳時代中期にいたる遺構、遺物が確認されている。

また調査地の北東、恩智川の東岸にあたる恩智中町2丁目324、323ではTP 10.3m～10.7mで弥生時代に埋もれたものと思われる自然流路を確認している。この自然流路と今回検出したそれが同一のものかどうかは不明であるが、同一のものとすると、弥生時代から古墳時代にかけて、恩智中町1丁目から2丁目付近に南西から北東付近に、流れていた自然流路の存在した可能性が指摘できる。^(註3)

（吉田）

(注1) 八尾市教育委員会『八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書』1985

(注2) 瓜生堂遺跡調査会『恩智遺跡I・II』1980

(注3) 八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書』1991

3. 久宝寺遺跡（90-467）の調査

調査地 西久宝寺6番1の一部

調査期間 平成3年2月26日、3月7、8、12～14日

1. 調査概要

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流である長瀬川の左岸に立地している。その範囲は南北1.5kmにも及んでおり、八尾市域だけでなく東大阪市や大阪市にも拡がっている。そのため西に接している大阪市側では加美遺跡として調査されている。

遺跡発見の契機となったのは、昭和10年（1935）に許麻神社の裏、小字「西口」・「栗林」で行われた道路工事中に弥生式土器や須恵器、土師器及び剣船の一部が出土したことによる。昭和48年以降に大阪府教育委員会、八尾市教育委員会、（財）八尾市文化財調査研究会によって調査が行われ、その結果久宝寺遺跡は縄文時代晚期の遺物包含層を有し、弥生時代前期から近世にいたる複合遺跡であることが判明した。

今回の調査は共同住宅建設に伴い遺構・遺物の有無を確認するため行ったものである。調



第9図 調査地周辺図 (1/13000)

査地は東大阪市との境界付近に位置している。一次調査は $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ の調査区を1カ所と $1.35\text{ m} \times 1.35\text{ m}$ の既設の掘削孔の断面観察を中心に行った。調査区は既設建物の基礎構造物によりかなりの攪乱を受けていた。しかし、2ヶ所ともGL-1.2m前後の明褐色砂質土層中より古墳時代中期から後期に比定できる遺物が出土した。

この調査をもとに申請者と協議を行ったが、既設建物の基礎構造物の攪乱により、調査区の設定に際してかなり限定されることとなつた。その結果、 $22\text{ m} \times 2\text{ m}$ のトレーナーを事業計画地に1ヶ所設け包含層の広がりと時期幅の確認を目的として調査を実施することにした。けれども、攪乱を除去するために掘削を深めにしたために遺物の多くは上げ土からの採取となり、調査はGL-1.8mでの遺構検出と断面観察を主体に行うことになった。

平面で検出した遺構は炉状遺構(SF-01)、溝3条(SD-01, 02, 03)、落ち込み状遺構(SX-01)である。

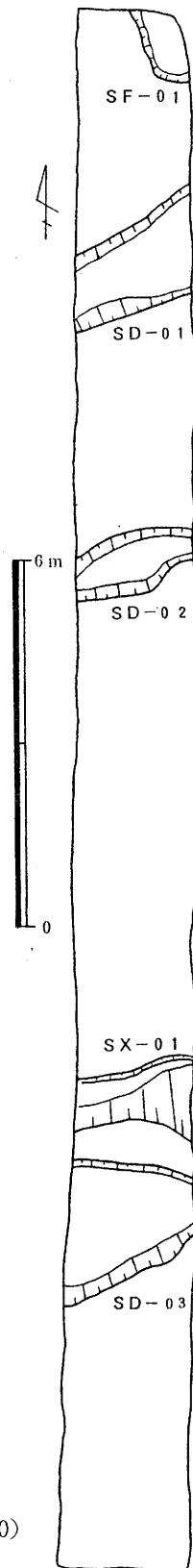
SF-01は南東隅で検出されたため、大部分が調査区外に至るため全容は不明である。現状で幅 0.56 m 、深さ 0.25 m を図る。埋土は3層に分けることができ、上層から淡褐色粘土、暗青灰色粘土、黒褐色粘質土(炭化物を含む)である。遺物は暗青灰色粘土、黒褐色粘質土で出土している。第14図7、8、9、21の他に高杯裾部3点、製塩土器片、壺胴部片3点が出土しており、古墳時代中期の遺構とみられる。

SD-01は東西に伸びる溝で、最大幅 1.5 m 、深さ 0.17 m を測り暗灰色粘土を埋土とする。遺物は出土していない。

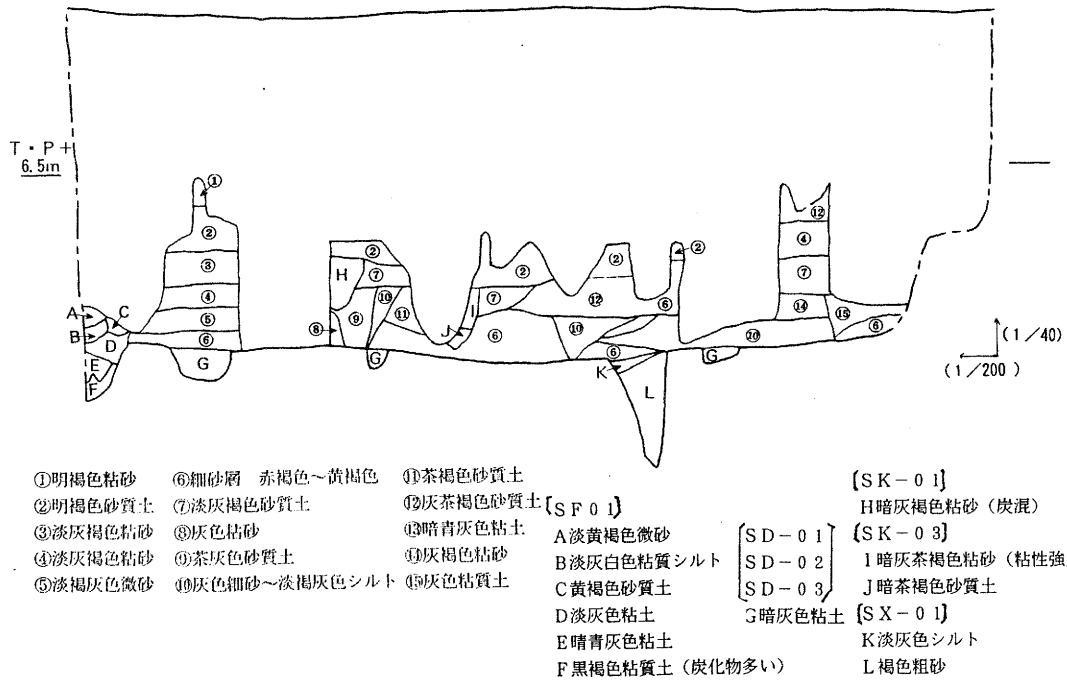
SD-02も東西に伸びる溝で、最大幅 1.0 m 、深さ 0.13 m を測り暗灰色粘土を埋土とする。遺物は第14図10のほかに須恵器蓋坏片、土師器小片が出土しており、古墳時代中期の溝と考えられる。

SD-03は調査区の最も南で検出した。最大幅 2.0 m 、深さ 0.1 m を測る。遺物は出土していない。埋土は淡灰褐色粘質シルトである。

SX-01はSD-03の北隣に位置する溝状の遺構で、東西に伸び



第10図 調査区平面図 (1/120)



第11図 西壁断面図

ている。ベースとなるのは暗灰色微砂シルトで、埋土は淡灰色粗砂と褐色粗砂で南側は急に落ち込んでおり、北側は緩やかに落ち込んでいる。遺物は出土していない。

以上が平面で検出できた遺構である。次に壁面でみられた遺構について述べる。東壁では土坑を2基、西壁では土坑1基、ピット4基を確認している。ただ前述したように攪乱がひどく全体にG L - 1.2 mまで削平されており、しかも除去された基礎構造物により2.5 m前後の欠損が数カ所あり、層位の把握は困難なものとなっている。

東壁SK-01は淡灰褐色砂質土から切り込んでいる暗灰褐色粘砂（炭混）を埋土とする。現存幅0.8 m、深さ0.35mを測る。遺物は第4図12、13、14の他に布留式新相を示す甕片、製塩土器片等が出土している。

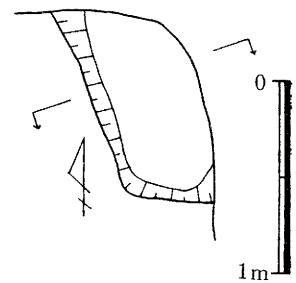
東壁SK-02は攪乱により全容は不明である。埋土は暗灰茶褐色粘砂と暗茶褐色砂質土の2層から成っている。遺物は布留式新相の甕片が1点出土している。

西壁SK-03はSD-02の上方付近に位置している。幅0.4 m、深さ0.25mを測る。埋土は茶褐色粘砂（炭混）で、第13図4、第14図11の他に韓式土器、甕、製塩土器片等が出土している。遺構の切り込み面は東壁の土坑より2層下がっているようである。

西壁SP-01、02はSD-01の上方に位置しており、隣りあっている。両ピット内より土師器の小片が出土している。層位的にはSK-01、02と同じである。幅0.3 m、深さ0.18m

西壁 S P -03はS D -02の上方南にあり、幅0.27m、深さ0.16mを測る。西壁 S P -01、02より1層下がっている。

西壁 S P -04はS X -01の上方に位置し、幅0.4 m、深さ0.28mで、埋土は灰褐色粘砂（炭混）である。レベルでは西壁 S P -03と同レベルにある。遺物は出土していない。



2. 出土遺物

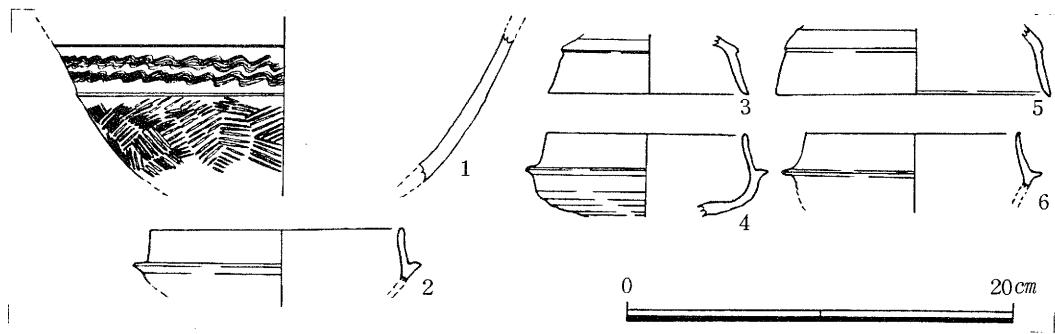
本調査の出土遺物はほぼ6世紀前期から中期に位置付けられ得る。1、19は高杯形器台である。1は2条の波状文（7本、7本）を巡らせ、稜によって界した後にタタキを施している。19は2本の凸線によって3区画に分け、2条（12本、10本）、2条（12本、10本）、1条（12本）の波状文を施し、その下に籠描沈線による鋸歯文を上下に組み合わせている。19は関川氏による分類（註1）ではII b類に属し、八尾南遺跡で同様の器台が出土している。（註2）この19を含めて16、17、18が明褐色砂質土より出土している。またS F -01出土の9は器台の裾部と思われる。また、今回図化しなかったが蓋形埴輪の一部と思われる破片なども出土しており、周辺に古墳があった可能性も考えられる。

3. まとめ

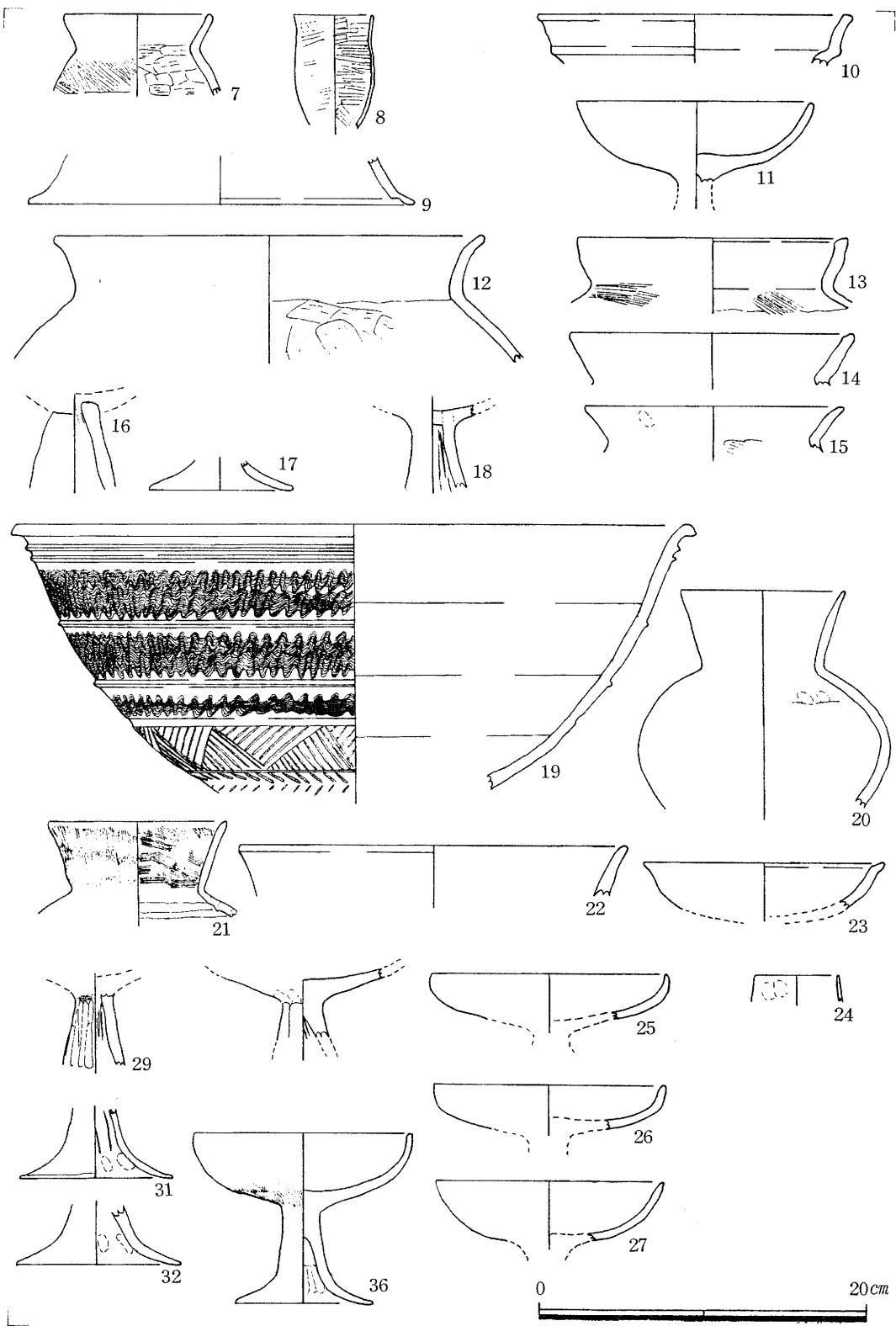
本調査は、担当者にとっては悔いの残る事情が重なるものとなった。このような状況のなかで古墳時代中期の遺構・遺物が確認できたのは幸いである。トレンチの大きさと出土遺物の量の比率から調査地近辺に集落があったのは確実だと思われる。
（済）

（註1）関川尚功「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論叢 第10冊』1985

（註2）（財）八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和59年度』1985



第13図 出土遺物実測図 (1 / 4)



第14図 出土遺物実測図 (1 / 4)

4. 成法寺遺跡（90-356）の調査

調査地 南本町一丁目27他 6筆

調査期間 平成3年3月15日、4月1日～4月6日

1. 調査経過

本調査は店舗付共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。3月15日に第1次調査としてグリット調査を行い、4月1日から6日までに第2次調査として建物中心部分を対象とするトレーニング調査を行なった。

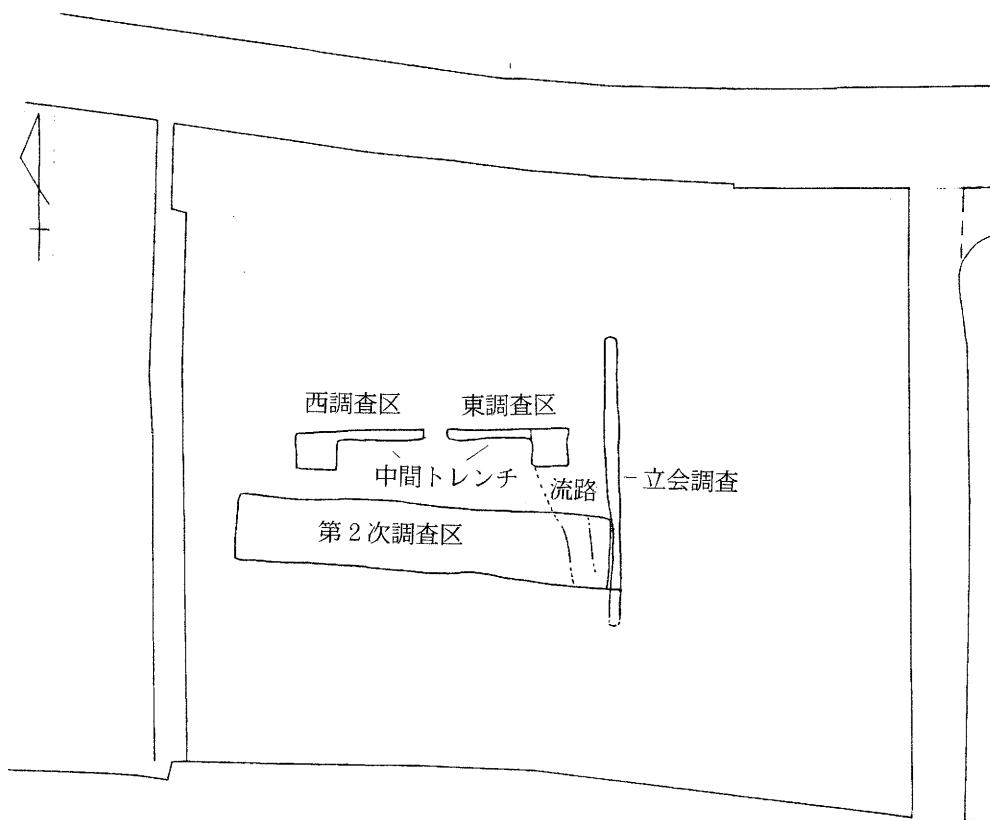
第1次調査では施工予定地の東側に第1調査区を、西側に第2調査区をそれぞれ3m四方で設定し、重機と人力を併用して掘削を行なった。ここでは近世の包含層のみしか確認することができなかつたためグリットの間に幅1mのトレーニングを設定して断面等の観察を行なったが、明確な遺構を確認することができなかつたので、さらに調査区を拡張して建物の中心部分に5m×30mのトレーニングを設定し、調査を行なうこととなつた。

2. 第1次調査

第1調査区では地表下0.5m、TP8.0mの灰白色砂層上面で井戸状遺構を確認した。

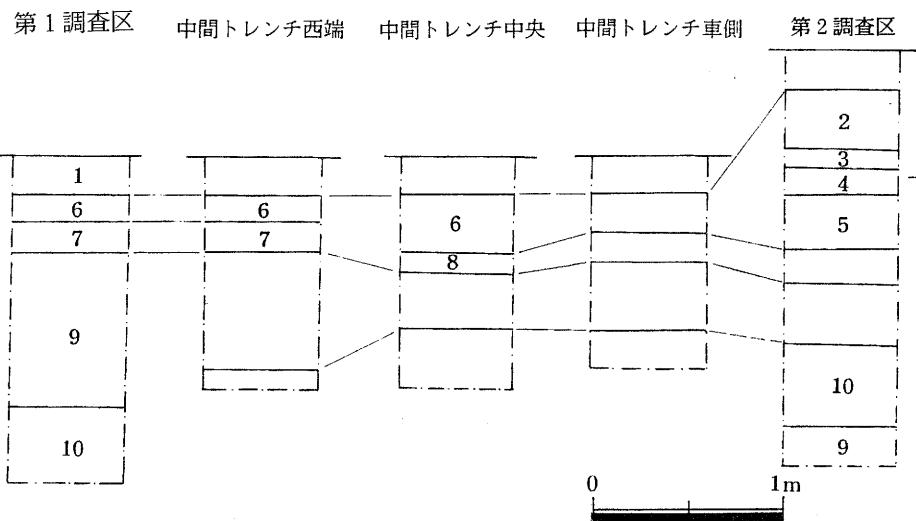


第15図 調査地周辺図 (1/13000)



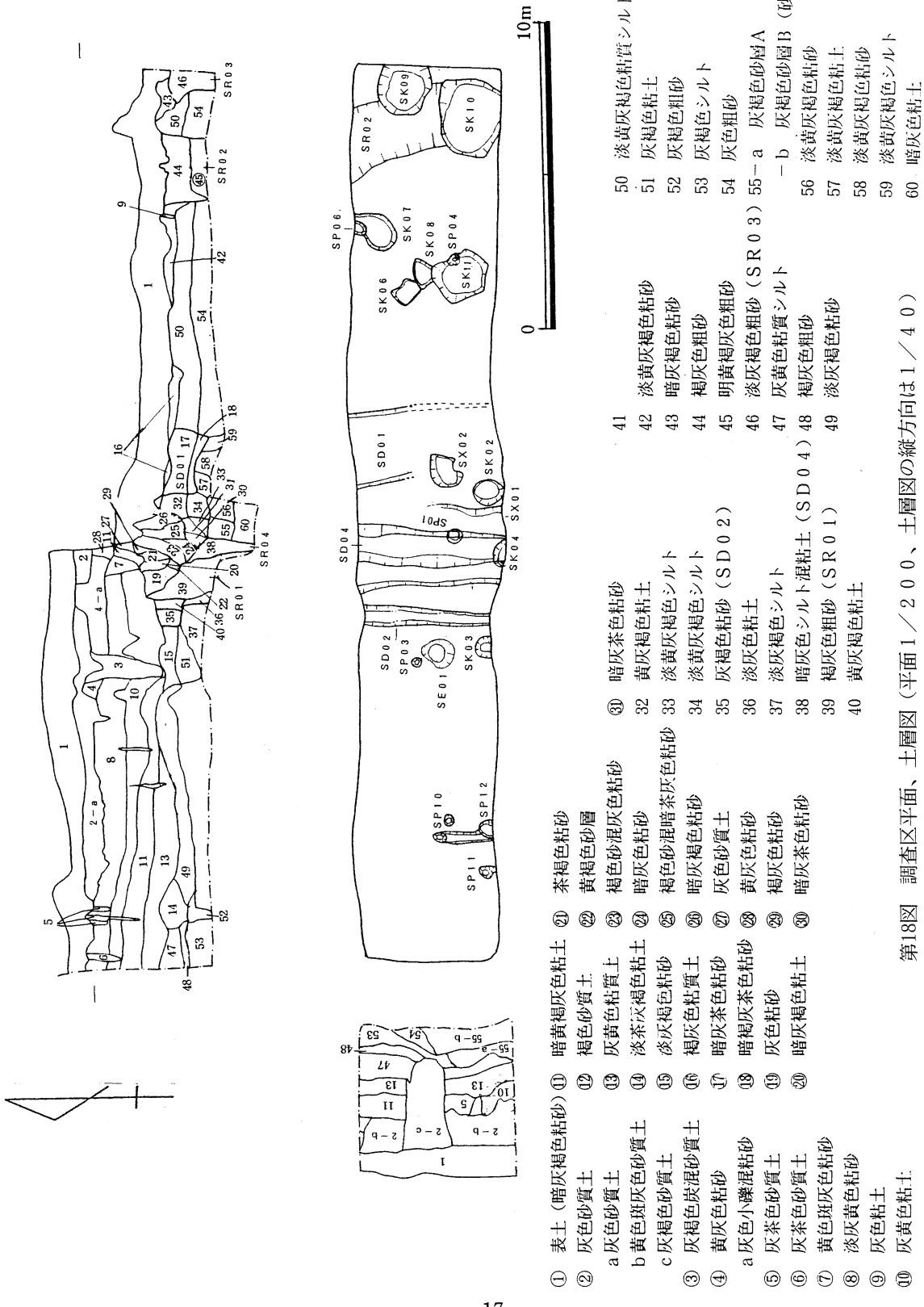
第16図 調査区設定図 (1/1600)

これは最大径 1.8m、最大幅 1 m、深さ 0.9mを測り、暗灰色粘土を埋土とする。埋土には有機物が含まれていたが、遺物は確認できなかった。この井戸状遺構のベース面となっている灰白色砂層は中間トレンチ断面では確認されておらず、暗灰色粘土層をベースとする自然流路状遺構と思われる。第2調査区では重機と人力を併用して地表2.1 mまで堀削したところ、地表下 0.5m～0.8mで近世陶磁器等を含む淡灰褐色砂質土層、灰色粘質シルト層を地表下 0.8m～1.02mで土師器片を含む灰褐色砂層を確認した。この下は地表下 2.1mまで上から順に茶灰色粘土、暗灰色粘土、灰白色砂層が堆積するが遺物は全く出土しなかった。更にグリット間に東西方向の幅 1 mのトレンチを設定し土層断面等の確認を行なったところ、第2グリットで確認した近世包含層に対応する層とこの下に堆積する暗灰色粘土、灰白色砂層を確認した。ここでも遺構・遺物は全く出土しなかった。



- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 耕作土 | 6. 淡灰褐色シルト |
| 2. 黄色斑灰色砂質土 | 7. 淡黄灰褐色シルト |
| 3. 灰褐色砂質土 | 8. 淡茶褐色粘土 |
| 4. 灰色砂質シルト | 9. 暗灰色粘土 |
| 5. 淡灰褐色砂質土 | 10. 淡灰色粗砂 |

第17図 調査区土層断面柱状図（1／40）



2. 第2次調査

(1) 基本層序

調査区ではそのやや西よりに南北方向の段があり、水田面の西側が東側より約0.4 m高くなっている。段はトレーニングのほぼ中央部分にあたっている。段の西側の土層の基本層序は上から第1層、耕作土、第2層、灰色砂質土層、第3層、淡灰黄色粘砂層、第4層、灰黄色粘土層、第5層、灰褐色砂質土、第6層、灰黄色粘土層、第7層、灰褐色シルト質粘砂層、第8層、淡灰褐色シルト層の順になる。このうち第6層から第8層は近世の包含層であり、第7層、第8層の上面は遺構検出面である。段の東側では耕作土のすぐ下のTP 8.3 mから8.5 mで第7層に対応する淡黄灰褐色粘質シルト層、第8層に対応する淡灰黄褐色シルト層を確認した。

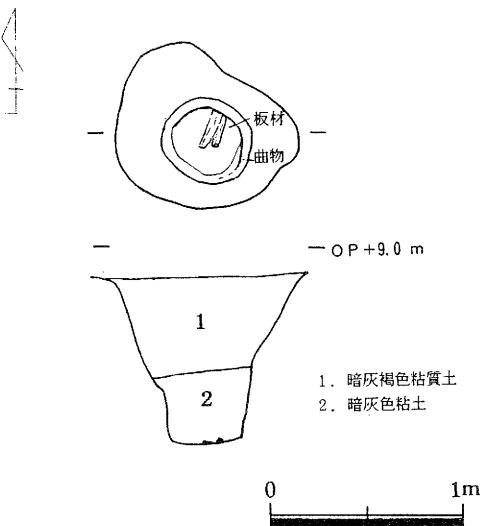
(2) 検出遺構

第6層と第7層の上面で遺構を検出した。以下それを第1遺構面、第2遺構面として記述する。第1遺構面では溝3条(SD 01～SD 03)、土坑10基(SK 02～SK 11)、ピット8基(SP 01～SP 08)、自然流路3条(SR 01～SR 03)、井戸1基(SE 01)、不明遺構1基(SX 01)を検出した。溝、自然流路はすべて南北方向のものばかりである。このうちSR 01はトレーニングの中央部分、現地形での段状部分に位置している。東肩を掘りこみによって削平されている。SD 04はSR 01の上面に形成された遺構であり、東肩を中心に削平を受けている。最大幅1.35m、深さ0.35mを測る。埋土は暗灰色シルト混粘土層である。SR 01、SD 04の東側では流路、溝の他、土坑・ピットを中心して検出している。SD 01は段状部分のすぐ東で検出した南北方向の溝である。幅1.0 m、深さ0.3mを測る。このうちSK 09、SK 10は比較的大きな土坑である。SK 09は最大径1.7m、深さ0.33mを測る。埋土は灰色粘砂層で上層は有機物を多く含み、下層は少ない。埋土から唐津焼、京焼、棧瓦、木製下駄等が出土している。SK 10は最大径2.5m、深さ0.17mを測る。埋土は褐色斑点混灰色粘土層である。底面で漆器碗が底部を下にして出土した。これらの土坑はSR 02をきってつくられている。SR 01の西側でも溝、土坑、井戸等を検出している。このうちSE 01は平面不整円形の井戸である。深さは最も深い部分で0.8 mを測る。深さ0.4 mまではすり鉢状にこれ以下は垂直に近く掘りこむ。底に曲物を置く。曲物は残存高0.08mを測る。埋土はすり鉢状部分では暗灰褐色粘質土層、これより下は暗灰色粘土層である。近世陶磁器、棧瓦などが出土している。SD 02はSE 01のすぐ東の南北方向の溝で、幅0.6 m、深さ0.15mを測る。灰褐色粘砂層を埋土とする。土師器、瓦器片、近世陶磁器等が出土している。

(3) 出土遺物

調査地では近世陶磁器を中心にコンテナ1箱分の遺物が出土した。中世の土器は混入した状態で瓦器片などが検出されたが、わずかであった。1はSD02出土した土錘である。SD02は前述したように、この他に唐津焼、京焼などの近世陶磁器片、棧瓦片等が出土している。2～6はSD04から出土した。4は土師質土器である。2はSD04から出土した染め付けの椀、5は唐津焼の皿と思われる。6は土師質系の土器で火鉢かと思われる。7、10はSK02から出土した陶磁器である。8はSK05から出土した土師質系土器の火鉢、9は瓦質の羽釜である。10～15はSK09から出土した陶磁器である。13は外面は淡緑色に発色し、いわゆる青磁染め付けといわれるものである。16は硬い焼きの土師質の土器に透明釉のかかるもので、口縁に炭化物が付着し、灯明皿として使われたものかとも思われる。17、18はSK10から出土した染め付けを施す椀である。19、20はSX01から出土したもので、19は土師質系の深鉢、20は瓦質の鉢かと思われる。21は淡灰褐色粘砂層から出土した東播系の須恵器の鉢である。21は第1次調査の西調査区の淡灰褐色粘砂層から出土したものである。

第19図 SE01平断面図(1/40)

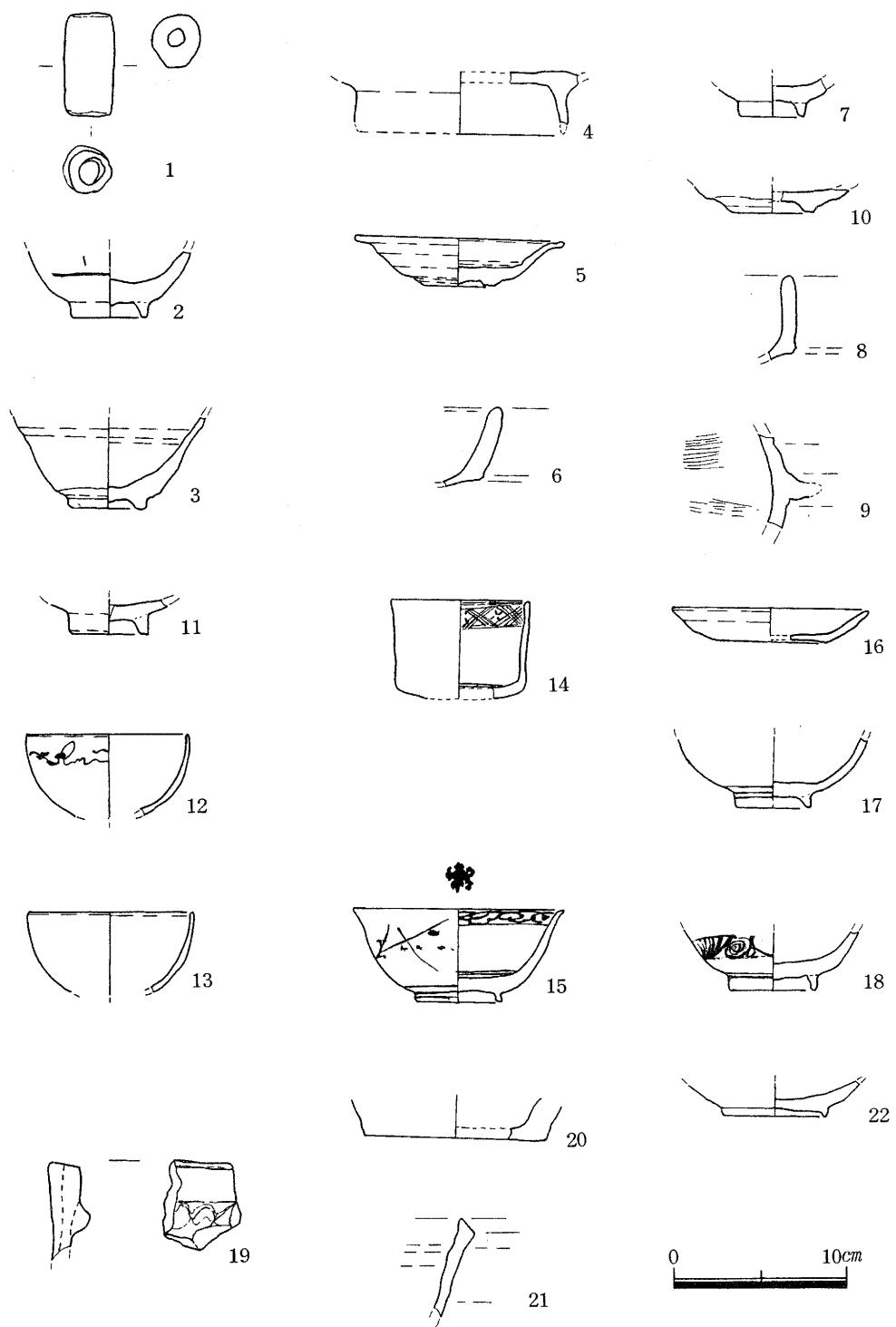


瓦質の羽釜である。10～15はSK09から出土した陶磁器である。13は外面は淡緑色に発色し、いわゆる青磁染め付けといわれるものである。16は硬い焼きの土師質の土器に透明釉のかかるもので、口縁に炭化物が付着し、灯明皿として使われたものかとも思われる。17、18はSK10から出土した染め付けを施す椀である。19、20はSX01から出土したもので、19は土師質系の深鉢、20は瓦質の鉢かと思われる。21は淡灰褐色粘砂層から出土した東播系の須恵器の鉢である。21は第1次調査の西調査区の淡灰褐色粘砂層から出土したものである。

(4)まとめ

本調査では近世の遺構面を2面検出した。特に第1面では集落の一部と思われる遺構が密度の高い状態で出土した。また、第2次調査区の中央の現地形の南北方向の段状部分の直下では自然流路SR01の埋土をきりこんでSD04がつくられており、近世段階に当初、自然流路によって画されていたところに、溝を造ってなんらかの境界とした可能性があり、現地形の段状地形の造成の意図とも関わるものかもしれない。一方、東側の隣接地では大阪府教育委員会の調査により、古墳時代の円形周溝墓が検出されており、付近の調査でも弥生時代から中世にいたる遺構、遺物を確認しているにも関わらず、本調査では包含層を全く確認できなかった。第1次調査では地表下2.0mまで、第2次調査でも地表下2.5m前後まで下層確認を行ったが、有機物を含む暗灰色粘土層とシルト、あるいは粗砂層の堆積を認めたに留まった。本調査地では近世段階と思われる自然流路を多く確認しており、これ以前の遺構・包含層はこれによる削平を受けている可能性も考えられる。

(吉田)



第20図 出土遺物実測図（1／4）

5. 弓削遺跡（90-553）の調査

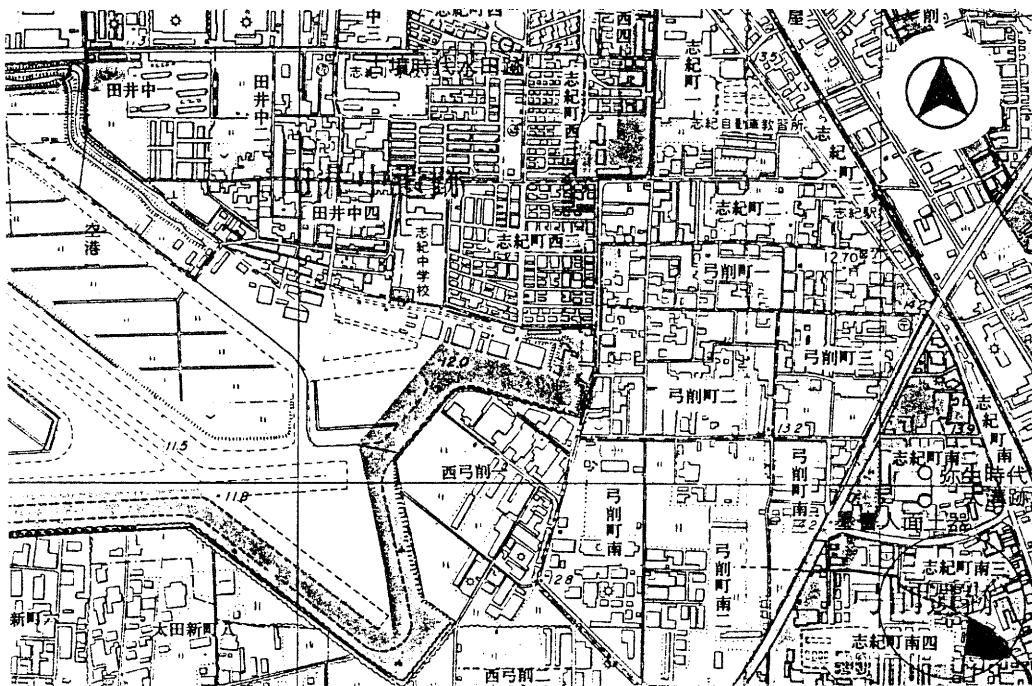
調査地 志紀町南4丁目41-1, 41-2, 43, 44, 46

調査期間 平成3年3月22日、5月8~10日

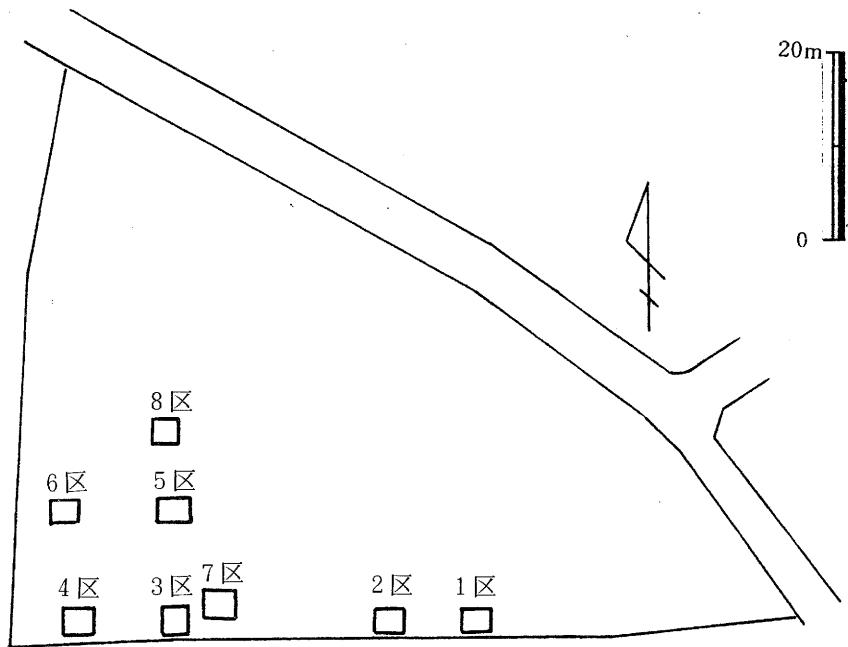
1. 調査概要

弓削遺跡は、旧大和川の長瀬川と玉串川が分岐する二俣地区の長瀬川左岸の自然堤防上に位置している。本遺跡はその名称からわかるように弓削連が支配していた地域であるといわれており、また奈良時代末期の弓削道鏡はこの地の出身と考えられている。

遺跡周辺ではこれまで当教育委員会と助八尾市文化財調査研究会によって幾度かの調査が行われているが、昭和59年度に実施された調査では弥生時代中期から後期にかけての井戸・土坑・溝等の遺構や古墳時代と奈良時代の井戸・溝等を検出しており、多量の弥生時代の土器と共に墨書き人面土器も出土している。（註1）また、本調査地から南へ約300mの柏原市の本郷遺跡においても弥生時代後期の方形周溝墓・大溝、古墳時代の住居址・井戸等とともに小銅鐸も出土している。（註2）このような調査から弓削遺跡は弥生時代から歴史時代にいたる複合遺



第21図 調査地周辺図 (1/13000)



第22図 調査区設定図 (1/800)

跡であることが判明している。

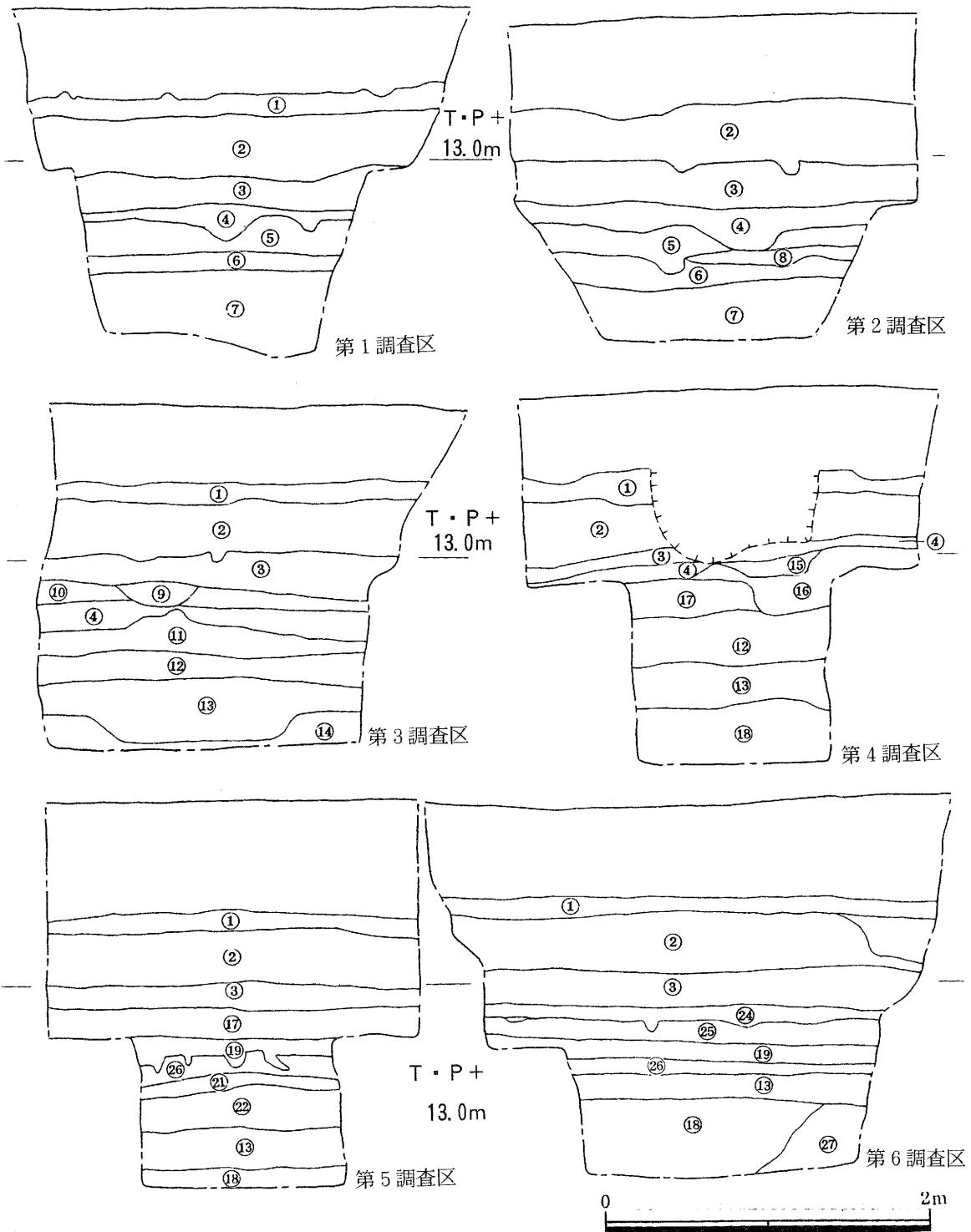
今回の調査は工場建設に伴うもので、先ず2ヶ所の調査区（第7・8区）を設定し、断面観察を実施した。その結果、第8区で遺構・遺物は検出できなかったが、第7区では地表下1.65mの暗灰色粘土とその下部層の暗灰色砂混粘土から須恵器や土師器片が出土した。さらに、遺物の出土した第7区を中心とした事業計画地の南側に6ヶ所の調査区（第1～6区）設け調査に入った。

第1区—約0.6mの盛土、0.6mの砂層が堆積しており、さらに約0.2mの灰褐色粘砂の下は約1mにわたって微砂層～細砂層が堆積している。遺構・遺物ともにみられなかった。

第2区—第1区とほぼ同様の地層の堆積を示しており、やはり遺構・遺物ともにみることができなかった。

第3区—地表下1.2m前後までは第1・2区とかわらないが、それ以下では粘土層が堆積しており、⑬暗灰色粘土層・⑭淡緑灰色粘質シルトから遺物が出土している。遺物は古墳時時代前期の甕、壺等が出土しており、時期的に隣に設けた第7区との関連が想定できる。

第4区—遺物はほとんど出土していないが、今回の調査区のなかで最も変化に富む地層の堆積を示している。地表下約0.9mから1.2mでは中世、近世の鋤溝を検出した。また調査区の



第23図 土層断面図 (1 / 4 0)

南東隅では河川に浸食されたと思われる砂層の堆積が17層から切り込まれていた。

第5区－本調査では最も多くの遺物が出土した。遺物は②暗緑灰色粘土層から集中して出土しており、断面では確認できなかったが住居あるいは溝などの遺構の中心を堀り下げた可能性も考えられる。遺物は今回のどの調査区でも確認していない弥生時代終末期の壺・甕・鉢・高杯が完形で出土している。

第6区－第5区の西側に設定したが、遺物は殆ど出土しなかったが、地表下2.0mで西への落ち込みを確認した。

2. まとめ

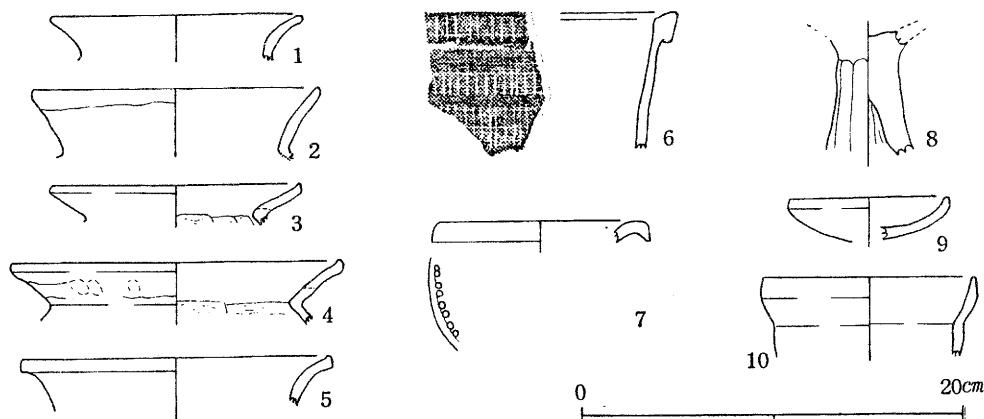
本調査では東側で旧大和川に関連すると思われる砂層の堆積を確認することができた。これは調査地の北及び東側周辺の調査でみられている。また、5区で出土した弥生時代終末期の遺物は前述した本郷遺跡でも出土しており、遺構の拡がりを考える資料となろう。（著）

- ①旧耕土
- ②黄褐色細砂～シルト
- ③灰褐色粘砂
- ④灰白色微砂～微砂シルト
- ⑤暗オリーブ灰色粘砂
- ⑥暗灰色小礫混粘砂
- ⑦灰白色～黄灰色細砂
- ⑧暗青灰色砂質粘土
- ⑨淡青灰色粘砂
- ⑩淡黄褐色粘砂
- ⑪灰黒色粘土
- ⑫明灰色粘土
- ⑬暗灰色粘土
- ⑭淡緑灰色粘質シルト
- ⑮暗褐色粘砂
- ⑯淡青灰色粘質土
- ⑰灰色粘砂
- ⑱暗灰色砂混粘土
- ⑲灰色シルト
- ⑳灰黒色粘砂
- ㉑褐灰色粗砂
- ㉒暗緑灰色粘土
- ㉓暗青緑灰色砂質土
- ㉔淡灰褐色砂混粘砂
- ㉕淡灰色粘砂
- ㉖灰色粗砂
- ㉗灰色粘土

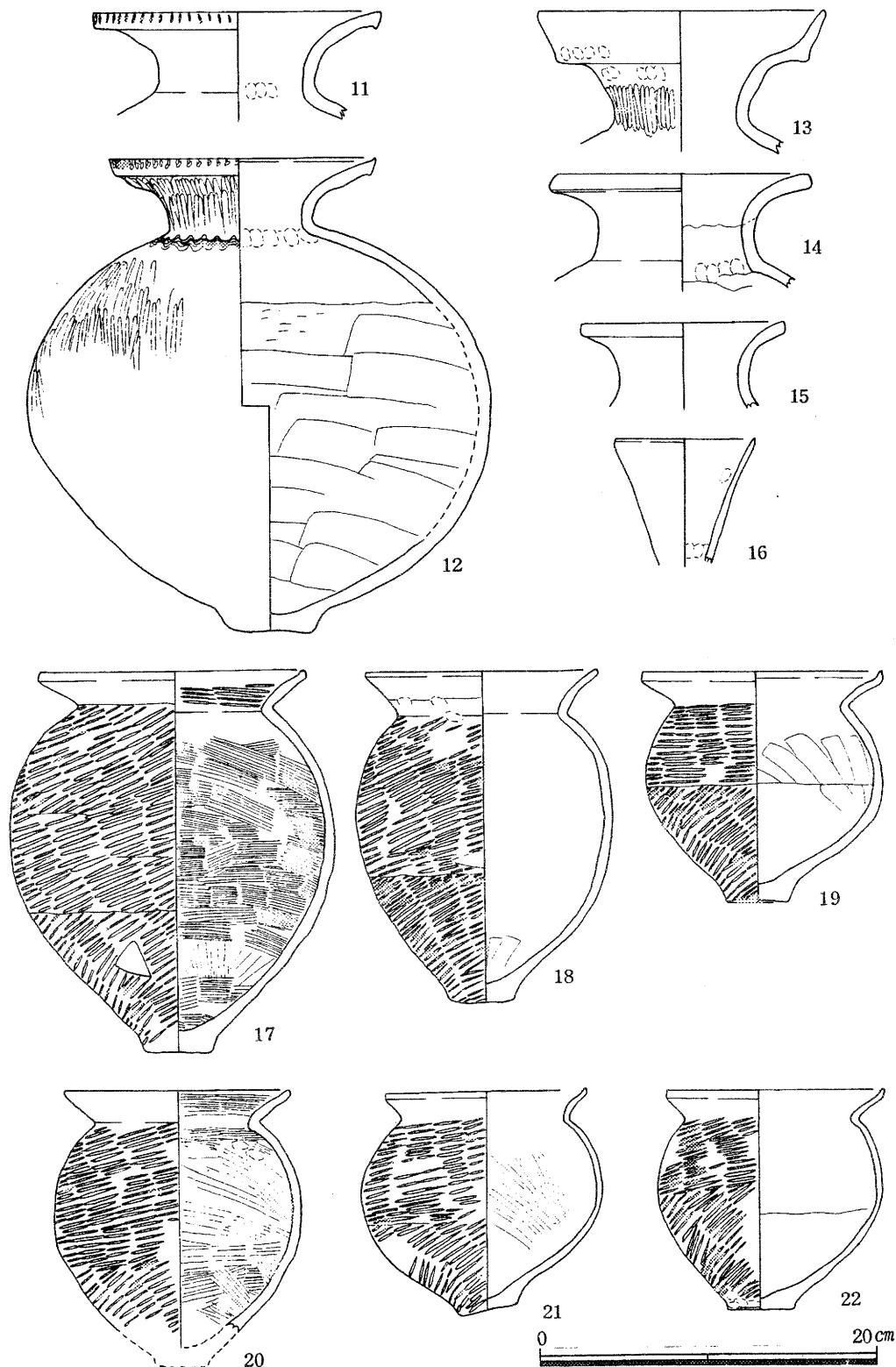
参考文献

（註1）（財）八尾市文化財調査研究会『昭和59年度事業概要報告』1985

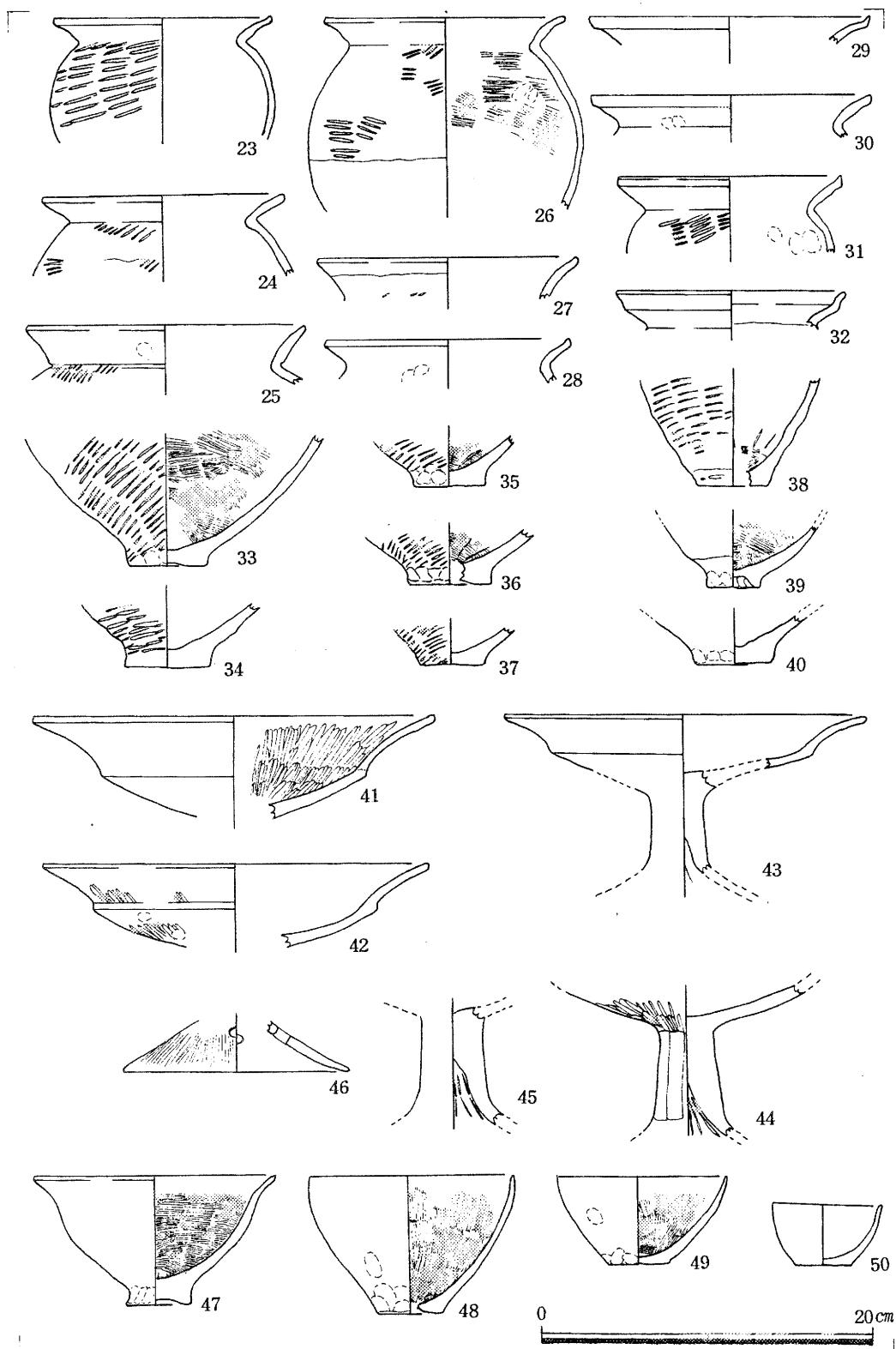
（註2）柏原市教育委員会「本郷遺跡（91-1次調査）現地説明会資料」1991, 7.20



第24図 第3調査区出土遺物実測図（1／4）



第25図 第5調査区出土土器実測図 (1 / 4)



第26図 第5調査区出土土器実測図（1／4）

遺物観察表

番号	器種	部 位	法 量(cm) 径 現高		調整の特徴	胎 土	色 調	焼成	備 考
1	甕	口縁部	12.0	2.3	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 角閃石、金雲母 チャート	黒灰色	良好	
2	甕	口縁部	15.0	3.5	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好、 長石 金雲母、チャート	淡灰色	良好	
3	甕	口縁部	13.0	1.8	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 雲母 角閃石	淡茶褐色	良好	
4	甕	口縁部	15.0	3.1	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ヘラケズリ	やや粗 雲母 長石、角閃石	淡灰色	良好	
5	壺	口縁部	15.0	2.7	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 雲母 長石、角閃石(0.1mm)	暗茶灰色	良好	
6	壺	口縁部	—	7.2	外面 簾状文 内面 ナデ	やや粗 長石、角閃石、雲母(1mm)	暗茶灰色	良好	
7	壺	口縁部	—	1.1	外面 ナデ 内面 ナデ	良好 石英、長石(0.1mm)	暗茶色	良好	口縁上部に 竹管文
8	高坏	柱 状 部	—	6.1	外面 イタナデ 内面 シボリ目	やや粗 長石、石英、 角閃石、金雲母	橙褐色	良好	
9	器台	口縁部	8.4	2.2	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	精良	淡橙灰色	良好	
10	鉢	口縁部	11.0	3.1	外面 剥離のため不明 内面 "	やや粗 雲母(1mm)、 長石、石英	灰白色	良好	
11	壺	口縁部	16.8	6.0	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 角閃石(1~3 mm含む) 金雲母、長石、石英	橙褐色	良好	端部に キザミメ
12	壺	完 型	15.5	28.0	外面 ヘラミガキ 内面 イタナデ	やや粗 長石、(1~4 mm)、石英 チャート、角閃石	淡橙褐色	良好	頸部に波状文
13	壺	口縁部	17.2	7.9	外面 ヘラミガキ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石、石英 金雲母、チャート(1~3 mm)	淡黄褐色	良好	
14	壺	口縁部	15.0	6.3	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗、 長石(3mm) 角閃石、石英、チャート	淡褐灰色	良好	
15	壺	口縁部	12.2	5.0	外面 ナデ、ヘラミガキ 内面 ナデ	やや粗、 長石 石英、金雲母、チャート(1mm)	橙茶色	良好	
16	壺	口縁部	8.3	7.5	外面 剥離のため不明 内面 "	やや粗 長石、石英、チャート	淡灰白色	良好	
17	甕	完 型	口径 15.8	底径 3.9	22.9 外面 タタキ (4/1.5 cm) 内面 ハケメ	やや粗 長石、石英 金雲母(0~1 mm)	橙 色	良好	
18	甕	完 型	口径 13.9	底径 3.8	19.7 外面 タタキ (5/1.8 cm) 内面 ナデ	やや粗 長石(8mm)、石英、角閃石 金雲母(1~3 mm)	橙褐色	良好	
19	甕	完 型	口径 12.9	底径 3.8	13.8 外面 タタキ (4/1.8 cm) 内面 ナデ、ハケメ	やや粗 金雲母(1mm) 長石、石英	淡灰白色	良好	

番号	器種	部 位	法 量 (cm) 径 現高			調 整 の 特 徴	胎 土	色 調	焼 成	備 考
20	甕	口 縁 部 体 部	13.1		14.5	外面 タタキ (5/2.1 cm) 内面 ハケメ	やや粗 長石、石英、金雲母 チャート(1~3 mm)	淡灰褐色	良好	
21	甕	完 型	口径 11.8	底径 3.4	13.5	外面 タタキ (4/2.2 cm) 内面 イタナデ	やや粗 長石、石英、雲母 チャート(1mm)	橙褐色	良好	
22	甕	完 型	口径 12.8	底径 3.9	13.0	外面 タタキ (5/2.1 cm) 内面 ナデ	やや粗 長石、石英、チャート(1mm)	橙褐色	良好	
23	甕	口 縁 部 体 部	13.4		7.5	外面 タタキ 内面 ナデ	やや粗 長石(1~4 mm)、石英 雲母、チャート	暗橙褐色	普通	
24	甕	口 縁 部 体 部	14.8		4.7	外面 ナデ、タタキ 内面 ナデ	やや粗 長石、石英(1~4 mm) 雲母、チャート	橙褐色	普通	
25	甕	口 縁 部	16.6		3.2	外面 タタキ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石、石英、角閃石 チャート	淡橙灰色	良好	
26	甕	口 縁 部 ～ 脊 部	14.2		11.7	外面 タタキ 内面 " ヨコナデ、体部(上) ハテ (下) ハテ	粗 長石、雲母 石英(3mm)、角閃石	橙茶色	普通	
27	甕	口 縁 部	15.5		2.3	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石(1mm)	橙茶色	良好	
28	甕	口 縁 部	16.7		2.2	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石(1~5 mm)、石英 チャート	淡橙灰色	普通	
29	甕	口 縁 部	13.1		1.7	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石、石英 金雲母、チャート(1~3 mm)	明茶色	良好	
30	甕	口 縁 部	17.0		2.4	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	やや粗 長石、石英、金雲母 石英(1~5 mm)	橙灰色	普通	
31	甕	口 縁 部	13.4		4.7	外面 タタキ 内面 ナデ、ユビオサエ	やや粗 長石、石英、角閃石(1mm)	橙灰色	良好	
32	甕	口 縁 部	13.5		2.3	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗 長石、石英、雲母(1mm)	淡灰色	良好	複合口縁
33	甕	体 底 部	(4.5)		7.7	外面 タタキ (5/2 cm) 内面 ハケメ	やや粗 長石、石英、雲母(1mm)	淡茶灰色	良好	
34	甕	底 部	(5.0)		3.7	外面 タタキ (3/1.5 cm) 内面 _____	やや粗 長石、石英、金雲母(1mm)	淡茶褐色	良好	
35	甕	底 部	(4.2)		2.8	外面 タタキ (3/1.5 cm) 内面 ハケメ (15/0.8cm)	やや粗 長石、石英、金雲母(1mm)	淡茶褐色	良好	
36	甕	底 部	(4.6)		2.9	外面 タタキ (4/1.5 cm) 内面 ハケメ	やや粗 長石、石英、雲母	淡茶褐色	良好	
37	甕	底 部	(3.8)		2.2	外面 タタキ (6/1.8 cm) 内面 _____	やや粗、長石 石英、チャート、礫	橙色	良好	
38	甕	体 底 部	(4.2)		6.5	外面 タタキ (5/1.3 cm) 内面 ナデ	やや粗 長石、雲母(0.1mm)	淡茶褐色	良好	

番号	器種	部 位	法 量 (cm) 径 現高		調 整 の 特 徵	胎 土	色 調	焼成	備 考
39	鉢	底 部	(5.0)	3.7	外面 ナデ 内面 ハケナデ	やや粗 長石、石英 チャート	淡橙灰色	普通	底部-上げ底
40	壺	底 部	(4.3)	2.2	外面 ナデ、底部ユビオサエ 内面 ナデ	やや粗 長石、石英、金雲母 角閃石(1mm)	橙茶色	良好	
41	高坏	坏 部	24.1	6.2	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	やや粗 長石、角閃石、チャート(1mm)	橙 色	良好	
42	高坏	坏 部	23.1	7.5	外面 ヘラミガキ 内面 シボリ目	やや粗 長石、石英、チャート(1mm)	淡橙灰色	良好	
43	高坏	坏部柱状部	21.6	9.4	外面 ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	やや粗 長石、石英、角閃石(1mm)	淡橙茶色	良好	
44	高坏	坏部柱状部		8.4	外面 ヘラミガキ 内面 シボリ目	やや粗 長石、石英 雲母、チャート、石楽(1~4mm)	淡橙褐色	良好	
45	高坏	柱 状 部		6.5	外面 ヘラミガキ 内面 ナデ	やや粗 長石、石英、金雲母(1mm)	橙 色	良好	
46	高坏	裾 部	裾 径 13.6	3.1	外面 ハケメ 内面 ハケの後ナデ	やや粗 長石、石英、金雲母	茶褐色	良好	
47	鉢	完 型	口径 14.3	底径 3.9	7.9	外面 ナデ、底部ユビオサエ 内面 ハケ、ヨコナデ	やや粗 長石、石英 金雲母(1~3 mm)	橙 色	良好
48	鉢	完 型	口径 12.3	底径 3.8	8.5	外面 ナデ、底部ユビオサエ 内面 ハケメ	やや粗 長石、石英、雲母、 角閃石(1~3 mm)	橙 色	良好 底部穿孔 径 1.2cm
49	鉢	完 型	口径 10.2	底径 3.6	3.6	外面 ナデ、底部ユビオサエ 内面 ハケナデ (13本/1.4cm)	やや粗 石英、雲母、長石 チャート(1~2 mm)	橙 色	良好
50	鉢	完 型	口径 5.5	底径 3.3	3.9	外面 ナデ 内面 ナデ	やや粗 石英、チャート 長石 3mm、雲母 1mm	橙 色	良好

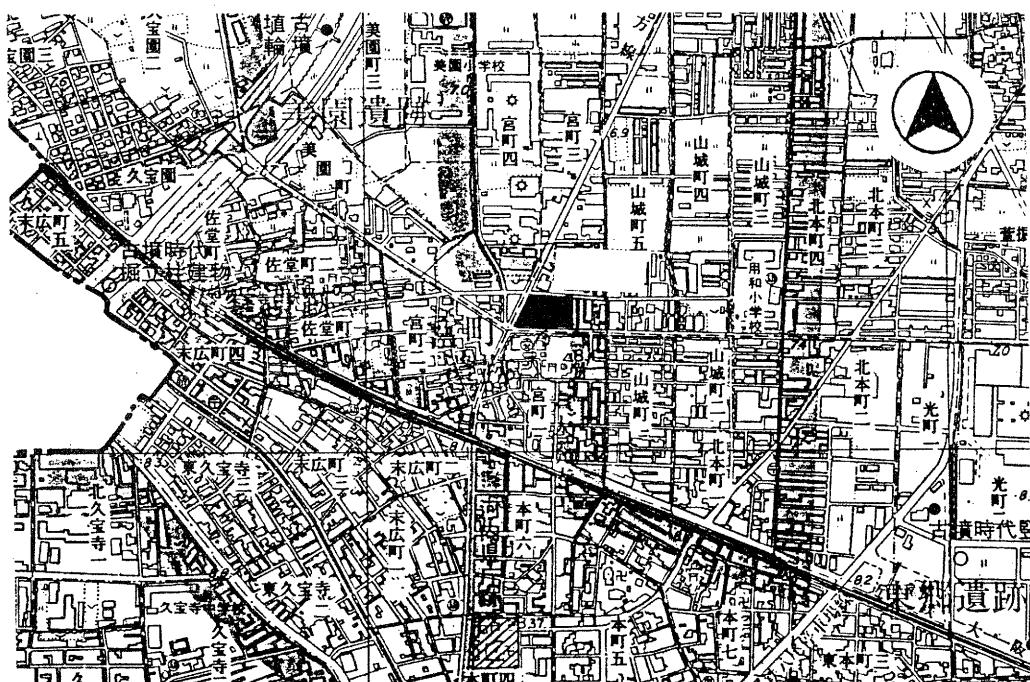
6. 宮町遺跡（90-615）の調査

調査地 宮町3丁目94-1

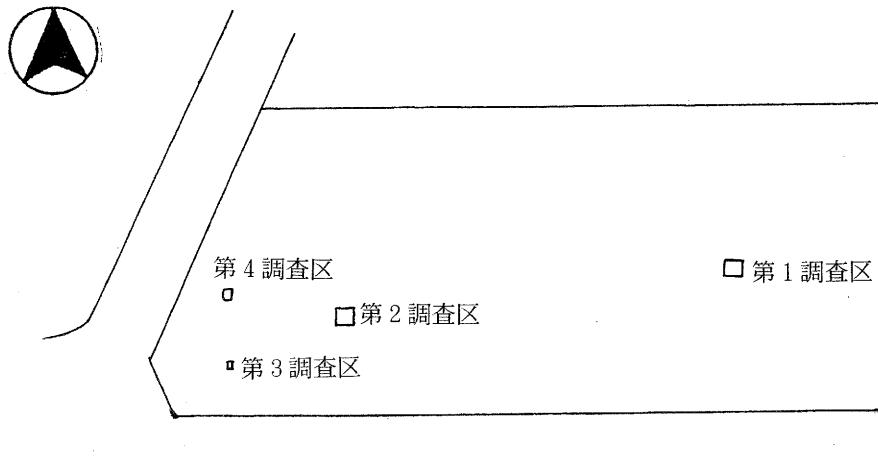
調査期間 平成3年3月20日、6月15日

1. 調査概要

本調査は店舗建設に伴う遺構確認調査である。調査は3月20日に行なった事前の試掘調査とこの結果を受けて本調査の南西調査区で検出した瓦積遺構の範囲確認を目的として、6月15日に行なった調査とに分かれる。試掘調査は施工予定地の東側に第1調査区を、西に第2調査区を、それぞれ2m四方で設定した。第1調査区では地表下1.0mまで重機と人力を併用して掘削し断面観察を行なったところ、地表下0.5m（TP 6.5m前後）の黄灰白褐色砂質土層上面でピット等の遺構を検出した。この上の灰色砂質土層、暗灰色砂質土層には平安時代後期を中心とする遺物が含まれている。同様に第2調査区でも地表下1.0mまで掘削したところ、地表下0.8m（TP 6.2m前後）で黄灰白褐色砂質土層を確認し、この上面で溝を一条検出した。この溝は南壁での検出幅1.2m、最大検出長1.8mを測り、堆積は暗灰色礫混砂層である。この埋土には炭が混じっていた。この上には第1調査区で確認したのと同じ包含層を確認してい



第27図 調査地周辺図 (1/13000)



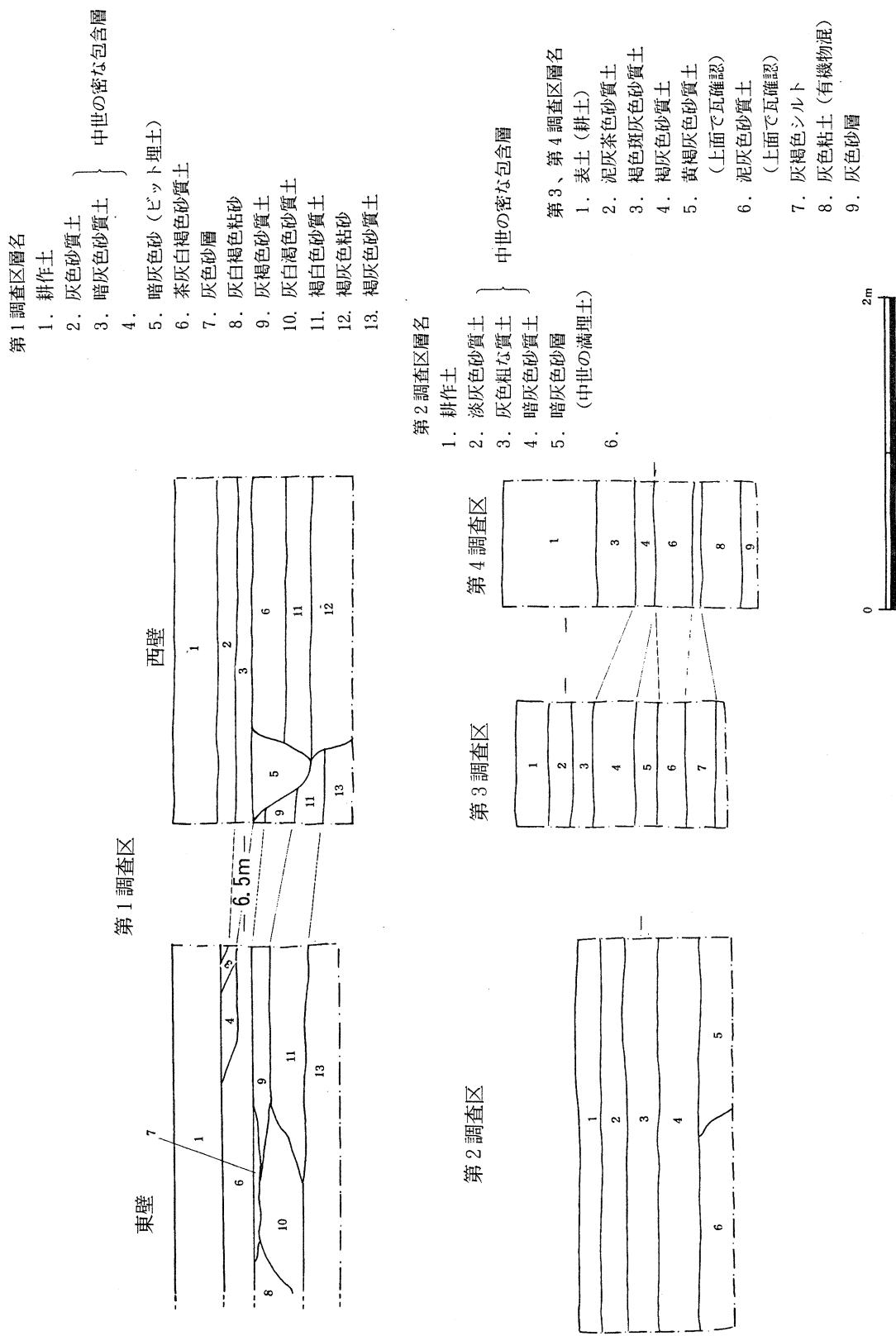
第28図 調査区設定図 (1/800)

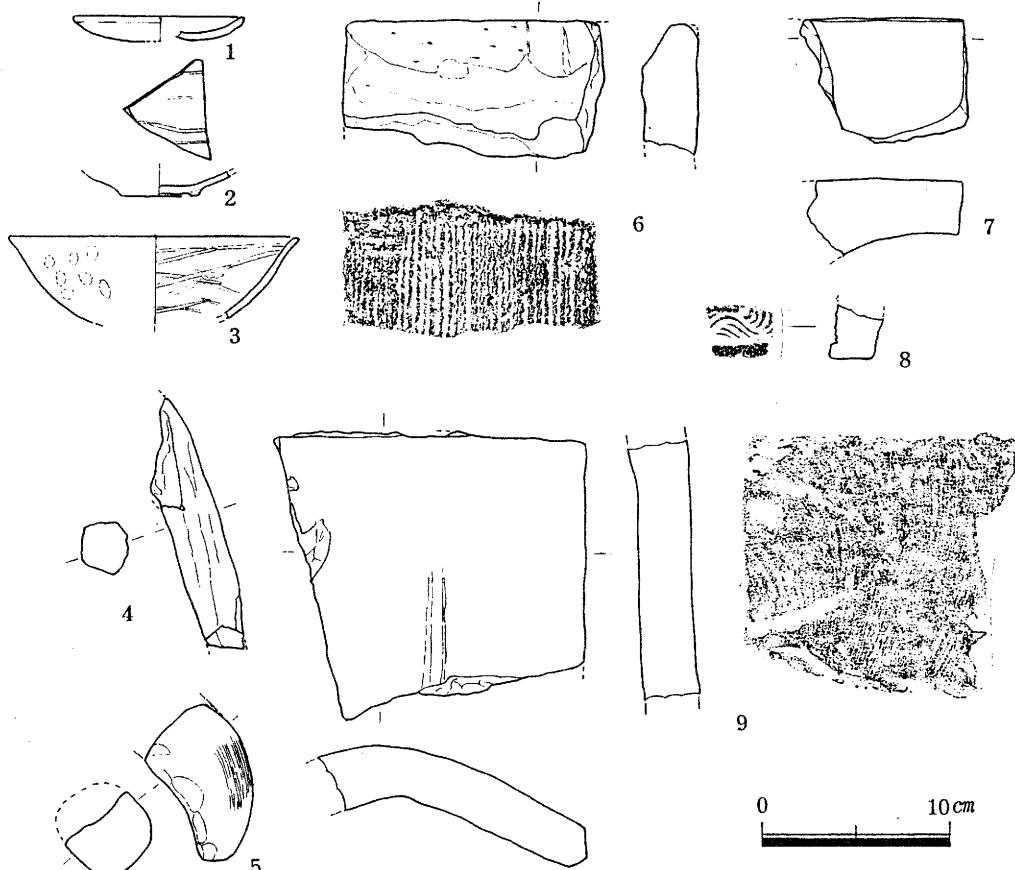
るが、層厚は 0.6mと厚く、3層に分かれる。遺構面となる黄灰白褐色砂質土層、褐白色砂質土層にも土師器片などが含まれている。

6月15日に行なった瓦積遺構の範囲確認を目的とする調査では、施工予定地の南西部分に1m四方の調査区を2ヶ所設定した。それぞれ跡八尾市文化財調査研究会の調査地の東を第3調査区、北西部を第4調査区とする。第3調査区では人力で地表下 1.3mまで掘削したところ、地表下 0.4m～0.75m (TP 6.25m～6.6m) で中世の包含層と思われる淡灰色砂質土層を確認した。第4調査区では人力で地表下1.6 mまで堀削したところ、地表下0.92m～1.26m、(TP 6.16m～6.44m) で少量の瓦片を含む褐黄色淡砂質シルト層灰褐色シルト層を確認した。また、褐黄色シルト層上面で3～4点の瓦片を確認した。この面が瓦積状遺構と対応する可能性はあるが、瓦の密度は極薄で後世の削平等を受けている可能性が高い。

次に出土遺物について簡単に述べたい。第30図は第1調査区、第2調査区で出土した遺物である。1～3及び9は第1調査区の遺構ベース層である黄灰白褐色砂質土層より出土した。3はやや深い椀形態の瓦器である。内面に密に暗文を施す。これらは12世紀末から13世紀頃のものであろう。9は第1調査区で出土したが出土層は不明である。凹面の布目は板状工具でつよくなで消している。4～8は第2調査区出土土器である。4、7、8は遺構面直上の包含層、暗灰色砂質土層からの出土である。4は瓦質土器三足の脚部、7は瓦、8は軒平瓦で瓦当面には波状の文様を施す。5は溝状遺構から出土した瓦質土器三足の脚である。

第29図 調査区基本層序模式図（1／40）





第30図 出土遺物実測図（1／4）

2. まとめ

本調査地は昭和56年に八尾市教育委員会により発掘調査の行なわれた穴太神社の北側に近接する。この調査では江戸時代の文献に千眼寺として記録されている廃寺に関連するものと思われる瓦集積、礎石などが確認されている。第1次調査で確認した遺構面、第2次調査でその範囲を確認した瓦集積はこれと密接な関連をもつものであり、千眼寺跡の北限を考える上で重要なである。

（吉田）

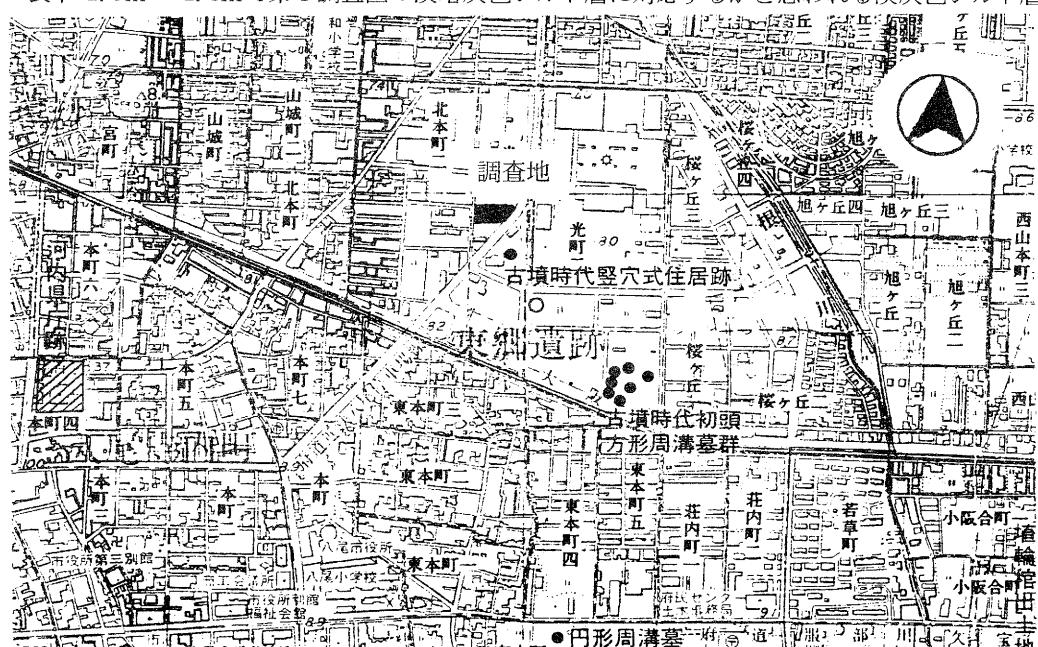
7. 東郷遺跡（91-008）の調査

調査地 光町1丁目37番地

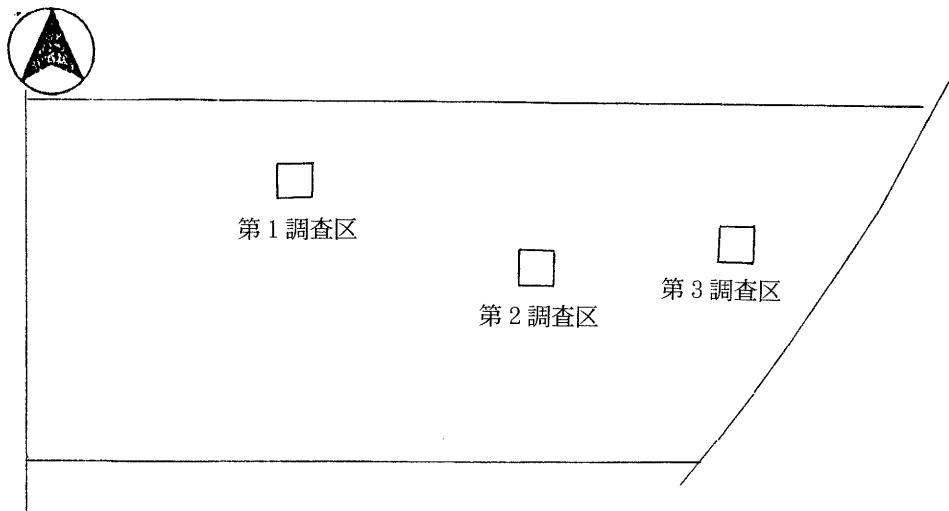
調査期間 平成3年4月9日

1. 調査概要

本調査は工場付自動車展示場建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の西側に第1調査区を、東側に第3調査区を、中央に第2調査区を、それぞれ3m四方で設定した。第1調査区では地表下2.2mまで掘削したところ、地表下1.6m～1.7mで平安時代頃の土器を含む黄灰褐色粘土層を確認した。この下の地表下1.8m～2.0mで弥生時代後期頃の包含層である暗灰褐色粘土層を確認した。断面でこの暗灰褐色粘土層をきりこむ径0.46m、深さ0.18mの土坑を確認した。これは灰色粘砂層を埋土する。庄内式土器の土器の甕が1個体ほぼ完形で、口縁を上にしてやや東に傾いた状態で出土した。また、弥生土器畿内第V様式の甕が淡暗灰色シルト層の下部、下の層の暗灰色粘土層に載るような状態で出土した。これもほぼ完形に近い状態で口縁を上にして東側に傾いた状態で出土した。第2調査区では地表下3.0mまで掘削し、地表下2.0m～2.4mで第1調査区の淡暗灰色シルト層に対応するかと思われる淡灰色シルト層



第31図 調査地周辺図（1/13000）



第32図 調査区設定図 (1/600)

を確認したが、遺物はほとんど出土しなかった。第3調査区では地表下2.8mまで掘削したが、地表下1.6m～2.8mで自然流路の埋土と思われる灰白色粗砂層、褐灰色砂層を確認したにとどまった。

出土遺物はほとんど第1調査区出土である。1はA地点の土坑状遺構から出土した庄内式土器の甕である。器壁は極薄で、外面調整は体部上半は、上からみて時計回りの方向の細かいタタキを施し、下半はハケによりタタキをなで消す。2は調査区の最下の暗灰色粘土直上（B地点）で検出した弥生式土器畿内第V様式期に相当する甕である。器高12.5cmの小型の甕である。

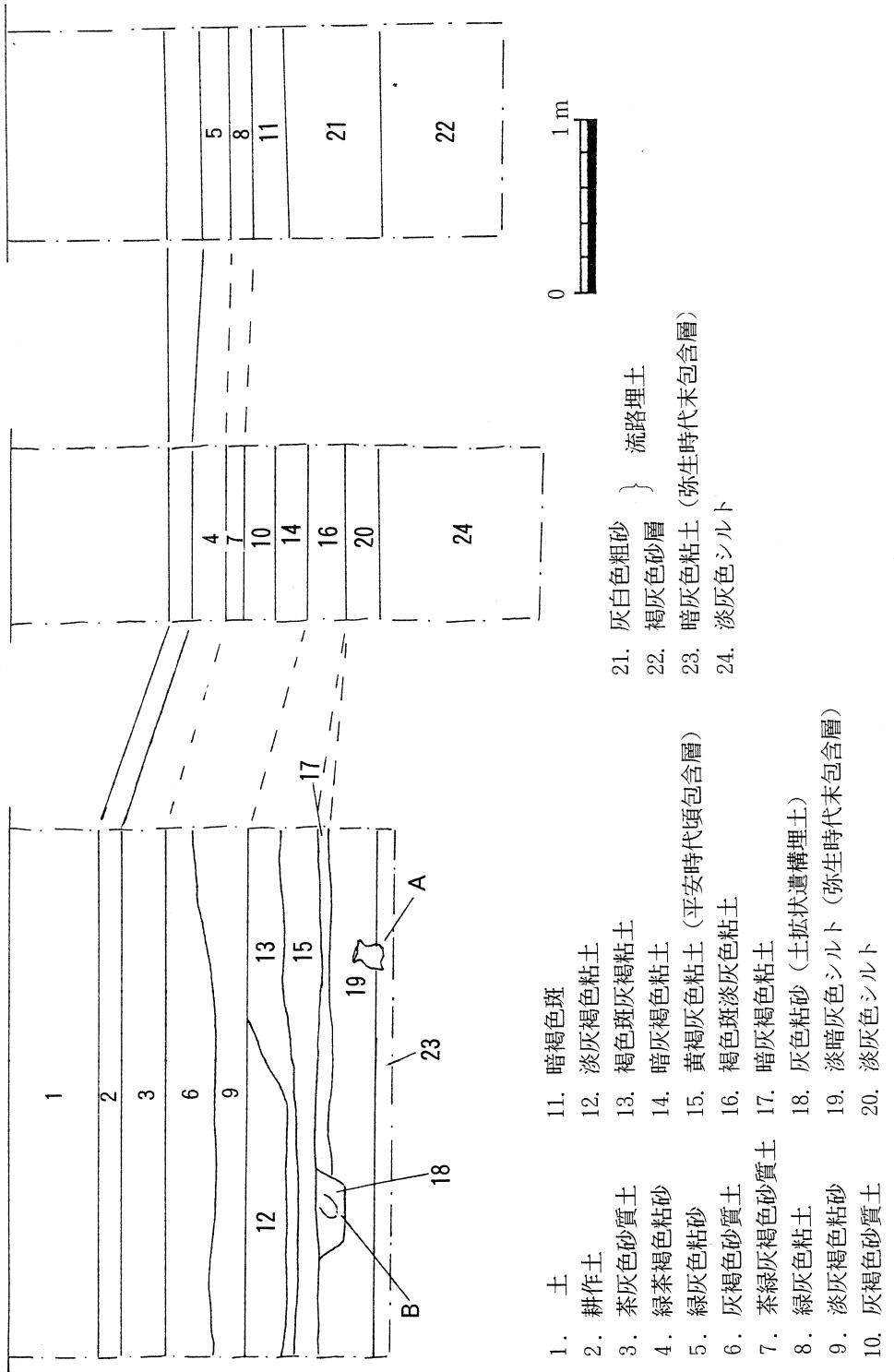
本調査では調査区の西側で弥生時代末から古墳時代前期にかかる良好な遺構面及び包含層を確認した。しかしこの包含層は東側へは続いていかないようであり、東端では自然流路を確認したのみであった。このようなことから本調査成果は東郷遺跡の集落域等の範囲を推定する際に重要な資料となるものと思われる。

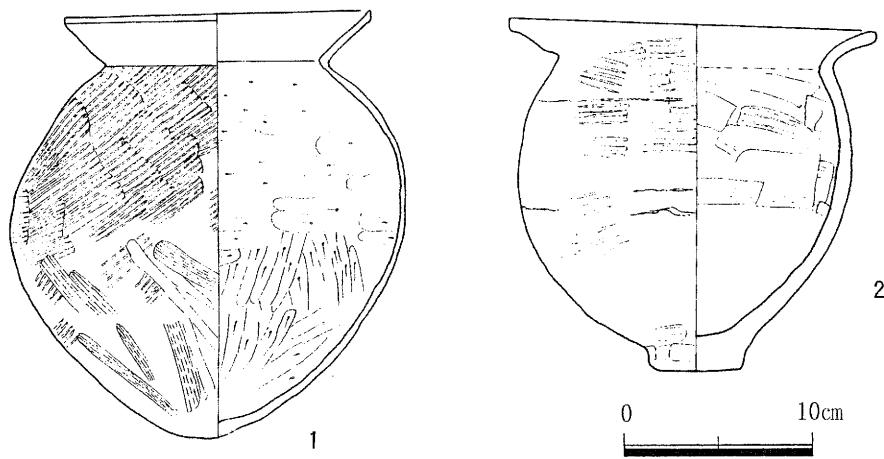
(吉田)

第1調査区

第2調査区

第3調査区





第34図 出土遺物実測図 (1 / 4)

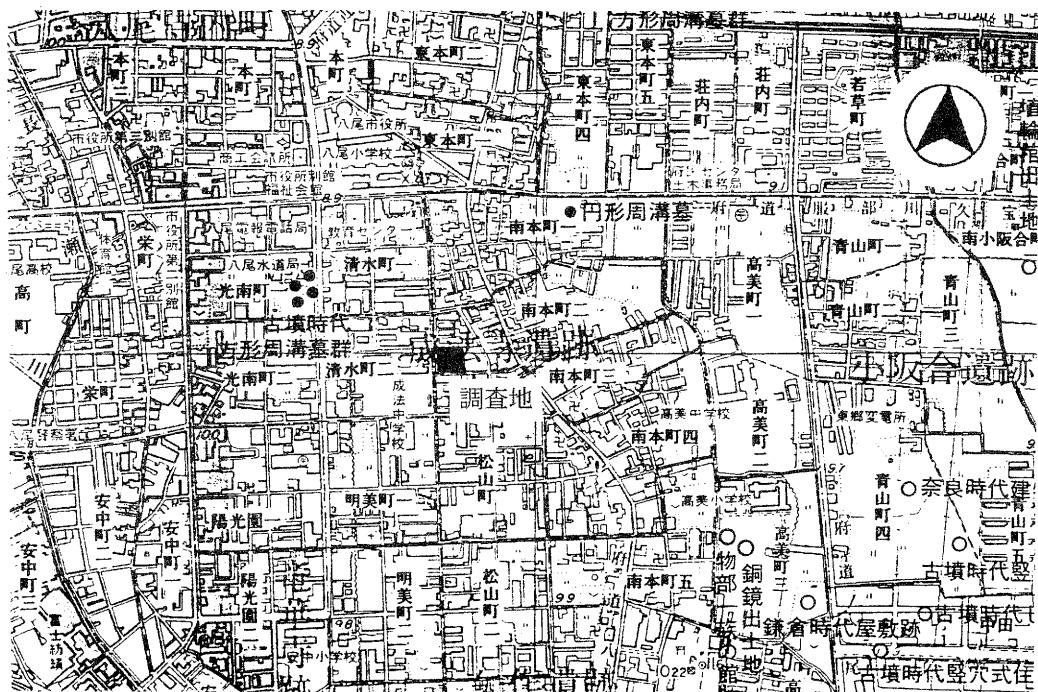
8. 成法寺遺跡（91-014）の調査

調査地 南本町2丁目97番地の1

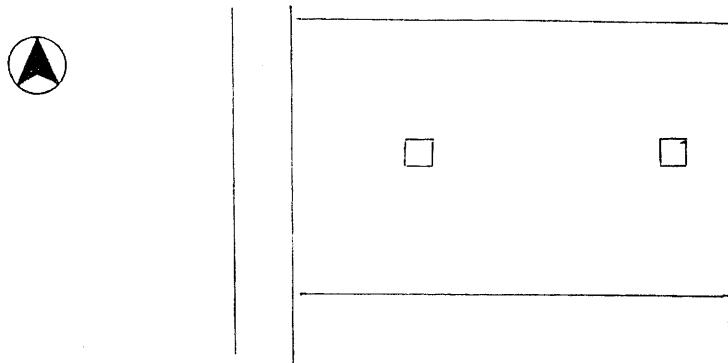
調査期間 平成3年4月15日

1. 調査概要

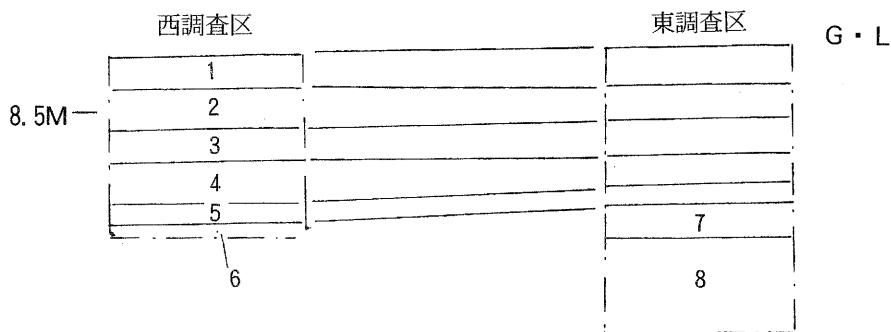
本調査は共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の西側と東側に3m四方の調査区をそれぞれ設定した。西調査区では地表下1.0mまで重機と人力を併用して掘削し断面観察を行なったところ、地表下0.55m～0.9m、TP 8.25m～7.9m付近で飛鳥時代頃の土器を大量に含む灰茶褐色粘質土層、灰褐色粘土層を確認した。東調査区では地表下1.5mまで掘削した。地表下0.6m～0.8m、TP 8.2～8.0mで西調査区と対応する包含層を確認したが、遺物の出土量は少なかった。地表下0.8m以下は灰色粘土の堆積であった。第38図は第1調査区の包含層出土の土器である。1、2は須恵器の杯と蓋である。3は土師器の瓶、5は羽釜である。6は土師器の高杯のミニチュアである。残存高3.7cmを測り、手づくねによるものである。須恵器の形態等から7世紀前半頃の時期の所産であろう。



第35図 調査地周辺図 (1/13000)



第36図 調査区設定図 (1/1000)

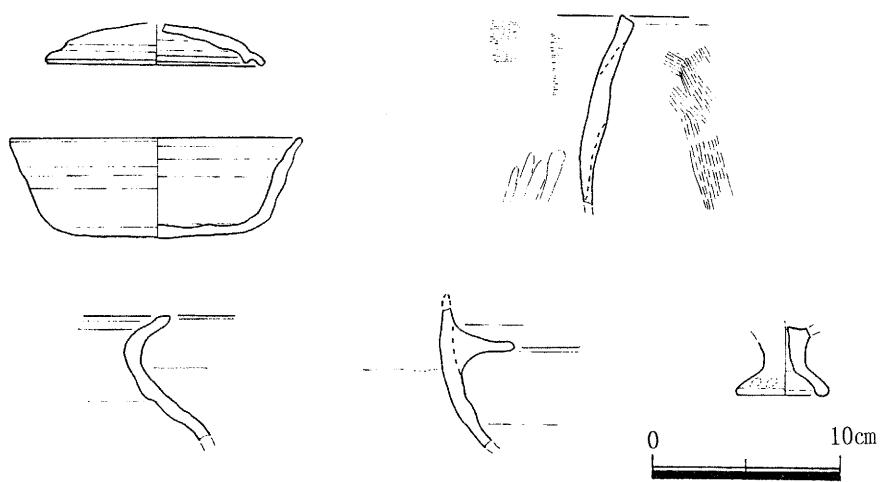


第37図 基本層序模式図 (1/40)

2.まとめ

本調査では地表下 0.6m という比較的浅いところから 7世紀代の土器が高い密度で出土した。本調査地に隣接する成法中学校校内では数次にわたる調査が行なわれており、古墳時代～中世にいたる遺構・遺物が確認されている。このなかには奈良時代の掘立柱建物・土坑や、7世紀代の竪穴式住居跡なども検出されている。本調査はこれらと密接な関連をもった遺構の存在を示唆するものとして注目される。

(吉田)



第38図 出土遺物実測図（1／4）

9. 東郷廃寺（90—531）の調査

調査地 桜ヶ丘2丁目59

調査期間 平成3年4月22~26, 30日、5月1日

1. 調査概要

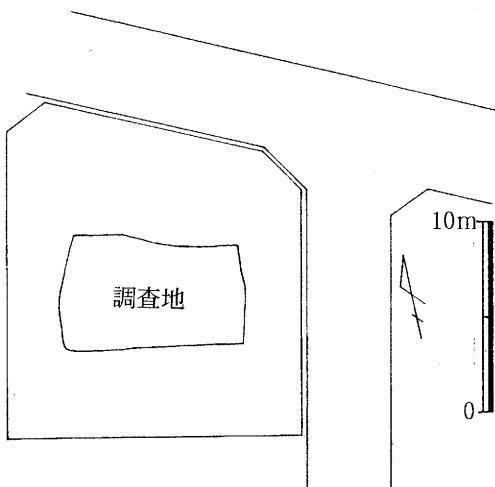
今回調査した東郷廃寺は、東郷遺跡の東端中央部に位置している。東郷遺跡はこれまで八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会、大阪府教育委員会によって調査されており、弥生時代中期からの遺物がみられ、古墳時代前期以降の墓域を持つ集落が確認されている。また平安時代から鎌倉時代にかけての井戸・柱穴・水田などが検出されており、弥生時代中期から中世にいたる複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は事務所建設に伴って実施したものである。調査は事業計画地に5m×9mの調査区を設定し、地表下1.05mまでを重機によって掘削し、以下0.2mを人力で堀削を行った。

遺物包含層は地表下1.10m前後の褐色粘質土である。この包含層は約0.2mの厚さで堆積している。遺物は須恵器・土師器・瓦などが出土地しているが、奈良時代から平安時代初頭にかけ



第39図 調査地周辺図 (1/13000)



第40図 調査区設定図 (1/400)

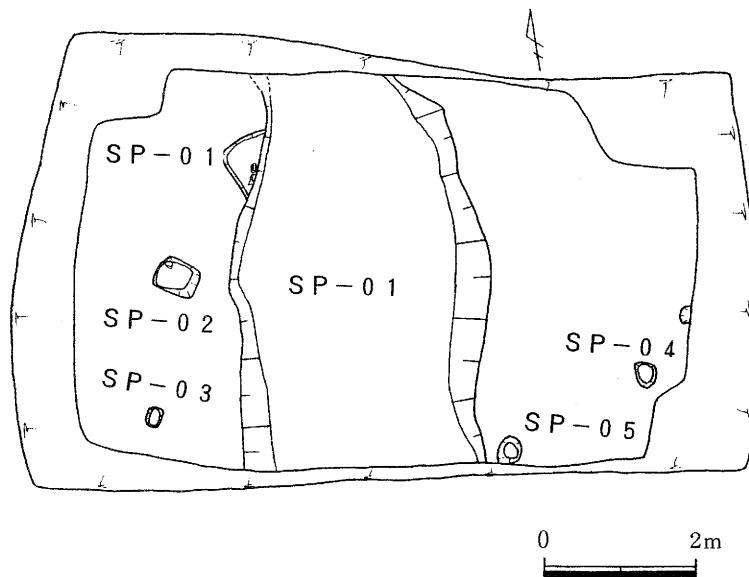
てのものである。この下部層の明褐色粘質土～黄褐色シルトから遺構は切り込まれている。遺構は溝1条 (SD-01)、ピット5基 (SP-01～05) を検出している。

SD-01と南北に伸びており、最大幅約3.3m、深さ0.25mを測り、その埋土から上層と下層に分けることができる。上層は明灰褐色粘質土、下層は明灰色粘質土である。

ピットではSP-03～05は径0.3mまでのもので遺物は土師器の小片がみられてだけである。SP-01はSD-01に切られているが方形を呈すると思われ、最大幅約0.8m、深さ約0.15mを測る。ピット内に瓦片と石等がみられた。SP-02は方形を呈するピットで幅約0.5m、深さ0.4mを測る。ピット内より土師器の小片と石が出土している。

2. 出土遺物

今回ここに図化した遺物は、出土したもの的一部だけである。1は重弁八葉蓮華文の軒丸瓦である。間弁中央に珠文を配し、蓮弁と大小の蓮弁を重ねている。そして、中房には1+8の蓮子を用いている。瓦当部と丸瓦部は瓦当部に溝をほり、丸瓦部を差しこみ丸瓦部内外面に粘土を塗布している。丸瓦凹面には布目痕がみられる。径16.8cm、全長8.4cmを測り、色調は灰色を呈する。胎土は0.1～0.2mmの礫を含んでいる。これは藤沢一夫氏によって提唱された原山廃寺式軒丸瓦（註1）に含まれ、現在分類されている型式では大県南廃寺Ⅲ型式軒丸瓦（註2）に対応する。3・4は磨滅が著しいが、やはり重弁八葉蓮華文の軒丸瓦である。外区内縁には珠文を配している。これと同范と思われる軒丸瓦が大阪府教育委員会によって行われた東郷遺跡の調査（註3）において3個体出土している。その瓦当面は外区外縁に鋸歯文を巡らし、中房には1+6の蓮子を用いている。色調は3が灰白色、4が淡黄灰色を呈している。これらは、藤沢一夫氏による分類では拜志寺式に対応すると考えられ、津守廃寺で出土している軒丸



第41図 平面図 (1/100)

瓦（註4）に類似している。6は須恵質の平瓦で凸面に縄目の叩きを施し、凹面に布目痕がみられる。1枚作りである。7は土師質の平瓦で赤褐色を呈し、凸面に有軸綾杉文がみられる。8～10は須恵器である。8は無蓋の高杯で中村氏編年のI型式3段階からII型式I段階に比定できるものである。10は瓶子でV型式1～2段階に比定できる。

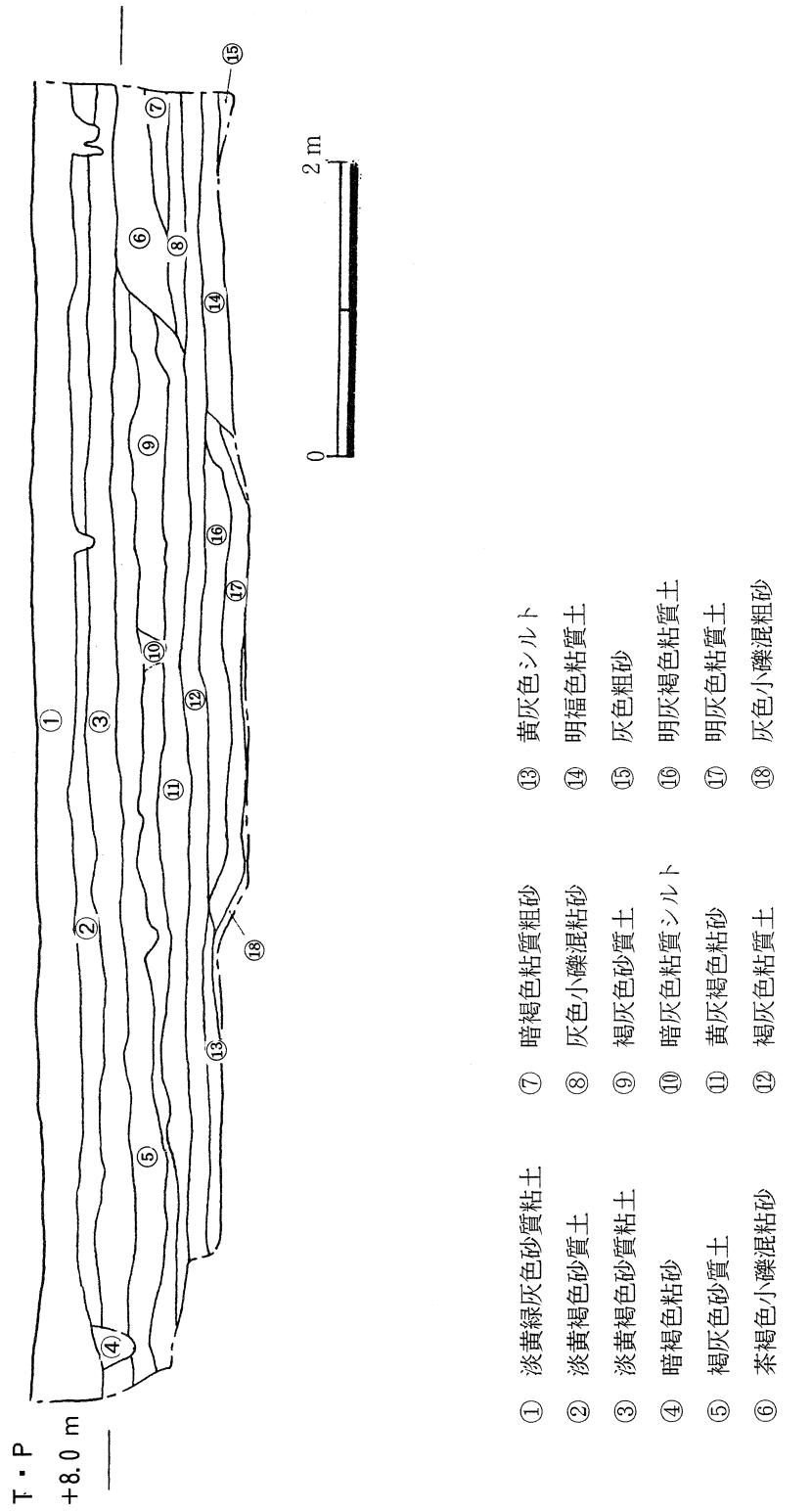
出土遺物はここに図化した以外に土師器、三彩陶器の破片、鉄碎状の塊（図版二十1～11）等がみられ、コンテナにして約10箱分出土している。

3. まとめ

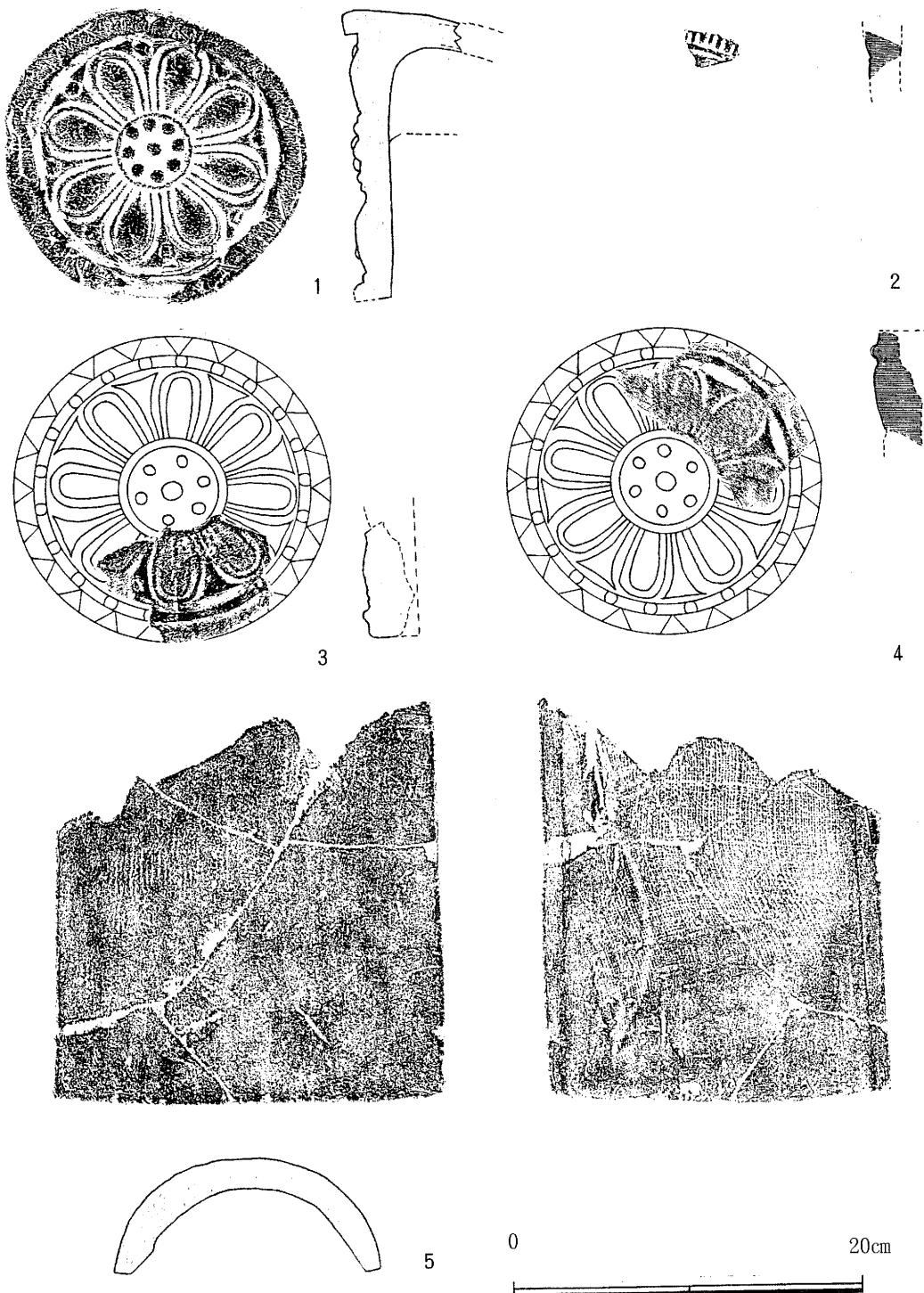
本調査では7世紀から9世紀にかけての多量の遺物が出土した。とくに白鳳時代、7世紀中葉に比定できる軒丸瓦と共に多くの瓦が出土したことにより、これまで知られていないかった寺院の存在を考えることができよう。しかし、今回の調査では明確な寺院関連遺構を検出してはいない。今後の周辺地域の調査に明らかになることを期待したい。(著)

参考文献

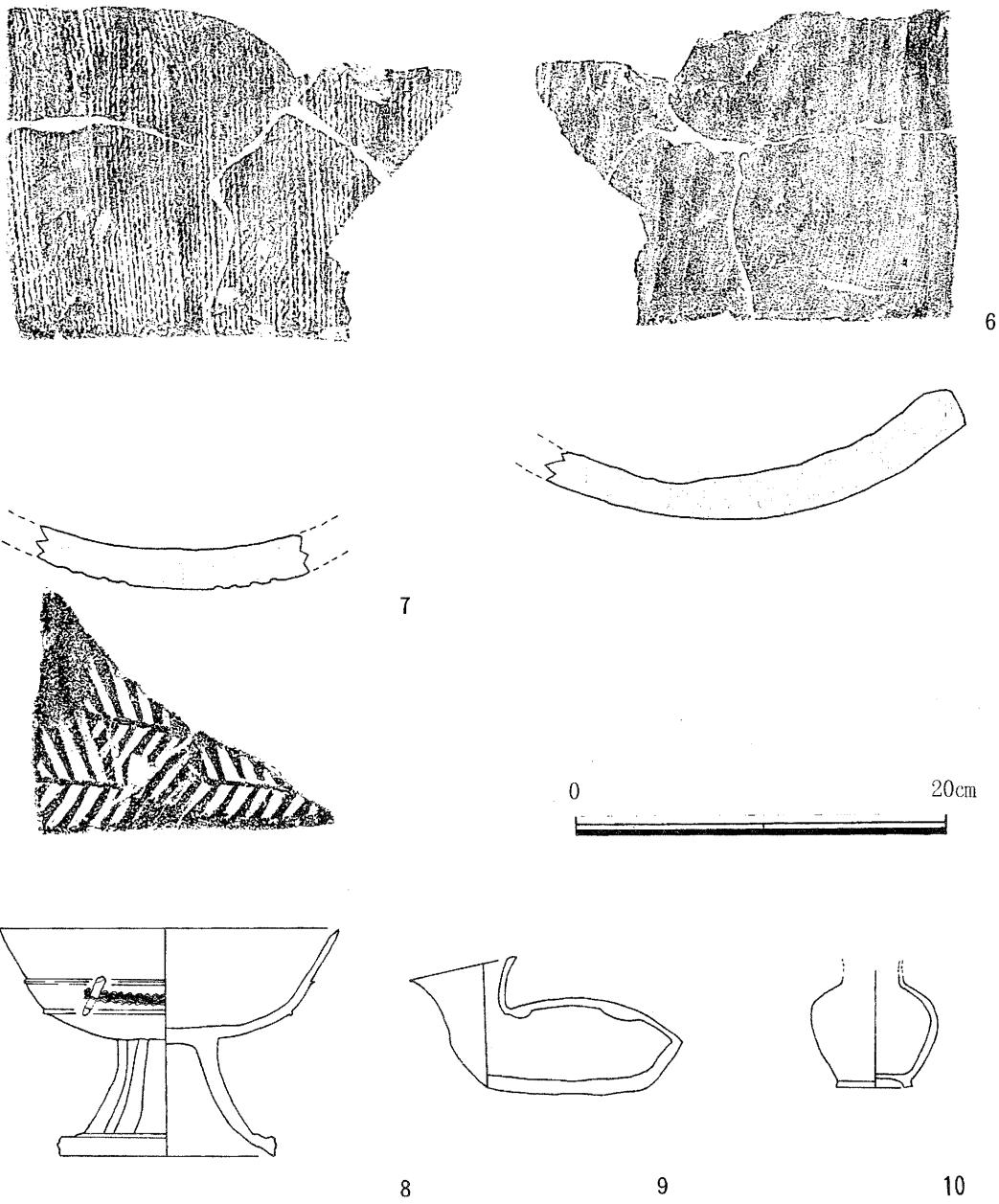
- （註1）藤沢一夫『摂河和泉出土古瓦の研究』考古学評論第3号 1941
- （註2）柏原市教育委員会『大県南遺跡－山下寺跡寺域の調査－』1985
- （註3）大阪府教育委員会『東郷遺跡発掘調査概要－八尾市桜ヶ丘・旭ヶ丘所在－』1989
- （註4）奈良国立文化財研究所『埋蔵文化財ニュース40』「飛鳥・白鳳寺院関係文献目録」1983



第42図 西壁土層断面図（1／50）



第43図 出土遺物実測図 (1／4)



第44図 出土遺物実測図（1／4）

10. 花岡山遺跡（91-084）の調査

調査地 大字樂音寺673-1, 673-2, 638, 640, 641-1, 749-1 番地

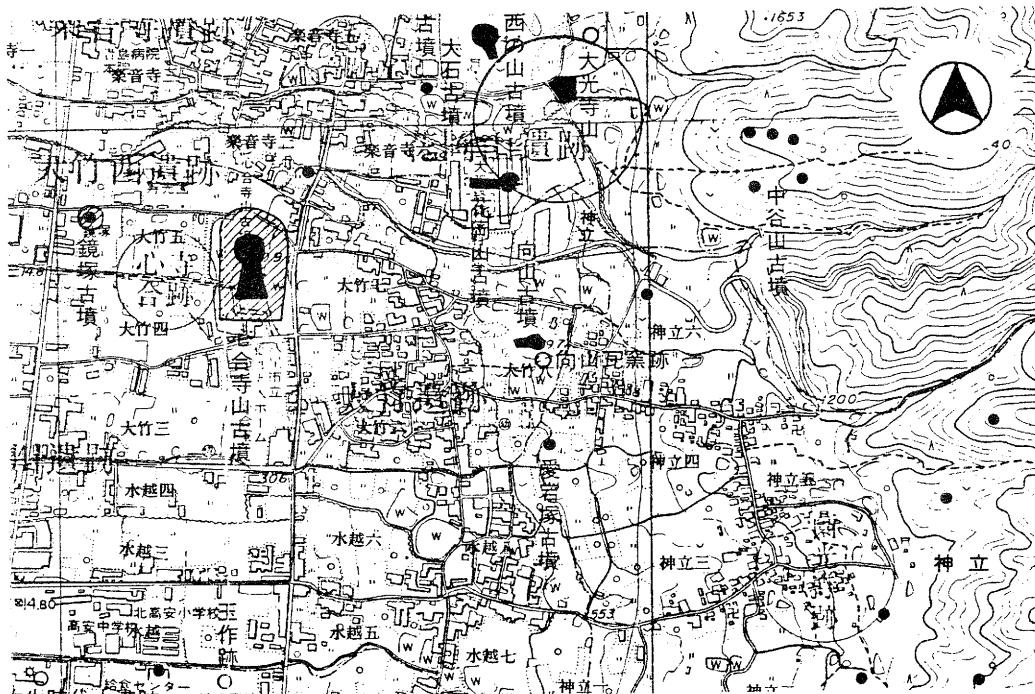
調査期間 平成3年5月30日, 6月3~5日

1. 調査概要

花岡山遺跡は生駒山系の西側標高約60~70mの山麓線に位置している。当遺跡内には花岡山古墳・西の山古墳があり、周辺には向山古墳、中ノ谷古墳、心合寺山古墳、鏡塚等があり、樂音寺・大竹古墳群とも呼べる前期、中期の古墳が遺存している。

当遺跡の発見は昭和53年に八尾市水道局の北部低配水池工事中に付近の分布調査を行っていた大阪経済法科大学考古学研究会によって中世の包含層が確認されたことによる。この時は、当教育委員会が大阪経済法科大学考古学研究会に委託して至急発掘調査を実施し、中世遺構を検出している。（註1）

その後、（財）八尾市文化財調査研究会（註2）や大阪経済法科大学が組織した花岡山遺跡学術



第45図 調査地周辺図 (1/13000)

調査団（註3）によって数次の調査を行われている。その結果、当遺跡は縄文時代晩期から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。

今回の調査は学校施設建設に伴い遺構、遺物の有無を確認する目的で、事業計画地の中央部分に約2m×20mのトレンチを設定し、重機によって地表下約0.3mまでの掘削りを行い、平面及び土層断面の観察を実施した。なお調査地には段差があり、段差の上部を上方テラス、下部を下方テラスとした。

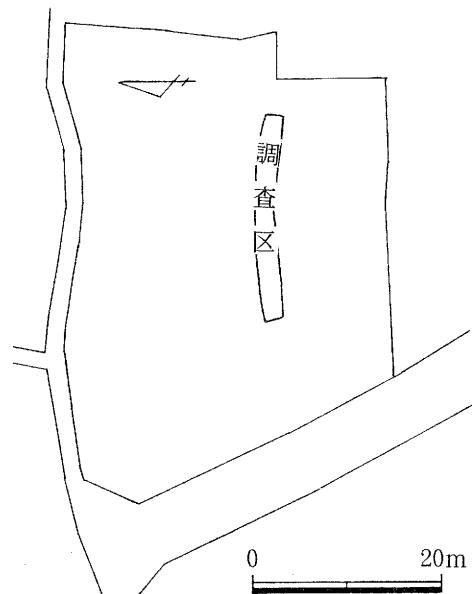
上方テラスでは、地表下約0.2～0.25mの褐色礫混粘質土をベースとして中心から西端にかけて遺構が集中している。遺構は土坑2基と小ピット2基を検出している。土坑のうち南壁に接しているSK-1は全体を明らかにしないが円形を呈するものと思われ、深さ0.27mを測る。遺物は土師器片が出土している。SK-1は径約0.6mの円形で、深さ約0.17mを測る。遺物は瓦器椀の破片が出土している。小ピットでは、遺物は見られなかった。

下方テラスは、上方テラスと約1.3mの段差がある。下方テラスでは、地表下約0.2mの黄褐色礫混土をベースとして、中央から東端にかけて遺構がみられる。遺構は土坑が2基と溝2条を検出している。土坑は北壁と南壁に接する形で各々みられ、北壁の土坑SK-4は径約1mの円形を呈すると思われ、深さは約0.4mを測る。遺物は土師器釜片が1点出土している。南壁の土坑SK-5では遺物は出土しなかった。溝は2条とも南北に走っており、段差近くの溝SD-2は一方の片肩ほとんどわされていたが、中央で検出したSD-1は幅約0.5mで深さ約0.17mを測る。溝から遺物は出土していない。

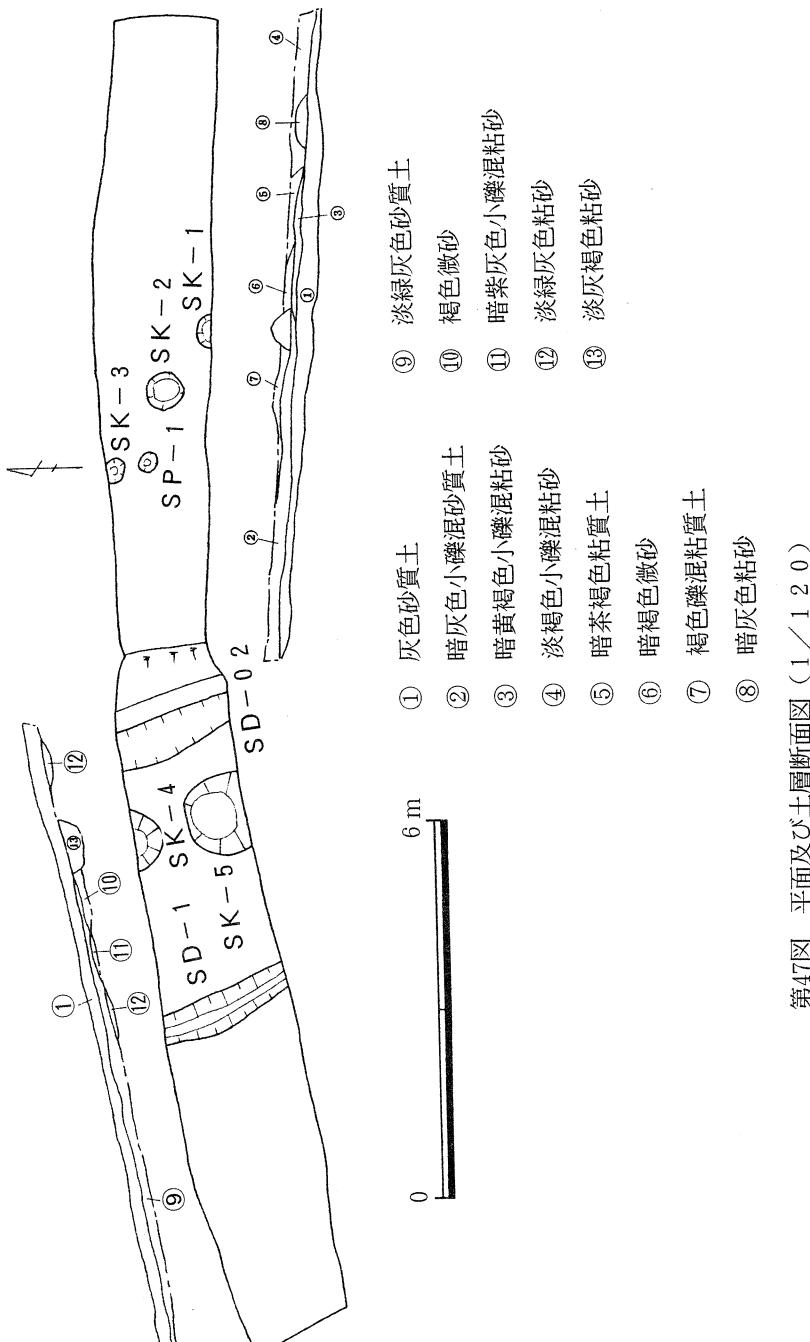
2. まとめ

今回の調査では、両テラスともに地表下約0.2m前後で中世から近世と思われる遺構を確認することができた。調査地は、西ノ山古墳の南東約50mに位置し、調査地の周辺では花岡山遺跡学術調査団と（財）八尾市文化財調査研究会によって幾度かの調査が行われ多くの成果を挙げている。特に、本調査地の西側で（財）八尾市文化財調査研究会が（註4）本調査と同じく中世から近世にかけての遺構・遺物を確認しており、今回の調査ではそれと併せて中近世における周辺の歴史的環境を窺い知る資料となった。

（漬）



第46図 調査区設定図（1／800）



第47図 平面及び土層断面図（1／120）

参考文献

- (註1) 大阪経済法科大学考古学研究室内花岡山遺跡発掘調査団『花岡山遺跡発掘調査概報』1979年
- (註2) 花岡山遺跡学術調査団『河内花岡山遺跡』大阪経済法科大学考古学研究報告第9集 1988年
- (註3) (脚)八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報平成元年度』 1989年
- (註4) 前掲註3

11. 久宝寺遺跡（91-150）の調査

調査地 渋川町6丁目34、35

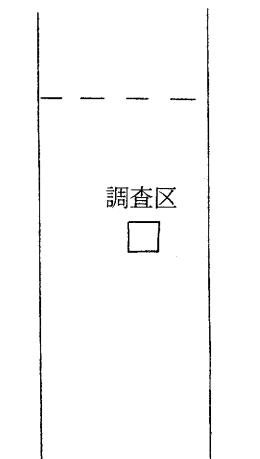
調査期間 平成3年7月11日

1. 調査概要

本調査は診療所ビル建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の北側付近に2m四方の調査区を設定し、地表下2.1mまで重機と人力を併用して掘削した。地表下1.2m～1.8m（TP7.3m～7.65m）で古墳時代後期の土器を含む灰褐色粘砂層、茶灰褐色粘砂層を確認した。灰褐色粘砂層からは6世紀の須恵器の杯身などが残りの良い状態で出土した。またこの下の茶灰褐色粘砂層は固くしまった土層で整地層である可能性がある。第50図の1は灰褐色粘砂層から出土した須恵器の杯身である。ほぼ完形で出土した。たちあがりは低く内傾し、底部はやや平たさに欠ける。体部外面のロクロヘラケズリは器高の2分の1以下である。底部外面にヘラ記号をもつ。TK209型式前後、6世紀後半頃の時期のものであろう。同層付近からはこの他に須恵器の杯身の底部片、土師器などが出土した。



第48図 調査地周辺図 (1/13000)



第49図 調査区設定図 (1/500)

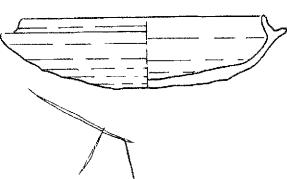
1	1. 盛土A
2	2. 盛土B
3	3. 耕作土
4	4. 灰茶色粘砂
5	5. 灰茶粘質土
6	6. 灰褐色粘砂
7	7. 茶灰褐色粘砂
8	8. 褐色斑灰色粘土
9	9. 灰色粘土

古墳時代
包含層

第50図 基本層序模式図 (1/40)

2. まとめ

本調査では地表下1、2 m～1、8 mで古墳時代後期の包含層を確認した。同期の包含層・遺構は周辺の調査でも確認されている。久宝寺駅舎内の発掘調査では古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構が確認されている。^(註1)また、渋川町5丁目での調査では飛鳥時代～奈良時代にかけての包含層とともに古墳時代後期の包含層が確認されている。^(註2)当調査地の南東方では渋川廃寺が存在する。また、調査地が物部氏の居館のあったとされる渋川郡に位置することも注目される。以上から本調査結果はこれらと関連する古墳時代後期の遺構の存在を示唆するものとして重要である。



第51図 出土須恵器実測図(1/4)

註1 (財)八尾市文化財調査研究会『平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』

1991年

註2 註1同じ

12. 恩智遺跡（91-055）の調査

調査地 恩智中町2-176

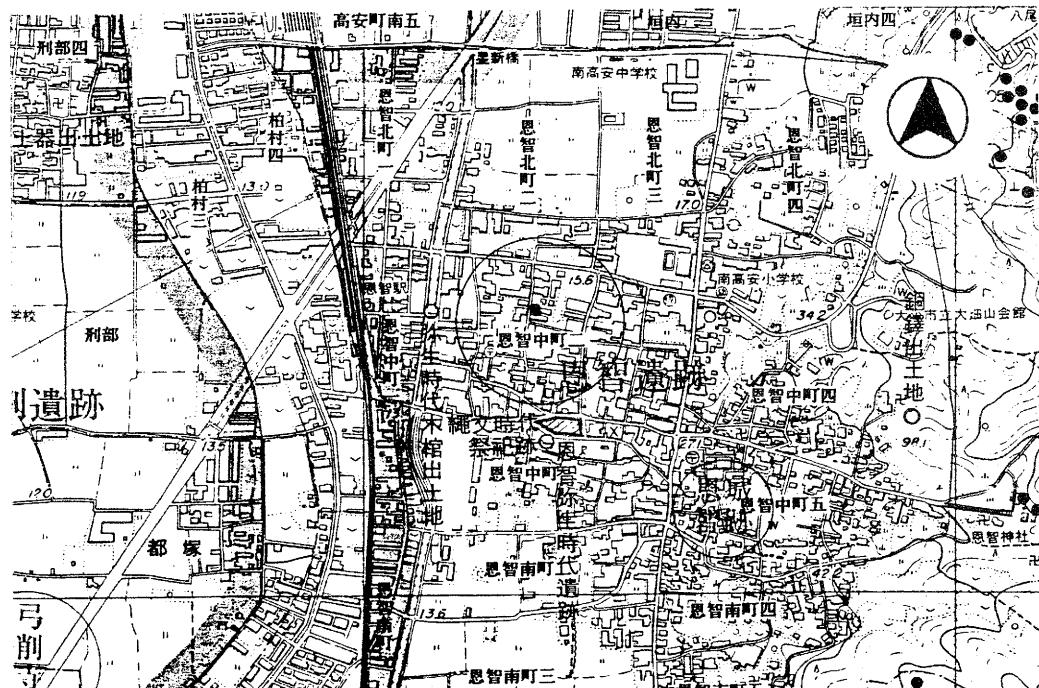
調査期間 平成3年7月11, 12日

1. 調査概要

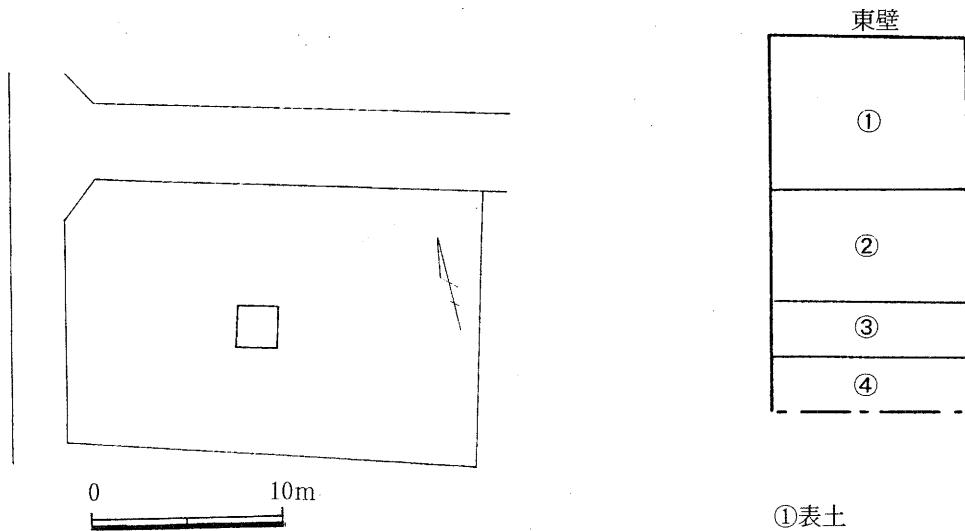
本調査は専用住宅の地盤改良に先立って実施したものである。しかし、当初申請が提出された時点では地盤改良の計画はされておらず、当教育委員会は工事着工時の立会調査を予定していた。だが、工事着手直前に設計の変更を知られ、急遽遺構確認調査を行うことになったのである。

調査は計画地の中央部に 2×2 m の調査区を設定し、地盤改良工事を行う 1 m まで対象として遺物の有無の確認をした。基本層序は盛土、淡褐色粘砂、暗灰色粘砂、黒灰色粘砂である。このうち遺物を包蔵しているのは地表下約 0.8m に存している黒灰色粘砂層であった。遺物は弥生時代中期、とくにIV様式が中心で、土器以外に石器が出土している。

この調査結果を踏まえ、申請者と当教育委員会と協議を行い、地盤改良の堀削深度を地表下 0.6m に変更することになった。それとともに工事中の立会いを行い、遺物包含層と遺構の確



第52図 調査地周辺図 (1/13000)



第53図 調査区設定図（1／400）

- ①表土
- ②淡褐色粘砂
- ③暗灰色砂粘
- ④黒灰色粘砂

第54図 基本層序模式図（1／20）

認及び遺物採集を実施した。

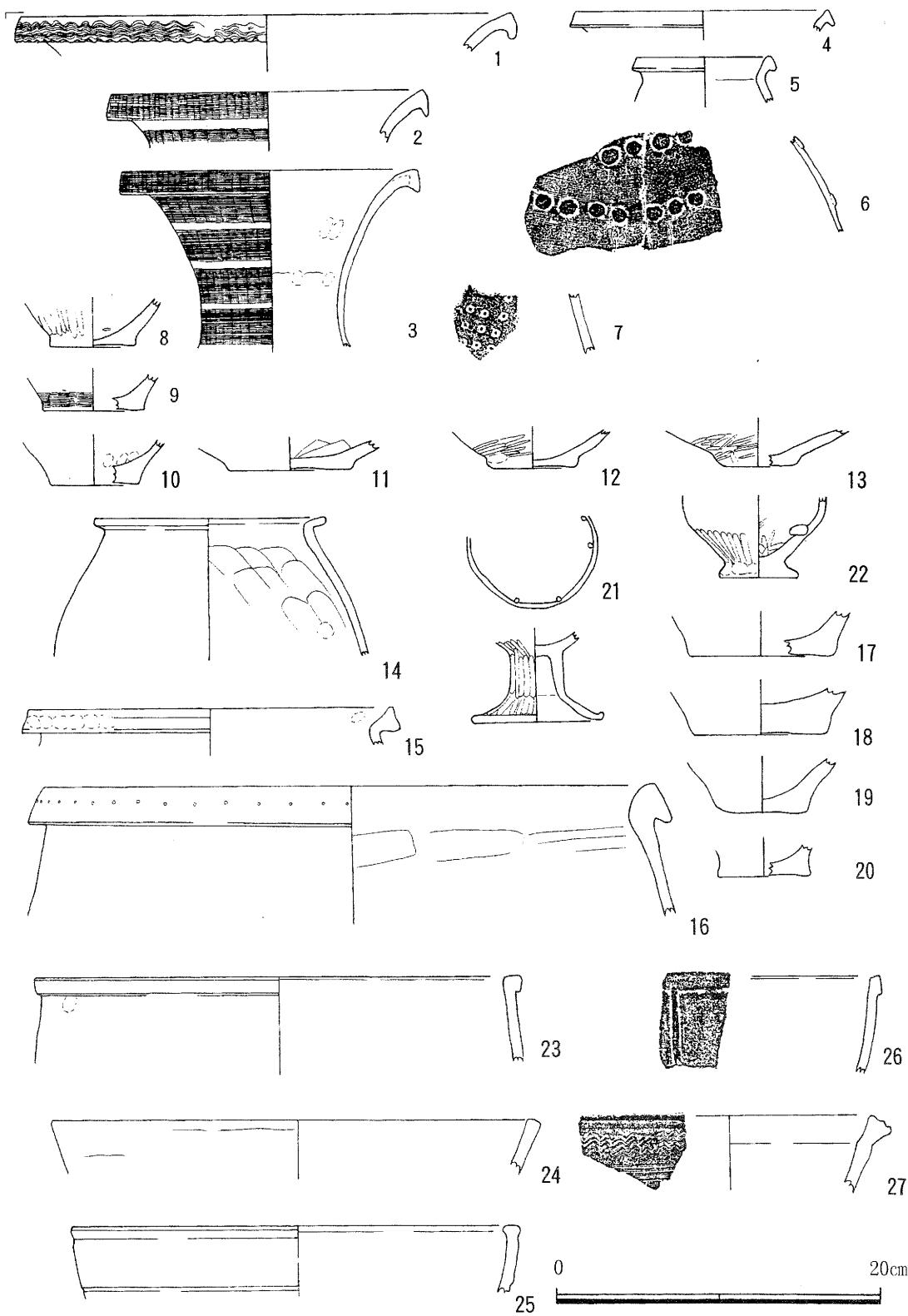
その結果、遺物は調査地内でまんべんなく見られたが、山側の特に敷地の東北隅で多量に出土した。包含層は地表下0.6～0.8mにあり、0.2～0.3mの厚さで堆積している。また一部地表下1.1m前後まで掘削した箇所で暗青灰色粘質土上面で径0.4m、深さ0.3mのピットを1基検出している。遺物はピット内より石核が一点出土している。

2. 出土遺物

遺物は弥生中期後半に属するものでコンテナに約半箱分が出土している。壺、甕、鉢がみられるが、鉢が目につく。21は台付き鉢で裾部に2孔を一組とする孔を穿っている。22は椀形の鉢だが、内面に木の実の痕が残っている。

3. まとめ

今回の調査では弥生時代中期の包含層を確認したが、遺構はピット1基を検出したのみであった。しかし、今年度に公共事業に伴い実施した本調査地周辺での調査と併せて考えてみれば近辺のプライマリーな包含層が見られる箇所は限られてくる。その意味で今回の調査は満足のいくものではないが、良好な包含層の位置を明示する資料が得られたものと思う。（済）



第55図 出土遺物実測図 (1 / 4)

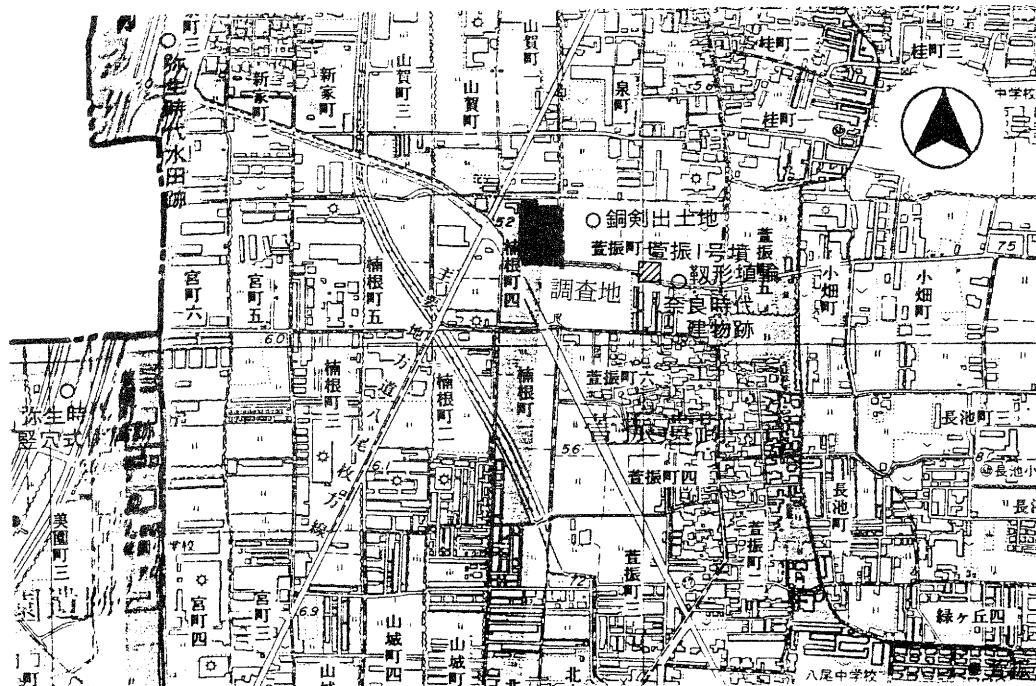
13. 萱振遺跡（91-166）の調査

調査地 楠根町4丁目1-4、4-1、7-2、8-2

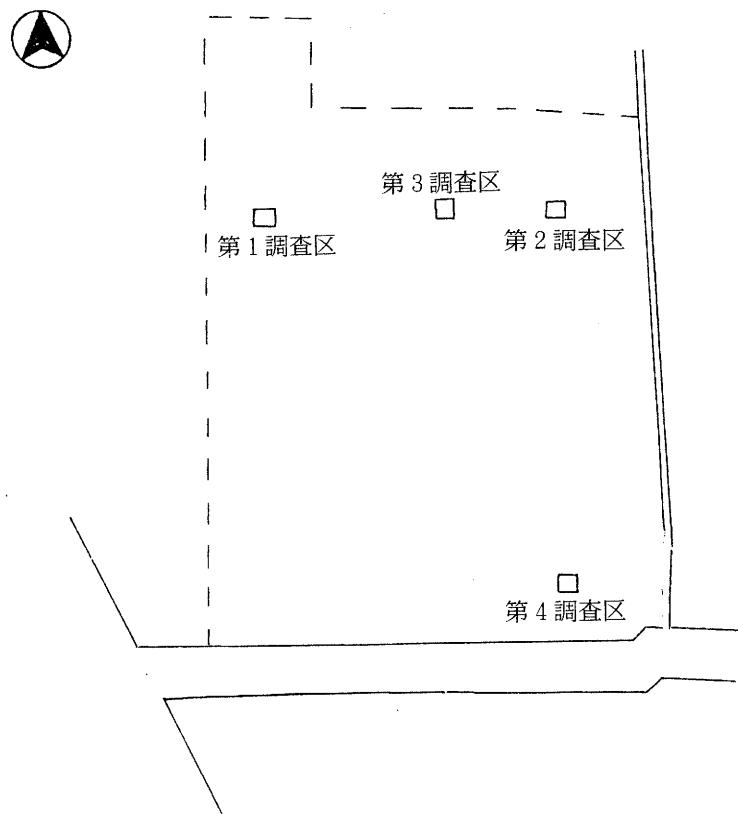
調査期間 平成3年7月22日

1. 調査概要

本調査は倉庫及び事務所建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の西に第1調査区、東に第2調査区、中央に第3調査区、南東側に第4調査区をそれぞれ3m四方で設定した。第1調査区では地表下1.3mまで重機と人力を併用して掘削したところ、地表下0.15m～0.5mで中世の土器を含む灰茶色粘砂層、淡灰色砂層を確認した。この下は自然流路の埋土と思われる灰白色粗砂層の堆積であった。第2調査区では地表下0.8mまで掘削したところ、地表下0.6m以下で弥生時代後期の土器がまとまって出土する暗灰色粘土を確認した。この土層は有機物を含んでおり、周辺の調査と考え併せて、溝状遺構の埋土の一部である可能性がある。第3調査区では地表下1.6mまで掘削したところ、地表下0.8m付近で灰白色粗砂層とこれをきりこむ灰褐色粘砂層とこの上に積み上げたような状態で堆積する暗灰褐色粘砂層、茶灰褐色粘砂層を確認した。調査区の狭いためはっきりしないが、周溝墓の一部である可能性がある。第4調



第56図 調査地周辺図 (1/13000)

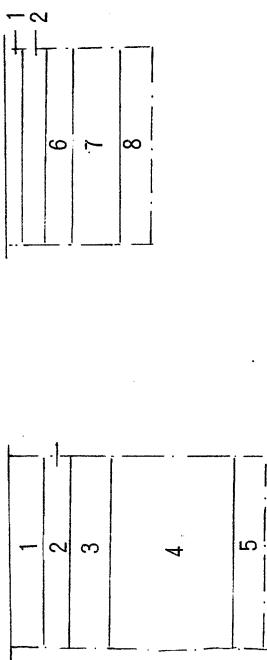


第57図 調査区設定図 (1／1200)

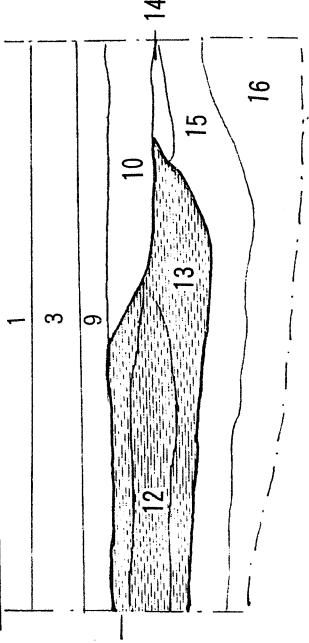
調査区では地表下1.1 mまで掘削したところ、地表下0.45m～0.9 mで古墳時代の土器を含む淡茶灰色砂質土層、淡灰色シルト層を確認した。淡灰色シルト層は自然流路の埋土と思われる淡灰色粗砂層からきりこんでいる。

出土遺物は主に第2調査区と第4調査区を中心に出土した。3は第2調査区の暗灰色粘土層から出土した鉢である。体部外面は縦方向の幅の狭いミガキを施し、下半はミガキの後にハケを施す。1、2、4は第4調査区の淡灰色シルト層から出土したものである。2は庄内式土器の甕である。肩部は張らず、なだらかに体部へ移行する。口縁端部は外方につまみだしやや鋭い。体部外面はハケのちタタキ、体部内面はヘラケズリを行ない、器壁は薄い。1も同じく甕である。肩部から体部はやや張る。口縁部はくの字状に屈折する。体部外面はタタキのちハケ、体部内面は横方向のヘラケズリのちハケ及び縦方向のナデを行なう。器壁はやや厚い。4は高杯の脚部である。脚柱部は中実で四方向の透かしをもつ。1、2は内面にヘラケズリをおこなっているが、弥生式土器の畿内第V様式的な要素を強く残した土器である。特に2は器壁も厚く、口縁部から体部にかけての形状も古い要素をもつ。

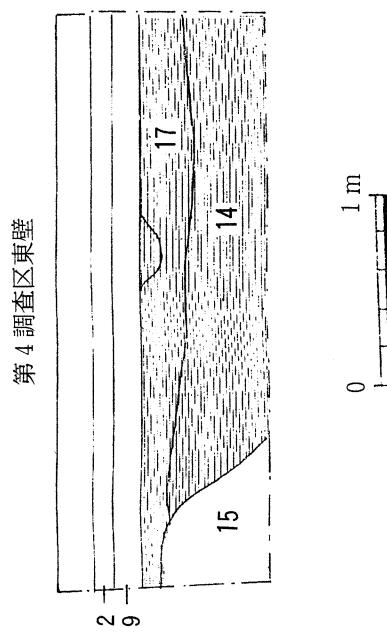
第1調査区西壁



第2調査区南壁



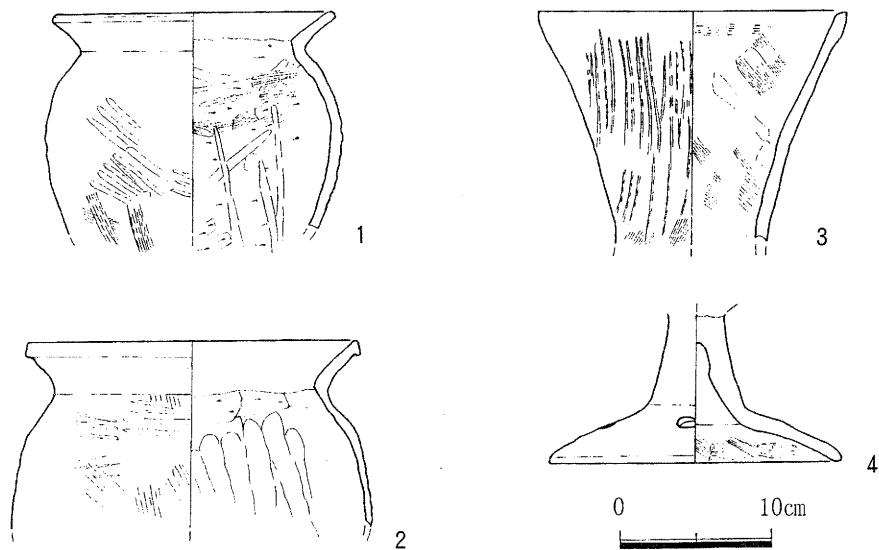
第3調査区南壁



第4調査区東壁

1. 表土
2. 灰茶色粘砂
3. 淡灰色砂層 } 中世
4. 灰白色粗砂 } 包含層
5. 赤褐色粗砂
6. 灰褐色粘質土
7. 茶灰色粘質土
8. 暗灰色粘土 (弥生時代後期包含層)
9. 灰茶色粘砂
10. 淡灰褐色粘砂A (砂多い)
11. 茶灰褐色粘砂
12. 暗灰褐色粘砂
13. 灰褐色粘砂B
14. 淡灰色シルト (古墳時代包含層)
15. 灰白色粗砂
16. 暗灰色粘土
17. 淡灰茶色砂質土 (古墳時代包含層)

第58図 調査区基本層序模式図 (1/40)



第59図 出土遺物実測図（1／4）

2. まとめ

第2調査区では古墳時代の溝状遺構の埋土、第3調査区では周溝墓の墳丘部分の堆積と思われるものを確認した。また第4調査区では地表下0.5m～0.9mで古墳時代前期の良好な包含層を確認した。東側に隣接する大阪府立八尾北高校内での大阪府教育委員会による調査では、^(註1)繩文時代～室町時代にいたる遺構・遺物が検出されており、特に古墳時代初頭の方形周溝墓は4基検出されている。今回の調査結果はこれらの遺構群との一連とのつながりを、部分的にではあるが捉えたものとして重要である。
(吉田)

註1 広瀬雅信 「萱振遺跡発掘調査速報」

八尾市教育委員会 『八尾市文化財紀要Ⅰ』 1985、3

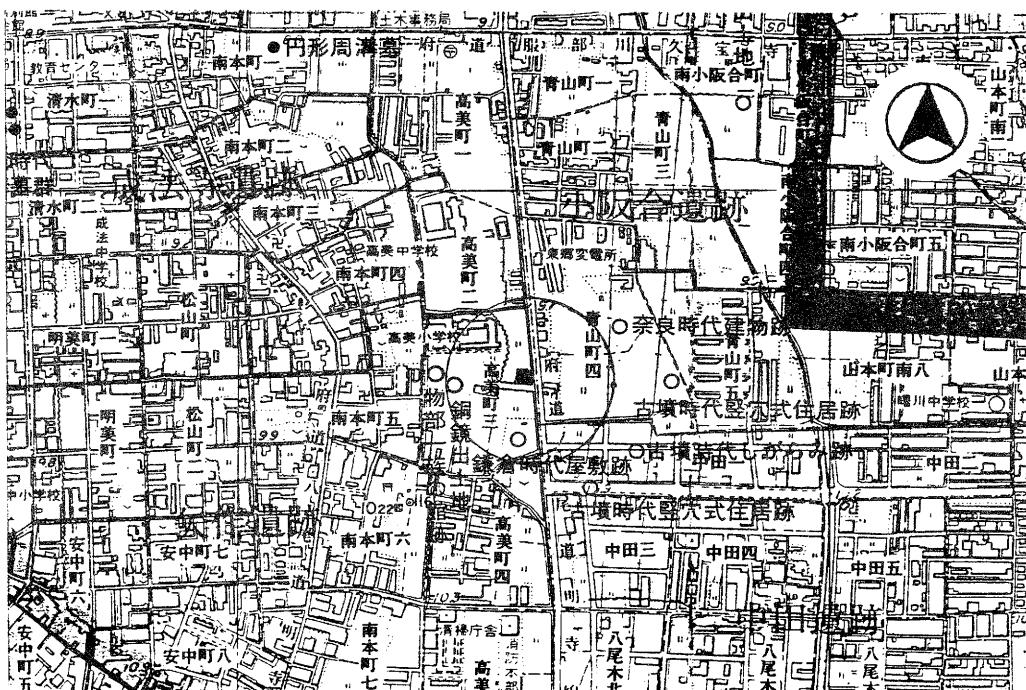
14. 矢作遺跡（91-189）の調査

調査地 高美町3丁目3番地
調査期間 平成3年8月20~22日

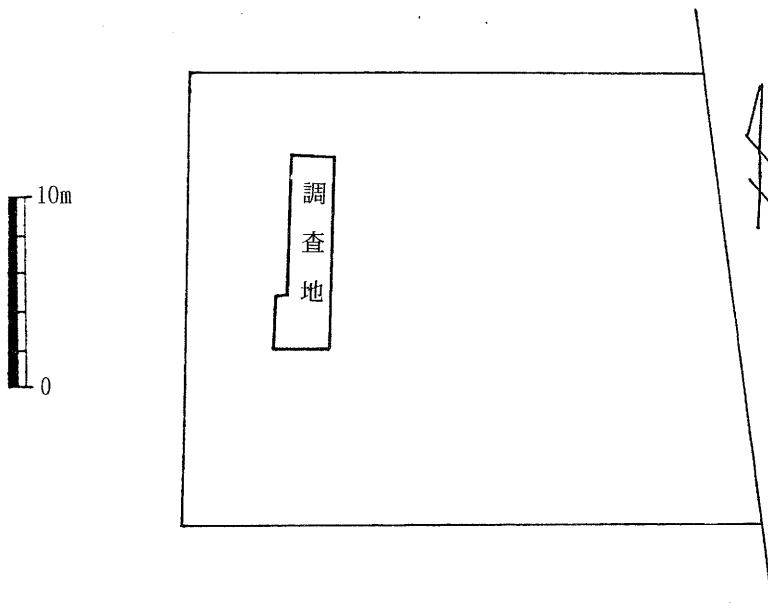
1. 調査概要

矢作遺跡は八尾市のほぼ中心部に位置しており、旧大和川の長瀬川と玉串川の間に挟まれた自然堤防上に立地している。遺跡と同じ自然堤防上にある成法寺遺跡、小阪合遺跡、中田遺跡に接している。各々の遺跡は矢作遺跡と同じく弥生時代後期から中世にいたる複合遺跡であることがこれまでの調査で判明している。

遺跡周辺ではこれまで当教育委員会と助八尾市文化財調査研究会によって幾度かの調査が行われている。昭和63年には今回の調査地の北隣で当教育委員会によって遺構確認調査が行われ古墳時代から中世にいたる遺物を出土している。（註1）また昭和62年には南隣で弥生時代後期末の遺構・遺物を検出している。（註2）助八尾市文化財調査研究会では昭和62年に本調査地南250mの地点で弥生時代後期から中世にかけての遺構・遺物を検出し、特に11世紀後半か



第60図 調査地周辺図 (1/13000)



第61図 調査区設定図（1／400）

ら13世紀にかけての遺構・遺物が顕著にみられた。（註3）

今回の調査は浄化槽設置に伴うもので、事業計画地に $2\text{m} \times 10\text{m}$ の調査区を設定し、地表下約1.8mまで掘削した。その結果、地表下1.6m前後の第7層暗茶褐色粘質土で弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての遺物を確認した。また、暗茶褐色粘質土上面を精査したところ南北方向の溝3条、ピット3基、方形土坑1基を検出した。

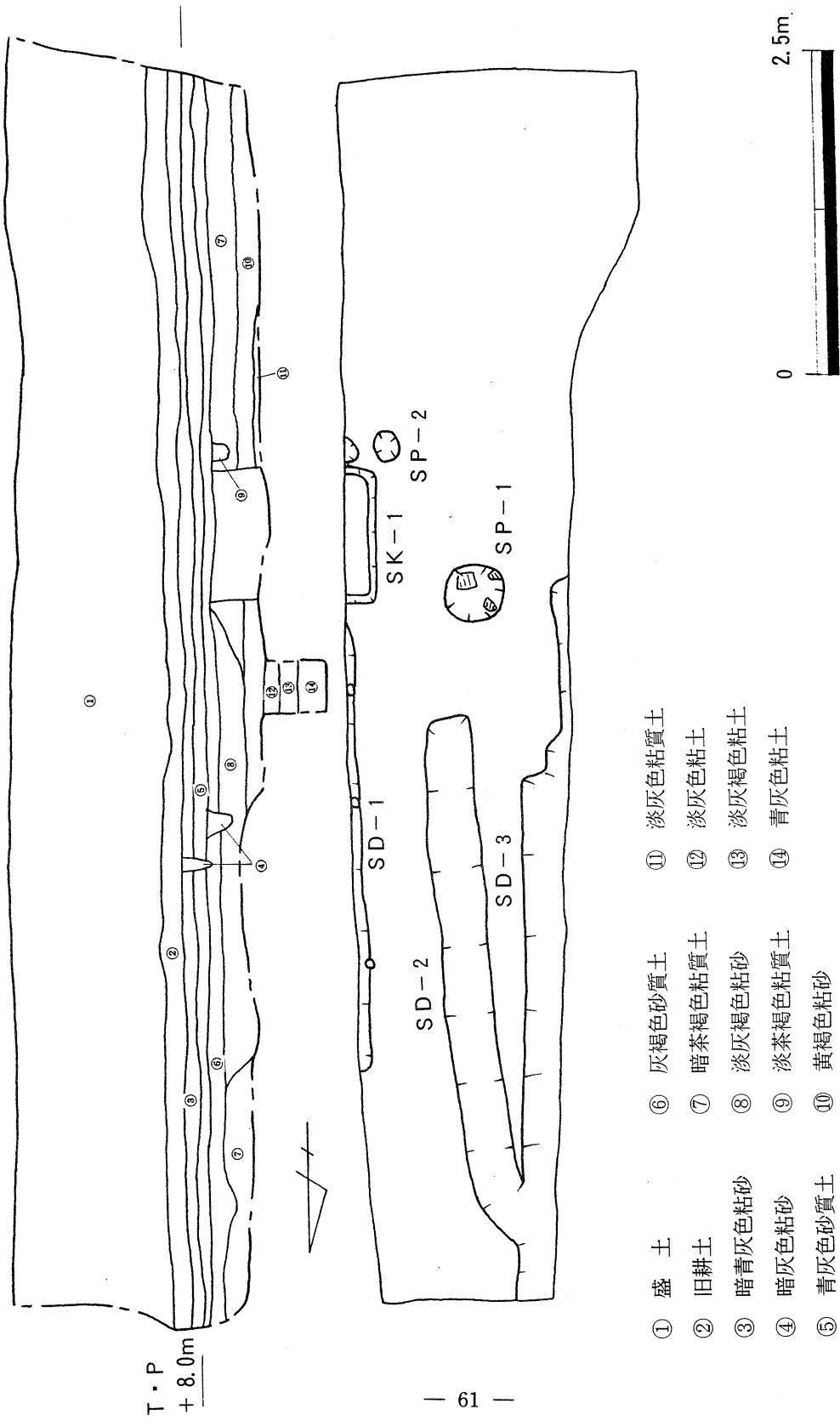
SD-01は東壁に接しており、大部分が調査区外に至るため全容は不明であるが、検出部分では南北に約5.5m伸びている。西肩のみの検出であるが、肩には杭が打たれており、深さ約0.3mを測る。遺物は瓦器小片が僅かに出土している。

SD-02はSD-03より枝分かれしている溝で、幅約0.38m、深さ0.09mを測る。埋土は暗黄褐色粘質土である。遺物は弥生時代後期末の高杯・甕が出土している。

SD-03は西壁に接しており、SD-01と同じく大部分が調査区外に至るため全容は分からぬが、東肩のみを検出しており、深さ0.07m、幅約0.32mを測る。遺物はSD-02と同じく弥生時代後期末の甕等が出土している。

ピットは3基検出しているが、遺物がみられたのはSP-01だけである。埋土は暗黄褐色粘砂で、弥生時代後末期の甕片が出土している。径0.4m、深さ0.09mを測る。

土坑は東壁際で検出しており、やはりその全容は不明である。検出部分は角がみられることから方形あるいは長方形を呈すると思われる。深さ約0.14mを測り、遺物は出土していないがSD-01と同じ淡灰褐色粘砂であり、中世以降と考えられる。



第62図 平面及び東壁断面図（1／50）

この遺構検出面の下部層である第10層黄褐色粘砂、第11層淡灰色粘質土では遺構は検出できなかったが、第10層ではわずかであるが弥生時代後期末の遺物が出土している。

調査区中央で一部下層確認を行ったが、第12、13、14層とも遺物は見られなかった。しかし第14層青灰色粘土層は昭和62年度の調査で弥生時代の遺構検出している面と対応する可能性があると思われる。

2. 出土遺物

遺物は、弥生時代後期末すなわちV様式末から庄内式古相を呈しているものがほとんどである。図化したもののうちS P - 1 出土の1の高杯以外は、第7層暗茶褐色粘質土から出土したもので、SD - 02, 03の周辺から見つかっている。この調査区の遺物の特徴は6. 9のように底部に穿孔を施した甕が土器出土総数の割に多く見られることと、器種別には高杯の出土量が最も多いことである。

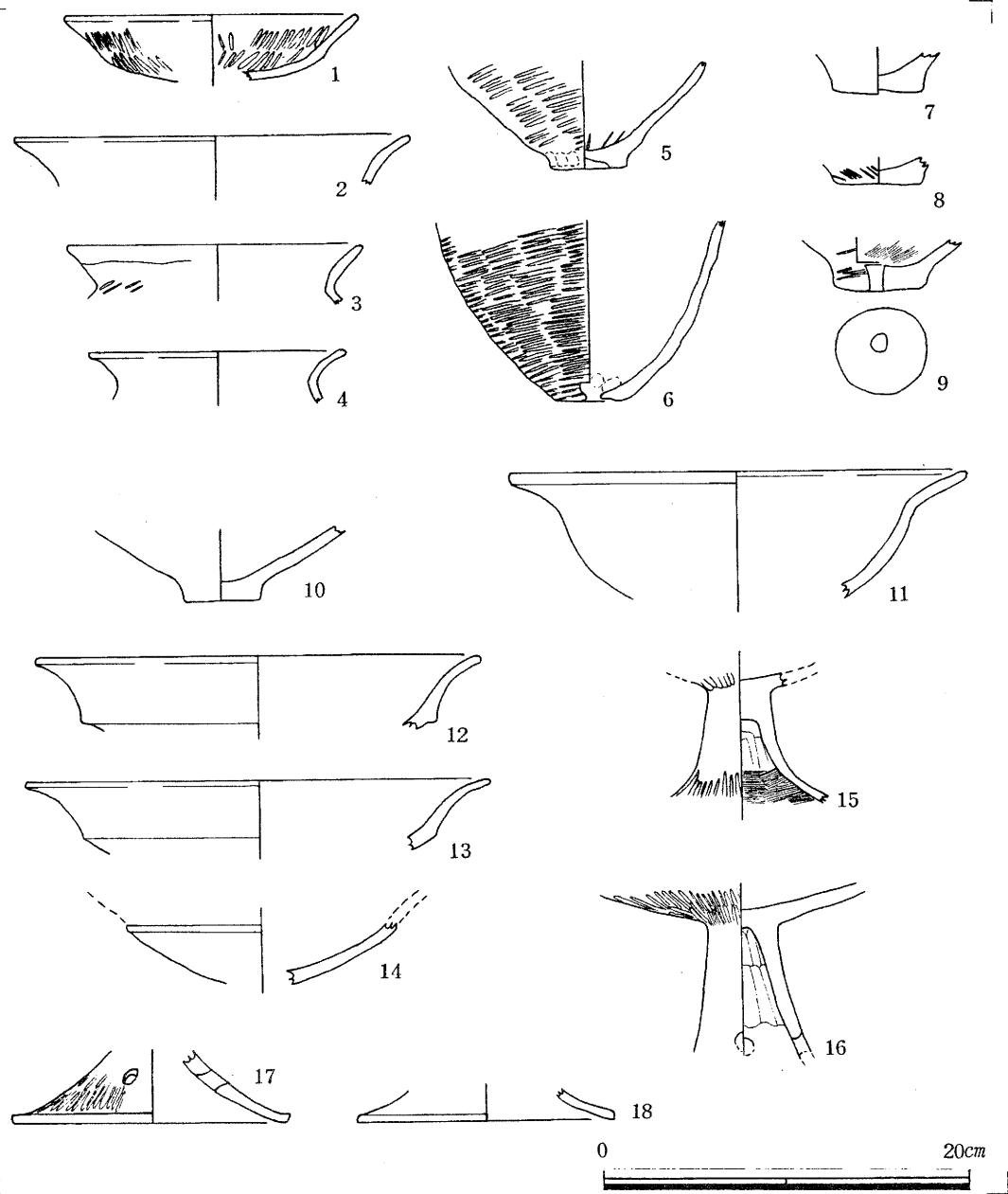
3. まとめ

今回の調査では中世と弥生時代V期末から古墳時代初頭にかけての遺構を確認することができた。しかし、本調査地周辺でこれまで古墳時代後期の堀立柱建物（註4）や中世の堀立柱建物（註3）のように集落に関連する遺構はみられなかった。それゆえに今回の調査地は集落の中心からははずれた地域であると思われる。ただ、調査区の大きさと出土している土器の総数から考えると周辺に住居あるいは生活関連の遺構が見つかる可能性も否定できないであろう。

（漬）

参考文献

- （註1）八尾市教育委員会『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅰ』1989
- （註2）八尾市教育委員会『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書Ⅰ』1988
- （註3）（財）八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 平成元年度』1989
- （註4）八尾市教育委員会『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』1987



第63図 出土遺物実測図 (1/4)

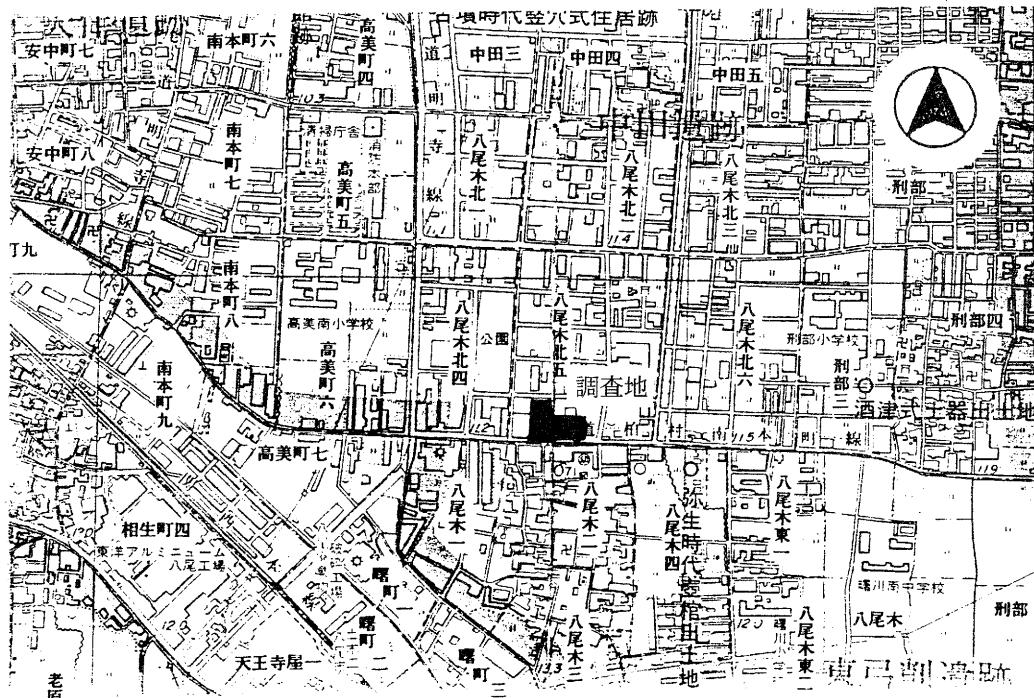
15. 中田遺跡（91-207）の調査

調査地 八尾木北5丁目98~105

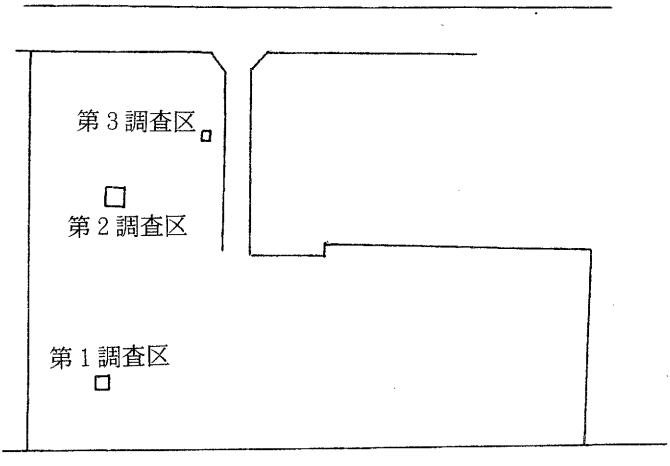
調査期間 平成3年8月21日

1. 調査概要

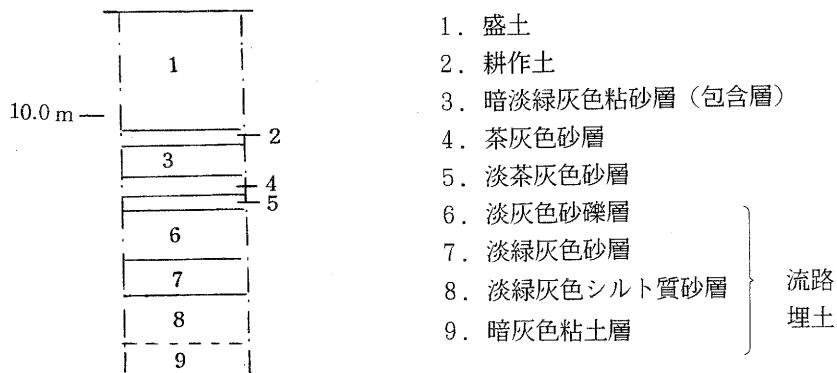
本調査は共同浴場建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の南側に2m四方の第1調査区を、北側中央よりに3m四方に第2調査区、北端に1m四方の第3調査区を設定した。第1調査区では、地表下2、4mまで重機と人力を併用して掘削したところ、地表下0、9m~1、1m、TP9、6~9、8mで土師器小片を含む暗緑灰色粘砂層を確認した。またこの下では茶灰色砂質土層をはさんで、地表下1、3m~2、2m、TP8、5~9、4m付近で、弥生式土器の底部、須恵器の甕片を含む自然流路状の堆積を確認した。暗緑灰色粘砂層は前後の層位状態等から判断して、中世頃のものと思われる。同様にして第2調査区では地表下2、7mまで、第3調査区では地表下2、0mまで掘削を行なったが、いずれも現代の盛土層の堆積であった。



第64図 調査地周辺図 (1/13000)



第65図 調査区設定図 (1/100)



第66図 調査区土層断面図 (1/40)

2.まとめ

本調査地では南側は攪乱のため遺構・遺物を全く確認できなかったが、北側では中世の包含層とその下に堆積する古墳時代後期頃埋まつたと思われる自然流路の堆積を確認した。特に中世の包含層は良好な遺存状態を示していた。周辺のこれまでの調査でも弥生時代から中世にいたる遺構・遺物が豊富に確認されており、本調査地でもこれと関連した遺構の拡がりが予想される。

(吉田)

16. 久宝寺遺跡（91-247）の調査

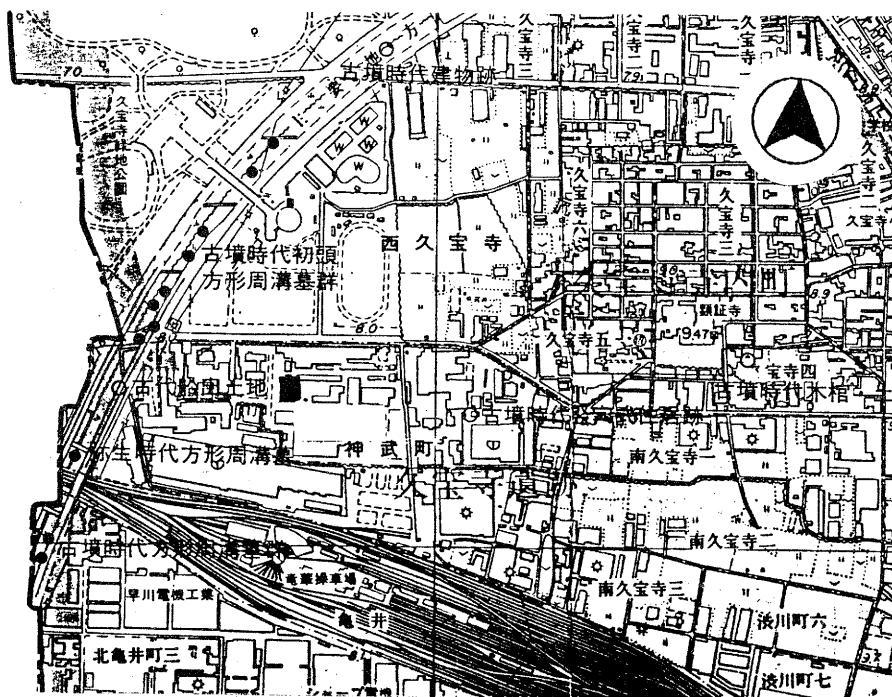
調査地 神武町2番35号

調査期間 平成3年9月5日

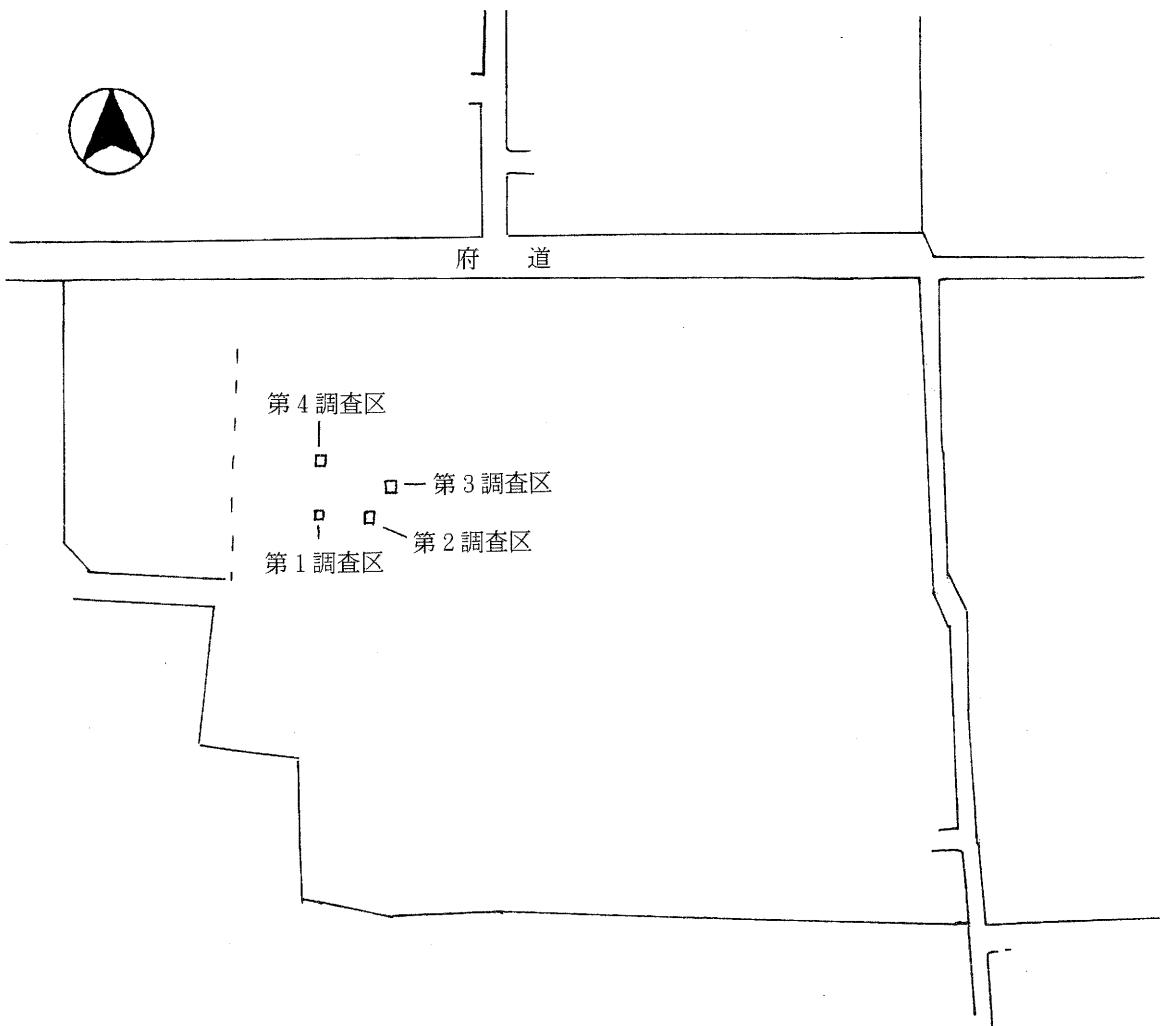
1. 調査概要

本調査は設計棟建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の南西側に第1調査区を、南東部分に第2調査区を、東端部分に第3調査区を、北西部に第4調査区を、それぞれ3m四方で設定した。

第1調査区では地表下2.6m付近まで重機と人力を併用して掘削を行ったところ、地表下1.5~1.8m、TP5.7m~6.0mで淡暗緑灰色粘質土層を、この下で淡暗灰紫色粘質土層を確認した。これらの層は古墳時代の土師器を含んでいる。この暗灰紫色粘質土層からは土坑状の遺構がきりこんでいる。この下には淡灰白シルト層が更にその下には灰白色砂層が堆積する。いずれも遺物は確認できなかった。第2調査区では地表下2.6mまで掘削を行ったところ、地表下1.7mまで盛土層であり、古墳時代の包含層は確認できなかった。この下には第1調査区と同様に淡灰白シルト層及び灰白色砂層が堆積する。第3調査区では、湧水が激しく調査の困



第67図 調査地周辺図 (1/13000)



第68図 調査区設定図（1／2500）

難な状況であったが、地表下約2.0 m前後まで盛土層であり、地表下2.5 m前後まで砂層が堆積することを確認した。第4調査区では地表下2.5 m前後まで掘削を行ったところ、地表下1、6 m～1.9 mで前述の淡灰白色シルト層と淡白色砂層に対応すると思われる層を確認した。この上で灰緑色粘土層を確認しており、ここには土師器が若干含まれている。

2、まとめ

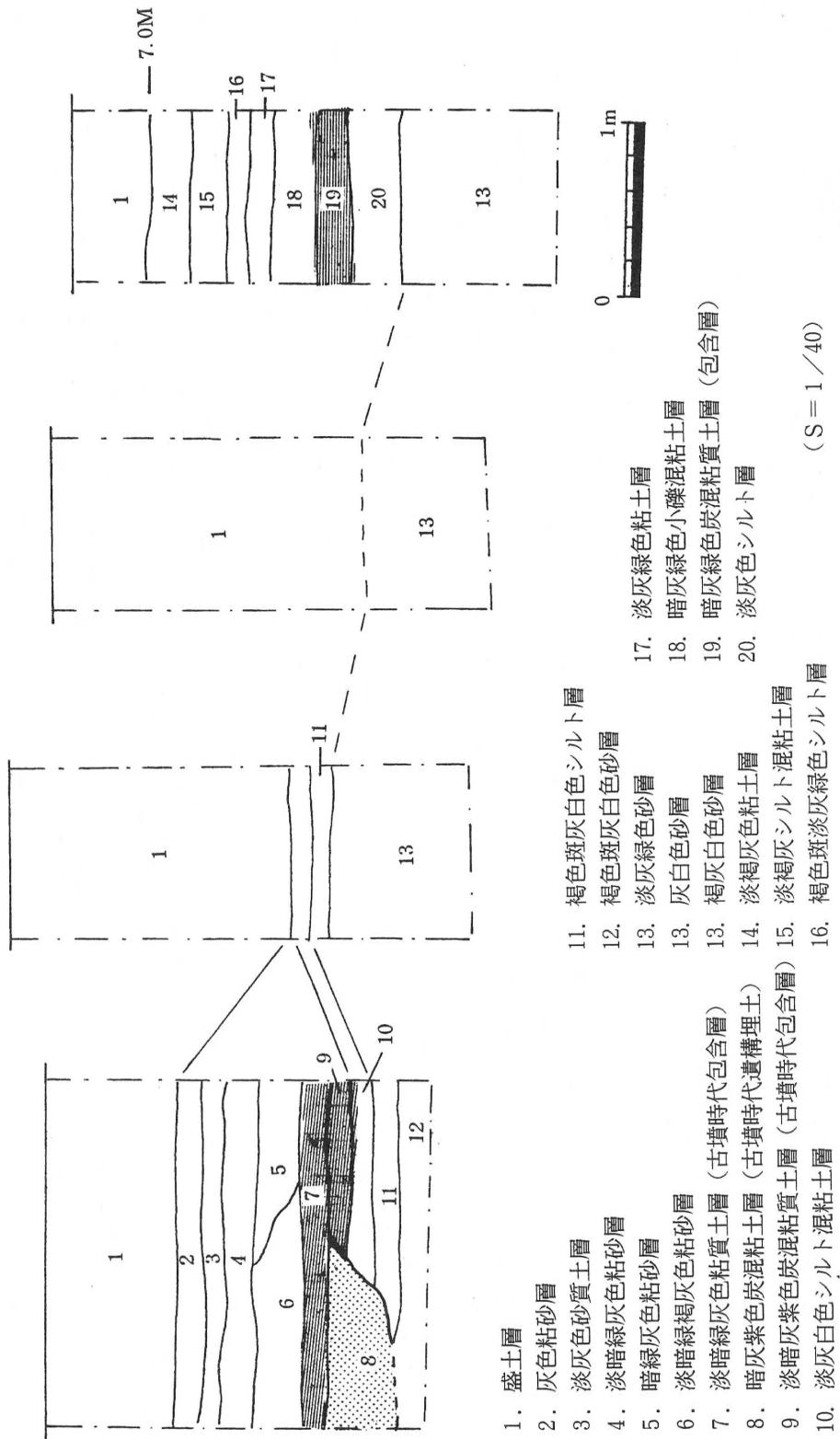
本調査では事業計画地西側を中心に古墳時代の包含層及び遺構が良好に遺存することがわかった。これまでの周辺の調査でも古墳時代の集落、墓域の一部を確認しており、本調査地でもこれと対応する遺構の確認される可能性が高い。

（吉田）

第1調査区

第2調査区

第3調査区
第4調査区



17. 龜井遺跡（91-255）の調査

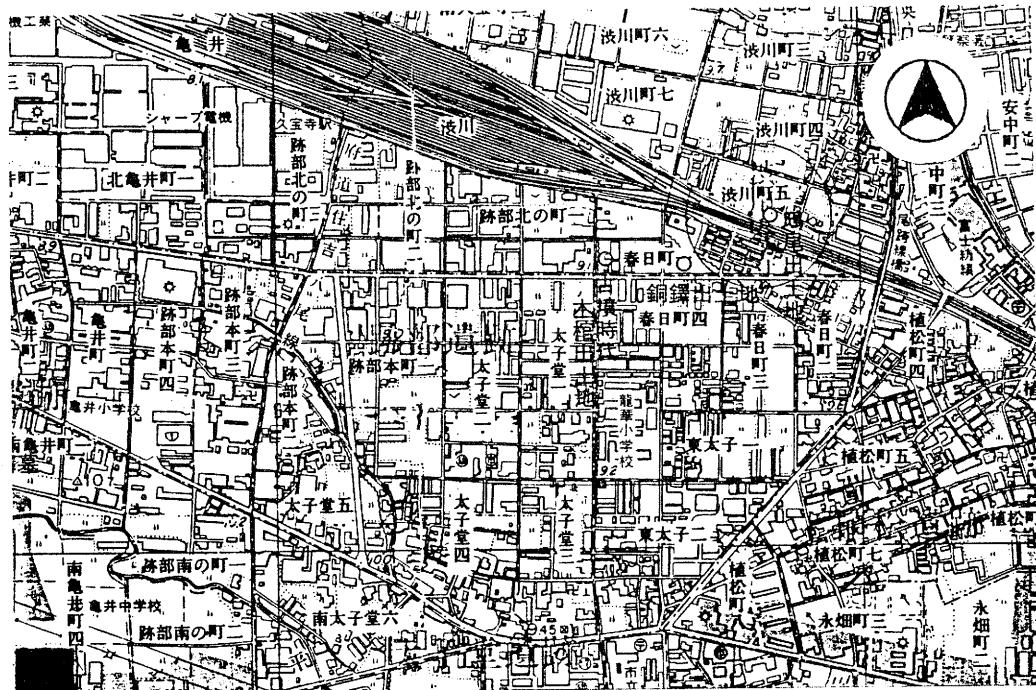
調査地 南龜井町4丁目44番1・5, 45番1, 46番1

調査期間 平成3年9月10, 11日

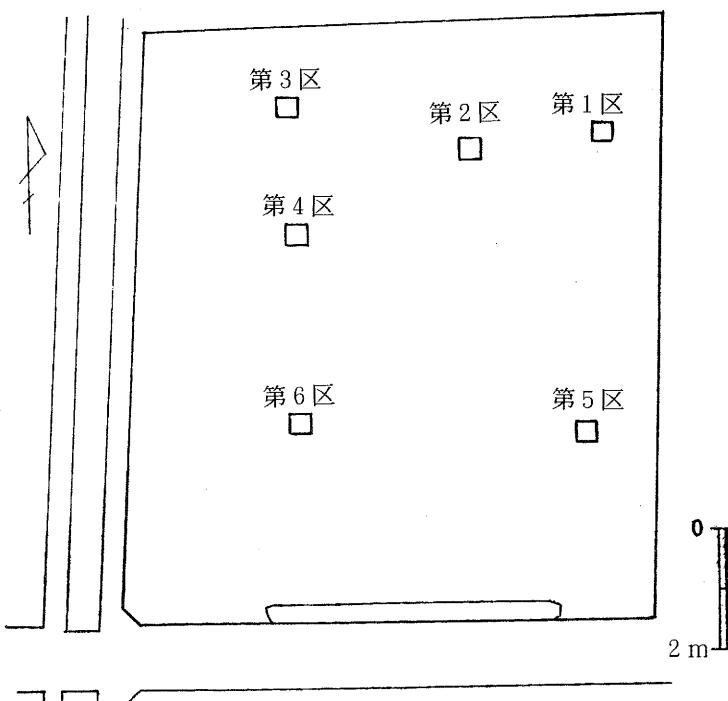
1. 調査概要

龜井遺跡は八尾市の西に位置し、北を久宝寺遺跡、東を跡部遺跡・太子堂遺跡、西を竹淵遺跡に囲まれている。遺跡内は近畿自動車道が南北に走っており、その建設に伴う助大阪文化財センターによる調査が実施された。また、当教育委員会・助八尾市文化財調査研究会によっても調査が行われている。その結果、旧石器や縄文晩期の遺物が出土したほか、弥生時代から近世に至る遺跡であることが判明している。特に弥生時代から古墳時代にかけては多数の遺構・遺物が見つかっており、当遺跡は河内平野における弥生時代の大集落とみられている。

今回の調査地は遺跡の中心地と思われる範囲から若干南に位置している。そのため8583m²の事業計画に対して、遺構・遺物の有無を確認する目的で3m×3mの調査区を6ヶ所設定し地表下約2~4mまでを掘削、調査を実施した。



第69図 調査地周辺図 (1/13000)



第71図 調査区設定図 (1/1200)

第1調査区 地表下約3.8mまで調査を行った。地表下1.85mの明灰黄色粘土～明灰褐色粘土で瓦器片、土師器片がみられ、その下層に水田相当層と思われる淡青灰色粘質土が遺存している。以下、暗灰色粘土～暗灰色微砂の堆積が確認されたが遺構・遺物はみられなかった。

第2調査区 第1調査区と層序はあまり変わらない。やはり地表下1.9m前後で瓦器の小片がみられ、その下層に水田相当層の淡青灰色粘質土が確認できた。

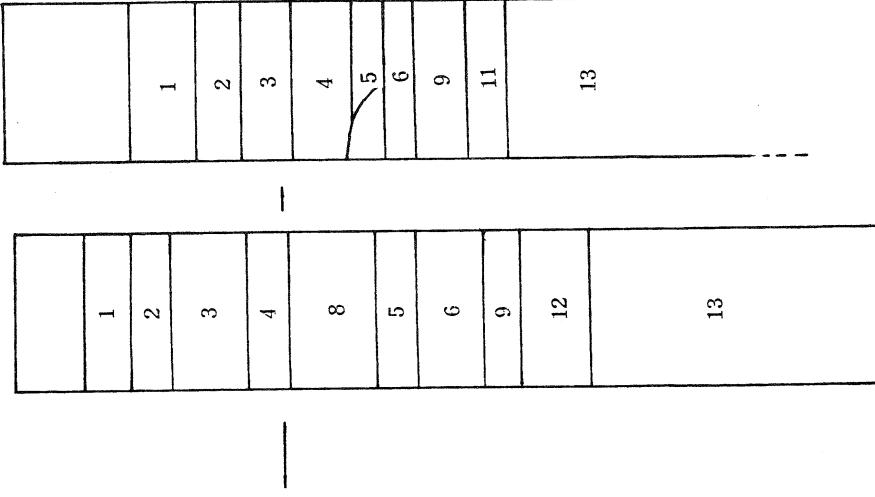
第3調査区 地表下2.45mまで調査を行った。地表下1.45mの明灰黄色粘土層で畦畔状遺構が断面で確認できたが、遺物は出土しておらず時期は不明である。

第4調査区 第1～3調査区で確認できた水田相当層はみられず、地表下2mで灰褐色細砂～暗灰色微砂が約0.8m堆積している。溝あるいは河川等の流路の一部と考えられる。

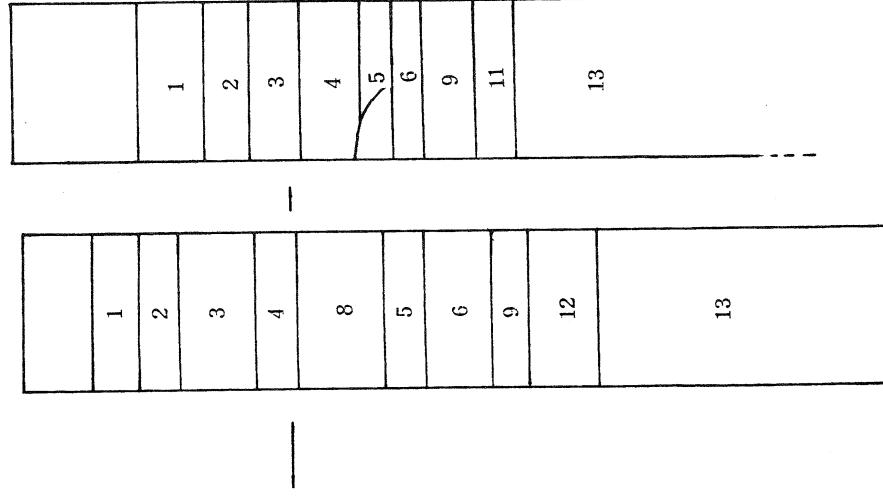
第5調査区 地表下1.85mの明灰茶褐色粘質土で土師器小皿1枚と須恵器片、土師器片出土した。包含層の厚さは約0.25mである。

第6調査区 地表下1.4m前後の明灰茶褐色粘質土で土師器および須恵器が小片ながら多数出土した。とくに須恵器では瓶子がほぼ完形で見つかっている。1の手法は一本ビキによっており、仕上げに伴う調整を行っておらず、底部は回転糸切り未調整で、高台は付してはいない。中村氏編年V形式2段階に比定できると思われる。（註1）包含層は約0.3mの厚さで堆積している。

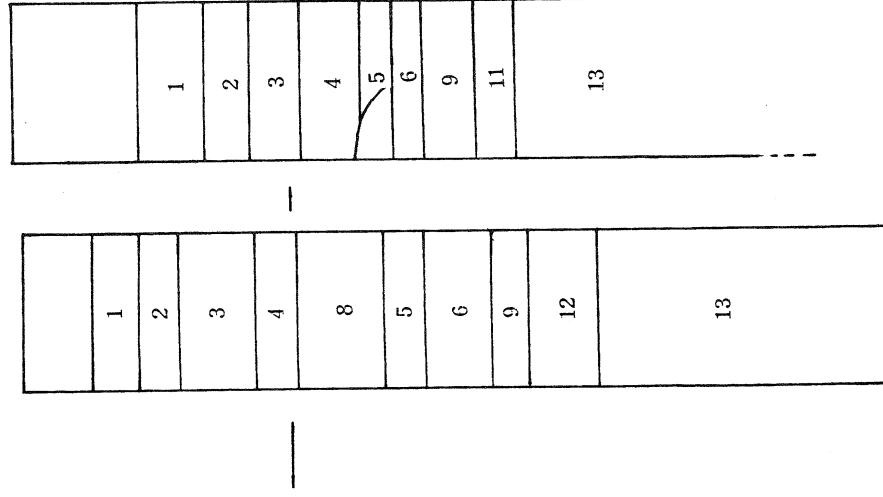
第1区



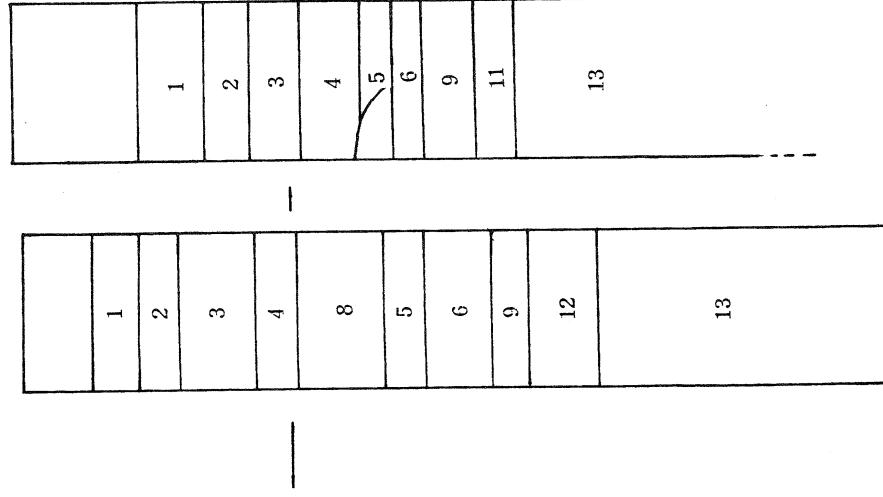
第2区



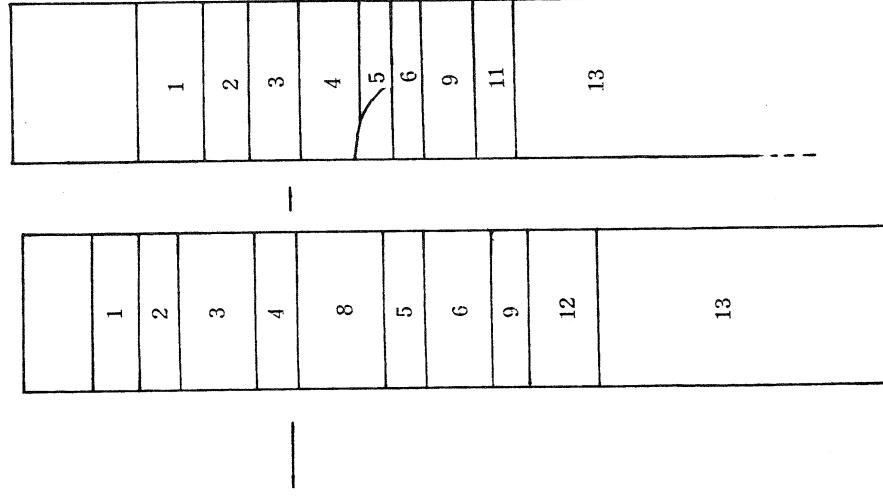
第3区



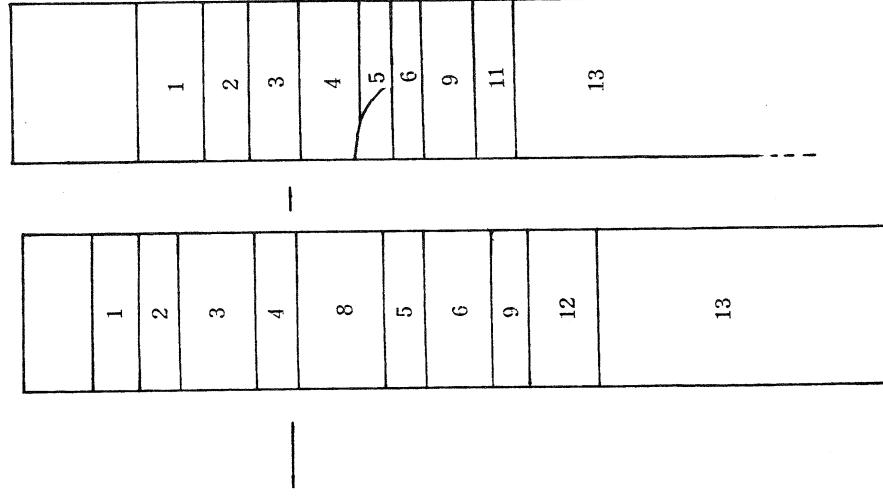
第4区



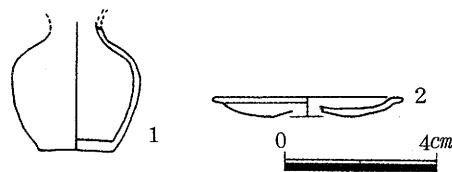
第5区



第6区



第72図 基本層序模式図 (1 / 40)



第73図 出土遺物実測図（1／4）

2. まとめ

今回の調査では事業計画地の南側に設定した第5・6調査区においては9世紀～10世紀にかけての良好な遺物包含層を確認することができた。また、北側では顕著な遺構および遺物包含層は見当たらなかったが、水田相当層が拡がっていることがわかった。それゆえに第4調査区でみられた流路を境として集落域と耕作域に分けていたと考えることもできよう（道）

参考文献

(註1) 大阪府教育委員会『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告 第30集 1978

18. 竜華寺跡（91-313）の調査

調査地 明美町2丁目36番2

調査期間 平成3年9月26日

1. 調査概要

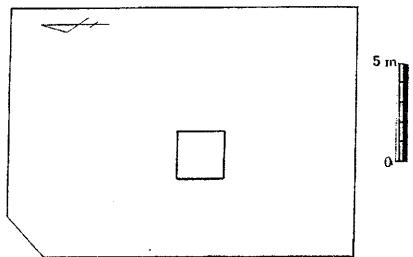
竜華寺が史書に現れるのは『続日本紀』の神護景雲3年（769）10月で、称徳天皇が由義宮に行幸された際に竜華寺に参拝されここで宮市を開かせ、また綿2万屯、塩30石を当寺に施入したと記されている。また、『類聚国史』には延暦19年（800）2月に垣武天皇が、若江郡の田1町6段を竜華寺に灯明料として寄進されたとある。しかし、この後国史にはその名は見られず、寺域の位置や伽藍の規模当は不明である。ただ近年まで安中小学校の西南の畑に大門の唐居敷といわれる巨石が2枚並んで残っていた。それ故に寺域の範囲は現在の行政区画では陽光園、安中6丁目付近と推定されており、安中廃寺とも呼ばれている。

今回の調査は安中小学校の東北にあたり、共同住宅建築に伴い、約230m²の事業計画地に対して2.5×2.5mの調査区を1ヵ所設定し、地表下2.7mまでの調査を実施した。

地表下0.72mからの淡緑灰色粘砂層で土師器・須恵器片に混じって陶磁器の破片がみられ、



第74図 調査地周辺図 (1/13000)



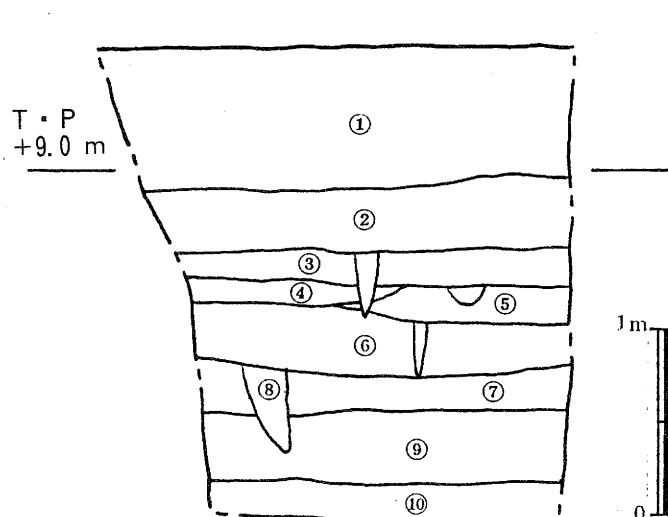
第75図 調査区設定図 (1/400)

近世の遺物包含層と思われる。この層以下では今回3面の遺構面を検出したが、いずれも中世以降のものである。

地表下約1.3mの暗灰色粘砂I(Feを含む)では、土師器・瓦器片が出土し、また層上面では北側への落ちが確認できた。流路の肩とみられる。

次層の暗灰色粘砂IIでは杭跡、焼土が検出できた。この層は涌水層であり、杭の遺存状態は良好であった。杭の径は約6cm～8cmである。遺物は土師器の小皿がおよそ10枚重ねられ、裏返しになった状態で出土した。また、その近くで同様の小皿が数枚出土している。杭がみられることから溝あるいは畦畔があり、その祭祀に関連して埋めるか捨てるかしたものであろう。

地表下1.6mの暗灰色粘土上面でも杭跡やピットを確認した。遺物ではこの層中に瓦器・ねり鉢等は出土しているが、暗灰色粘砂I・IIと比較すると土師器はあまりみられなくなる。また、暗灰色粘砂I・IIでは植物遺体が多く見られたが、この層ではそれほどでもなかった。



- ① 表土
- ② 淡緑灰色粘砂
- ③ 褐灰色粘砂
- ④ 緑灰色粘質土
- ⑤ 暗灰色粘砂I (Fe)

- ⑥ 暗灰色粘砂II
- ⑦ 暗灰色砂質粘土
- ⑧ 淡茶褐色粘砂
- ⑨ 明灰色シルト～灰色細砂
- ⑩ 暗灰色砂質シルト

地表下1.9mの明灰色シルト～灰色細砂の互層では出土遺物の大半が瓦器碗の破片であり、上述した3つの層の遺物より、遺存状態が良い。また砥石・布目瓦片等も出土している。この層は東から西に落ち込んでいるのが北壁断面で確認でき、溝あるいは堀の一部と考えられる。

2. 出土遺物
1・2は暗灰粘砂IIで重なった状態で出土したものである。径8cmで調整は指頭圧成形後内外口縁部にヨコナデを施している。底部

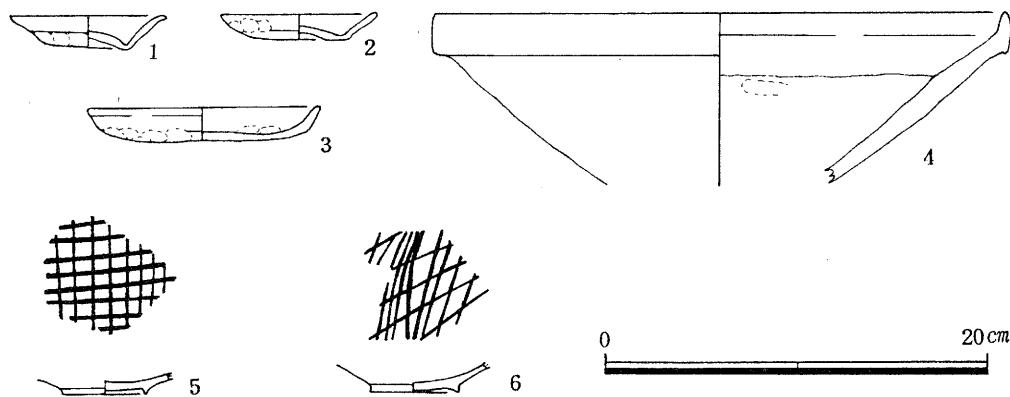
第76図 東壁土層断面図 (1/40)

は丸く隆起している。14世紀中葉から後半に比定できる。4は暗灰色粘土層から出土したねり鉢である。3・5・6は明灰色シルト～灰色細砂から出土したものである。5は格子状に見込みの暗文を施し、高台は断面三角形を呈する。その形態から12世紀後半に位置づけ得る。

3.まとめ

今回の調査では寺院に関連した遺構を検出することはできなかった。しかし、多くの中世の雑器すなわち土師器皿・瓦器椀・ねり鉢・砥石が出土した。そのなかで土師器小皿が重ねて埋められていたのは、何らかの祭祀に基づいていることも考えられ興味深いものである。また図化しなかったが砥石などはかなり使い込まれたもので、調査地近辺に鎌倉時代から室町時代にかけての集落があったことが想像できよう。

(清)



第77図 出土遺物実測図（1／4）

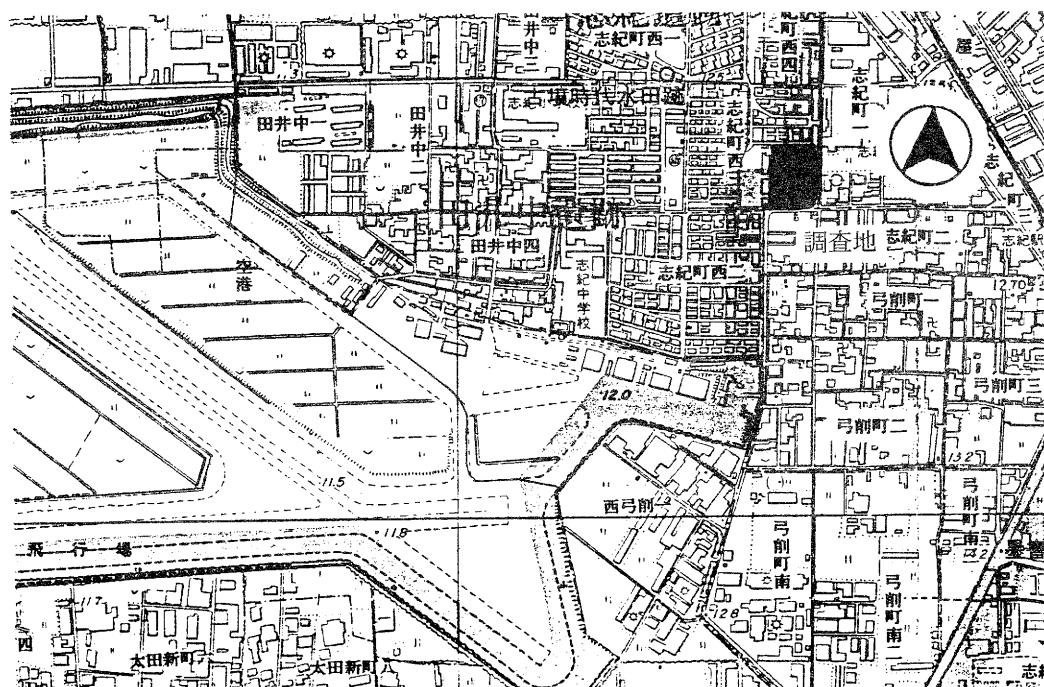
19. 志紀遺跡（91-319）の調査

調査地 志紀町西3丁目12番地

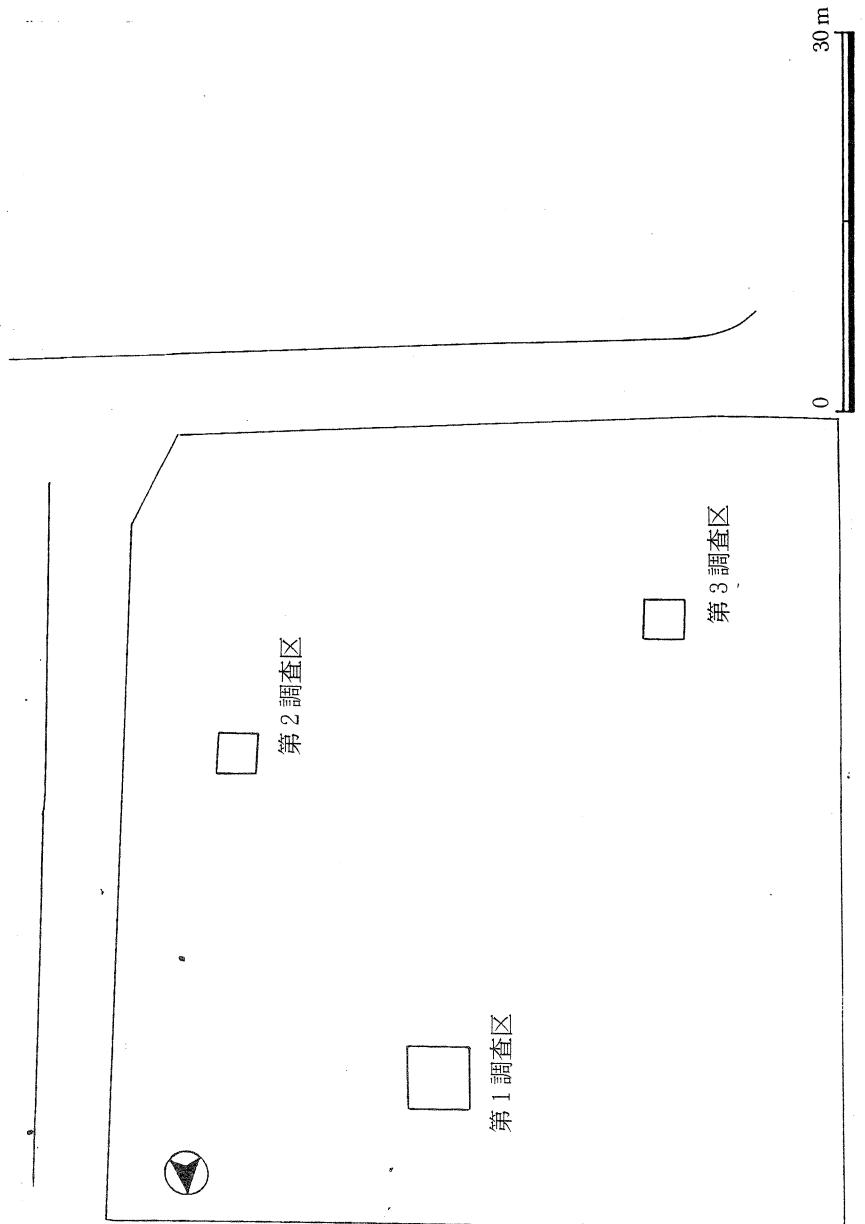
調査期間 平成3年10月7・8日

1. 調査概要

本調査は管理棟他建設に伴う遺構確認調査である。まず、事業計画地の北側の給油所部分に第1調査区を、東側の管理棟南端部分に第2調査区を、西側の検査場建設部分の東側で第3調査区をそれぞれ設定した。この結果、地表下2.0m～2.3m（TP6.4m～6.9m）で古墳時代中期の土器を含む白色斑淡暗灰色粘土層を確認した。この土層は水田面を構成する層となる可能性がある。またこの層の下には灰色砂混粘土と粗砂層が堆積しており、これもまた水田相当層となる可能性がある。第2調査区では、5m四方の調査区を設定し、段掘で地表下3.0mまで掘削したところ、地表下1.3m前後の灰褐色粘砂層上面で青灰色粘土を埋土とする土坑、ピット等を確認した。これらは中近世のものと思われる。また、地表下1.8m～2.3m（TP6.4m～6.9m）で第1調査区で検出した淡暗灰色粘土層を確認した。またこの下の暗淡灰色シルト混粘土が若干高まる部分があり畦畔となる可能性がある。第3調査区でも同様に5m四



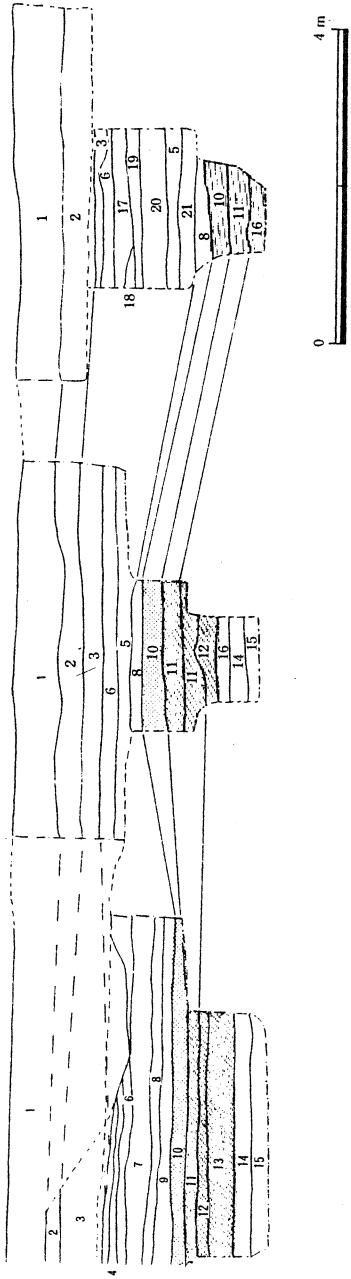
第78図 調査地周辺図（1/13000）



第1調査区

第2調査区

第3調査区



1. 盛土層
2. 緑青灰色粘土層（現代耕土）
3. 暗褐色粘土層（近世生活面構成層）
4. 褐色斑灰色砂層
5. 灰色砂層
6. 暗褐色シルト粘土層
7. 淡暗緑灰色粘砂層
8. 淡暗灰色シルト質粘土層
9. 淡暗灰色砂混粘土層
10. 淡暗灰色粘土層（古墳時代土器包含層）
- 11-1. 白色斑淡暗灰色粘土層
2. (粘性強い)
12. 灰色シルト質粘土層
13. 白色斑灰色砂混粘土層
14. 灰白色粗砂層
15. 灰色粘土層
16. 暗灰色粘土層（水田構成層か）
17. 暗褐色シルト混粘土層
18. 灰色砂混粘土層（畦畔状遺構）
19. 暗褐色斑灰色砂混粘土層
20. 暗褐色斑灰色砂質シルト層
21. 淡暗灰色粘砂層

第80図 基本層序模式図

方を段掘で地表下3、0 mまで掘削したところ、地表下1、0 m～1、2 mで中世の水田面になるかと思われる暗灰褐色粘土層を確認した。この層には一部畦畔状の高まりが見られる。また地表下2、4 m～2、9 mで第1調査区、第2調査区で確認した水田相当層と思われる暗灰色粘土層、暗灰色シルト質粘土層を確認した。これらの層には一部小畦畔状に高まる部分が見られる。

出土した土器はいずれも小片である。第1調査区の白色斑暗灰色粘土層から出土した土器は須恵器杯身の破片、土師器の甕があり、土師器の甕は口縁端部が平たく肥厚するタイプのものである。第2調査区の白色斑暗灰色粘土層からは、須恵器杯身、同高杯脚部の破片、土師器の甕片、同高杯が出土している。これらは5世紀後半から6世紀にかかる所産であろう。

2. まとめ

当調査地では古墳時代後期以前の水田を構成する層を、広範囲にわたって、しかも非常に良好な状態で確認した。水田面は土層の観察から2面以上あるものとみられる。当調査地の西側でも古墳時代から中世にいたる水田を確認しており、ここで確認した遺構は志紀遺跡における水田域を示す資料として重要である。

(吉田)

20. 東郷遺跡（91-330）の調査

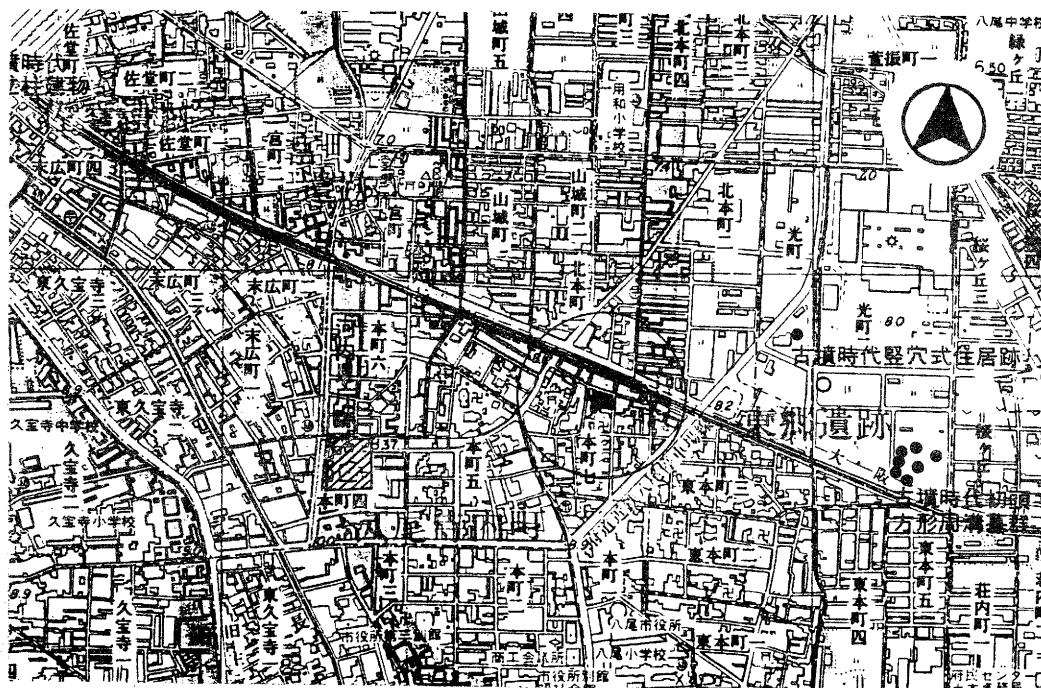
調査地 本町7丁目87-2, 85-1, 87-4, 85-6, 85-3の一部
調査期間 平成3年10月14日

1. 調査概要

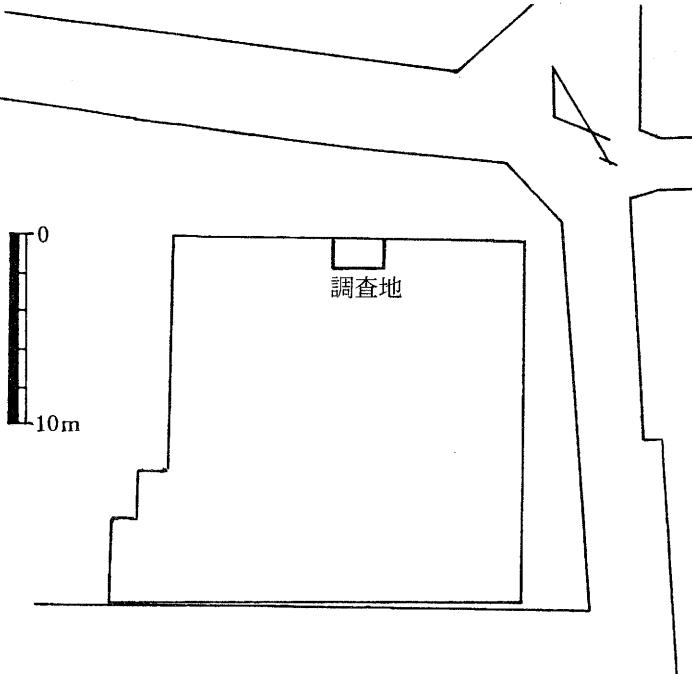
東郷遺跡は、近鉄八尾駅を中心として光町、東本町、莊内町、桜ヶ丘、北本町に拡がっている。昭和56年以後、駅周辺の開発に伴い当教育委員会や八尾市文化財調査研究会による30次以上におよぶ調査が行われ、また大阪府教育委員会によっても数次の調査が成されている。その結果、当遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代にいたる複合遺跡であることが確認された。

今回の調査地の南120mで八尾市文化財調査研究会による第30次調査が行われており、平安時代末期から鎌倉時代の居住地が確認されている。（註1）

本調査は遊技場及び寮建設に伴い、遺構・遺物の有無を確認する目的で 1.5m × 2.5m の調査区を1カ所設定し、現地表下より 2.7mまでの調査を実施した。



第81図 調査地周辺図（1/1300）



第82図 調査区設定図（1／400）

地表下 0.9mまでは廃棄物を多量に含む盛土がなされている。この盛土を排除すると旧の耕作土が 0.4mの厚さでみられるが、層中より近世の陶器などが出土している。

地表下1.25m前後にみられる淡緑灰色粘砂とその下部層の淡灰色粘砂では、瓦器椀、土師器更、羽釜片などが出土しており、中世の遺物包含層とみられる。この2層は併せて約0.3 mの厚さで堆積している。

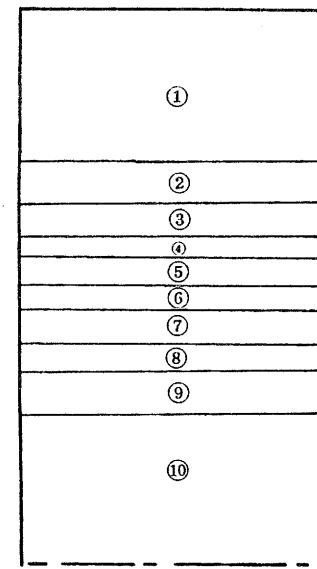
以下、遺構・遺物はみられなかったが、地表下 2.0m前後の暗灰色粘土層中で径約 1.7mの樹木がみられた。しかし、実見した限りでは加工痕を確認することはできなかった。この層では他に遺物は出土していない。

2. まとめ

今回の調査では、狭い面積であったが中世に比定できる遺物が出土した。上述した30次調査の他に、本調査地の北西約70mで行われた第34次調査においても同時期の遺構・遺物を確認しており（註2）、調査地を含めて鎌倉時代を中心とする集落が拡がっていると考えられる。（消）

参考文献

- （註1）『八尾市文化財調査研究会年報平成元年度』
- （註2）『平成2年度八尾市文化財調査研究会事業報告』



- | | |
|---|-----------|
| ① | 表土 |
| ② | 暗緑灰色砂質土 |
| ③ | 暗灰色粘質土 |
| ④ | 淡緑灰色粘砂 |
| ⑤ | 淡灰色粘砂 |
| ⑥ | 明灰色粘質土 |
| ⑦ | 明灰色砂質土 |
| ⑧ | 暗青灰色粘砂 |
| ⑨ | 暗灰色粘土 |
| ⑩ | 暗灰色シルト混粘土 |

第83図 基本層序模式図（1／40）

21. 小阪合遺跡（91-345）の調査

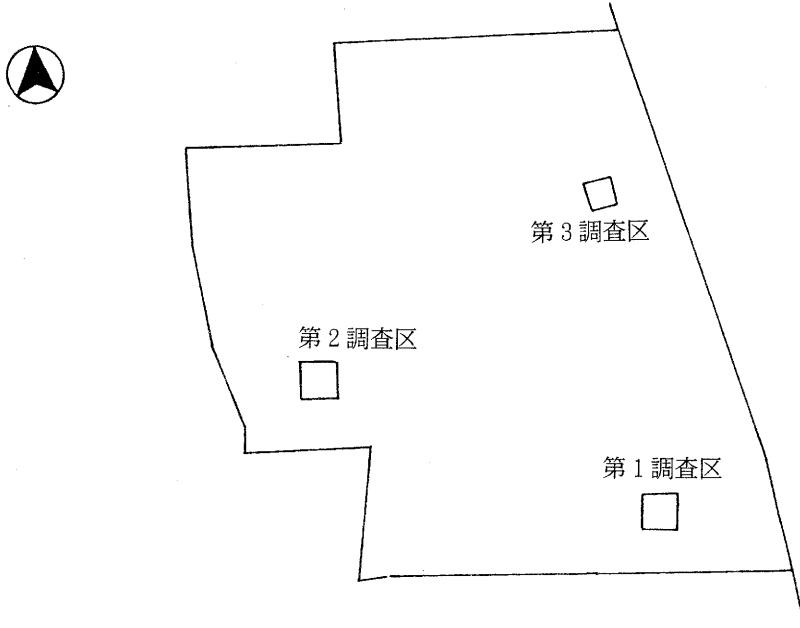
調査地 若草町25-1、25-4、25-5、27、28
調査期間 平成3年10月22日

1. 調査概要

本調査は共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の南側に第1調査区を、西側に第2調査区を、それぞれ2.5m四方で、北側に第3調査区を2m四方で設定した。第1調査区では、地表下2.9mまで重機と人力を併用し掘削を行なったところ、地表下1.2m～1.7mで中世の土器を含む暗茶灰色粘砂層、褐色斑灰色粘砂層を確認した。これらの層の上面はそれぞれ小穴等のきりこむ遺構面となる。これより下は灰色系の粘土層、シルト層が堆積し、地表下2.9mで白色斑暗青灰色有機物混粘土層を確認した。この層は水田面となる可能性がある。第2調査区では地表下1.3m～1.6mで中世の土器を含む明淡灰色粘砂層、灰色粘砂層を確認している。またこの下の灰白色粗砂層上に載るような状態で布留式土器の甕が一個体分がまとまった状態で出土した。以下、地表下2.4mまで掘削を行ったが、自然流路の埋土と思われる灰白色粗砂層の堆積がつづいていた。第3調査区では地表下1.8mまで掘削を行なったところ、



第84図 調査区設定図 (1/13000)



第85図 調査区設定図 (1/400)

地表下1.25m～1.6 mで中世の土器を含む淡茶灰色粘土層、茶灰色粘土層、茶褐色斑灰色砂質土を確認した。2層目の茶灰色粘砂層上面では、全容は不明だが平瓦のおちこむ溝状遺構と小穴を1基確認した。

第1調査区、第2調査区の中世包含層及び遺構から出土した遺物は、瓦器椀、土師器、須恵器などである。第2調査区の灰白色粗砂層上の布留式土器の甕は磨滅が著しくばらばらに壊れた状態であるが、体部を中心にはぼ1個分の破片がある。口縁部はやや内湾し端部は小さく肥厚する。器壁は薄い。布留式土器の中段階頃のものであろう。第3調査区の溝状遺構からは平瓦が出土した。凸面に全くタタキを残さないものである。中世の新しい段階のものと思われる。

2. まとめ

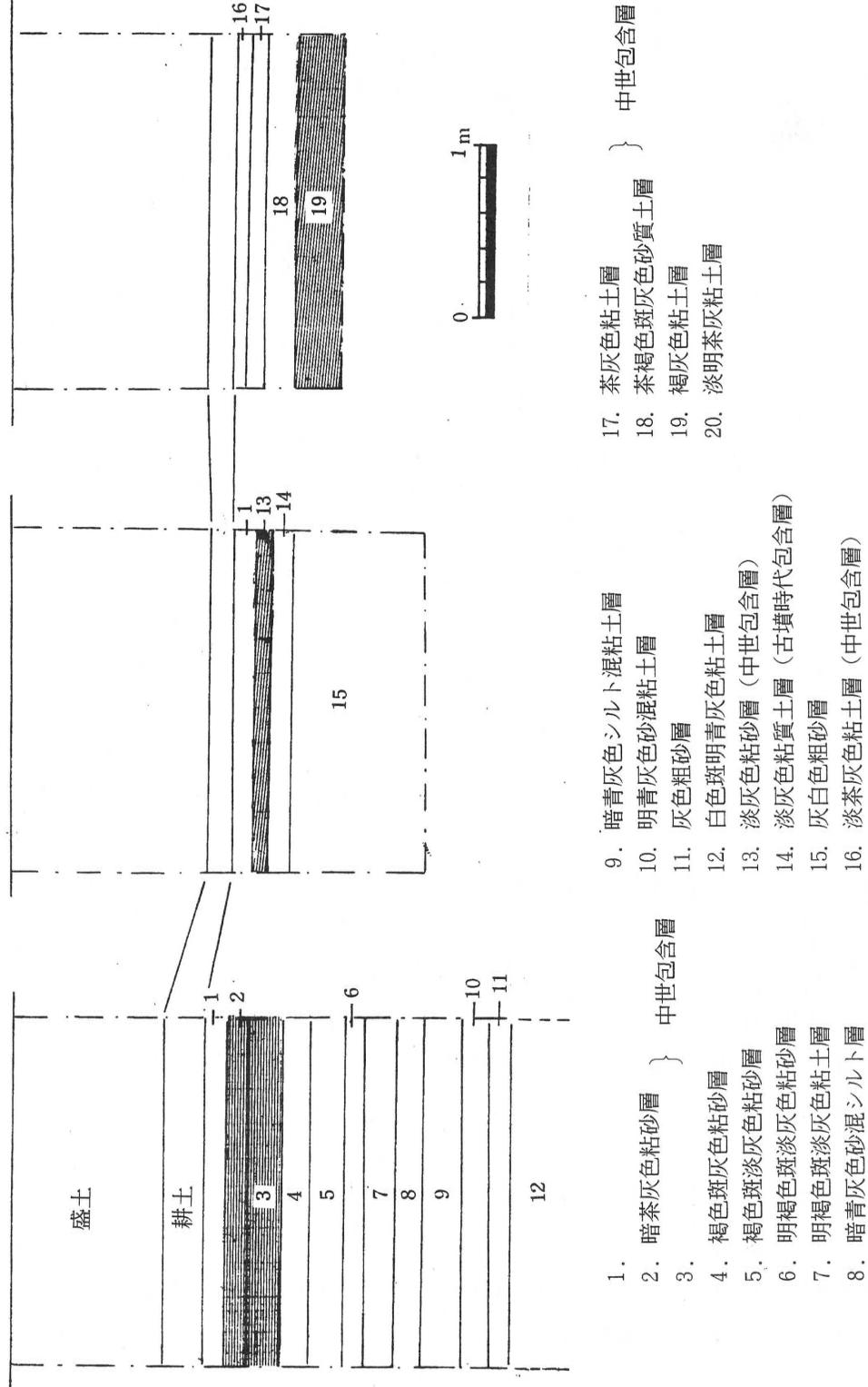
当調査地では中世の包含層を非常に良好な状態で確認した。また、第2調査区の調査結果から、このすぐ下で古墳時代の遺構等が確認される可能性も高い。周辺では弥生時代～中世にいたる遺構等が広範囲にわたって確認されており、当調査で確認された包含層他はこれらと密接な関連をもったものとして重要である。

(吉田)

第1調査区

第2調査区

第3調査区



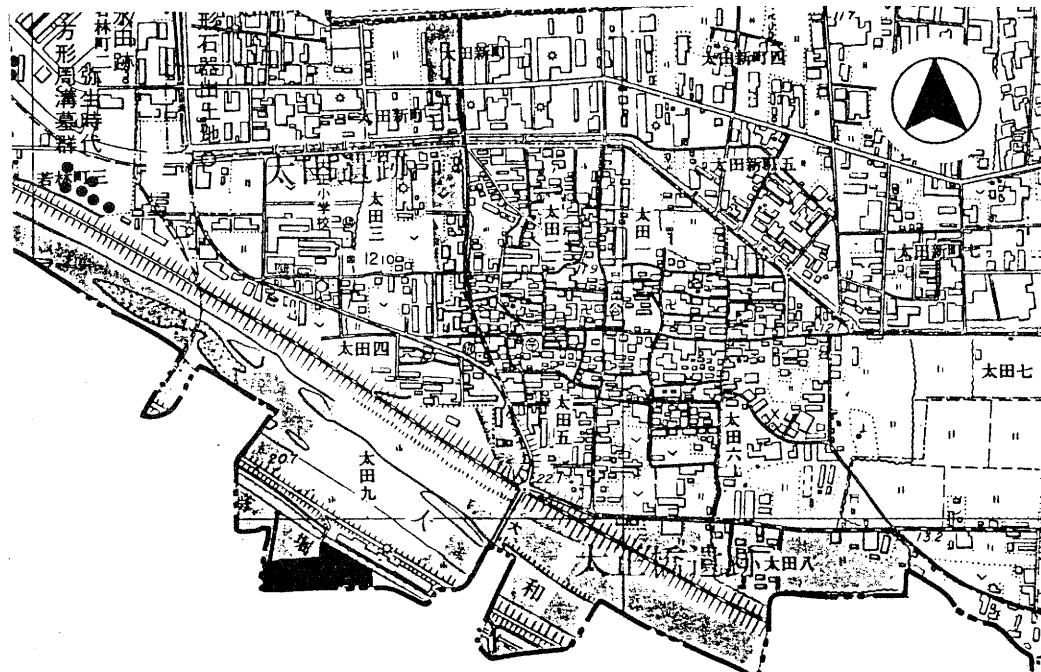
22. 太田遺跡（91-185）の調査

調査地 太田9丁目40他6筆

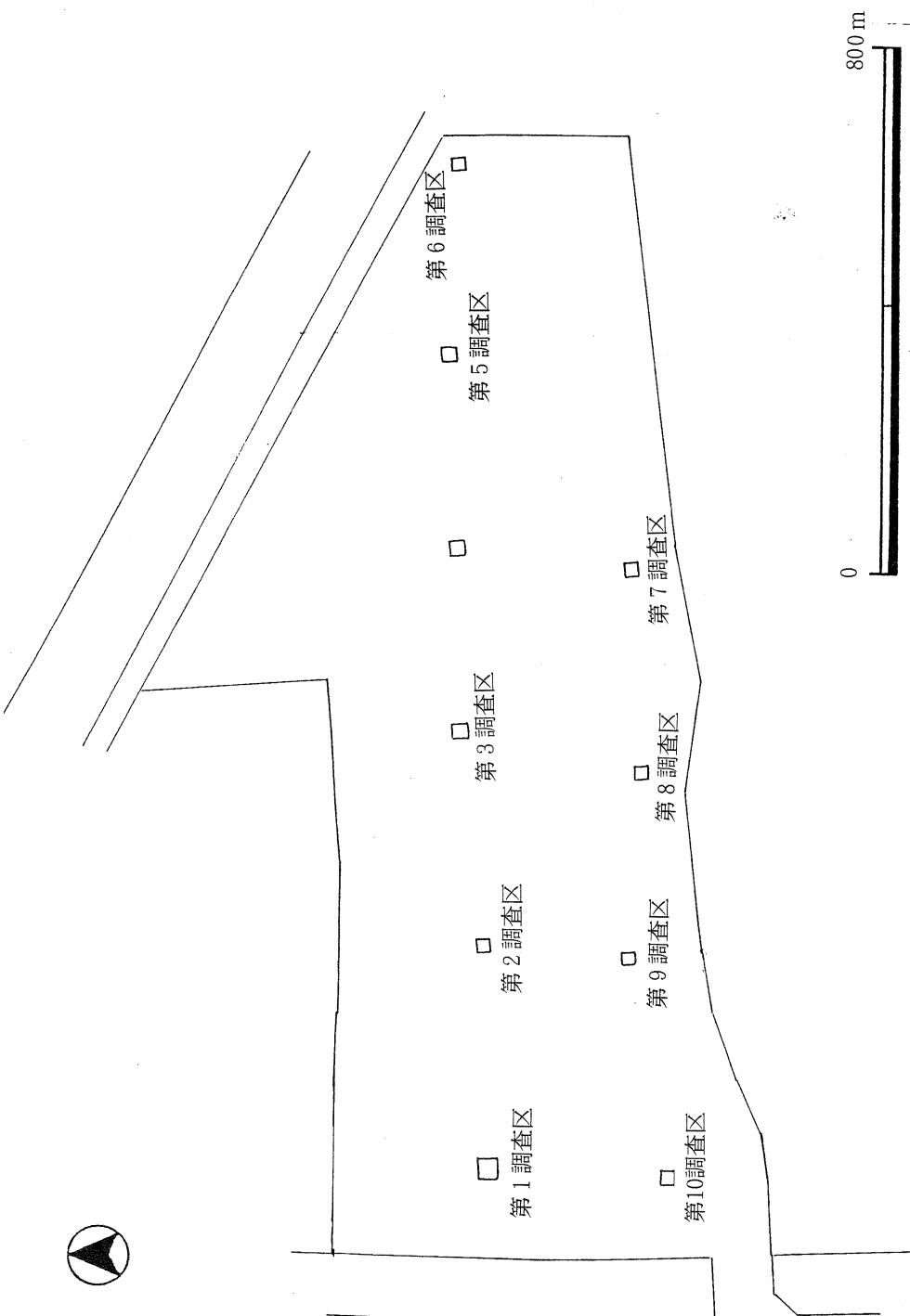
調査期間 平成3年10月24、25日、28日

1. 調査概要

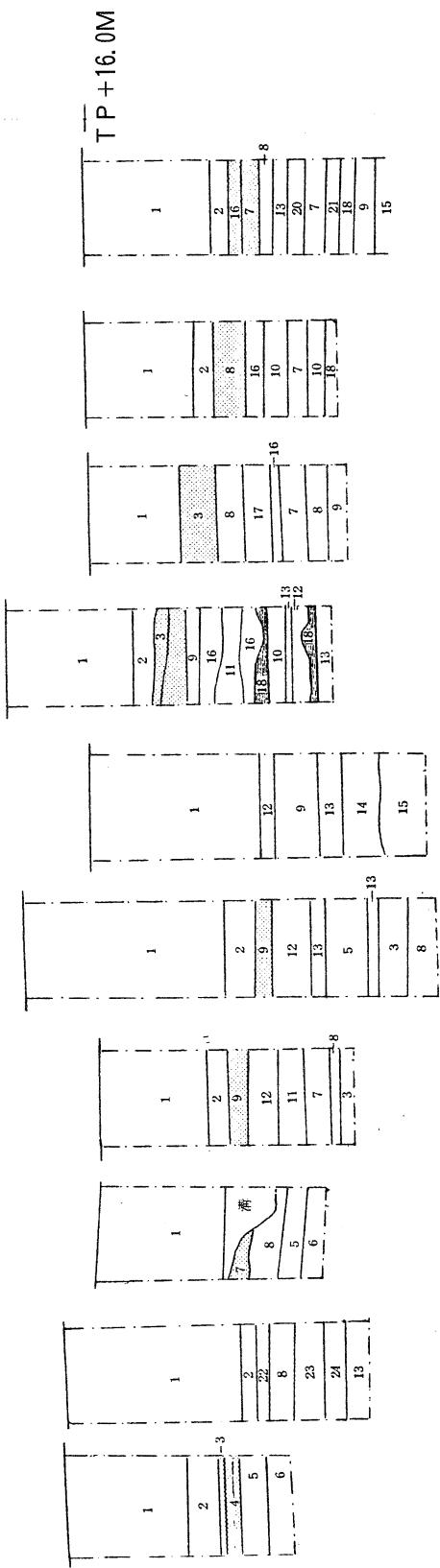
本調査は調整池他築造に伴う遺構確認調査である。事業計画地内の包含層・遺構の遺存状態を把握することを目的として、事業計画地全体に2m四方程度の調査区を10ヶ所を設定した。この結果、事業計画地全体で旧耕作土および床土の直下で中世の遺構および包含層の存在することを確認した。全体に厚いところで2m近い盛土が堆積する部分もあるが、包含層の標高はおよそ14.2m～15.4mである。この包含層は調査区南西の第7調査区では最も高く、調査区東端の第6調査区では最も低い。この包含層は黄褐色粘砂層、淡灰色粘砂層を中心で灰紫色粘土層になっているところもある。層厚は0.2m～0.4mである。また、第7調査区では地表下2.5m以下で水田構成層になるかと思われる土層を確認している。以下、特に遺構が顕著にみられた第1調査区、第7調査区の状況について簡述する。



第86図 調査地周辺図 (1/13000)

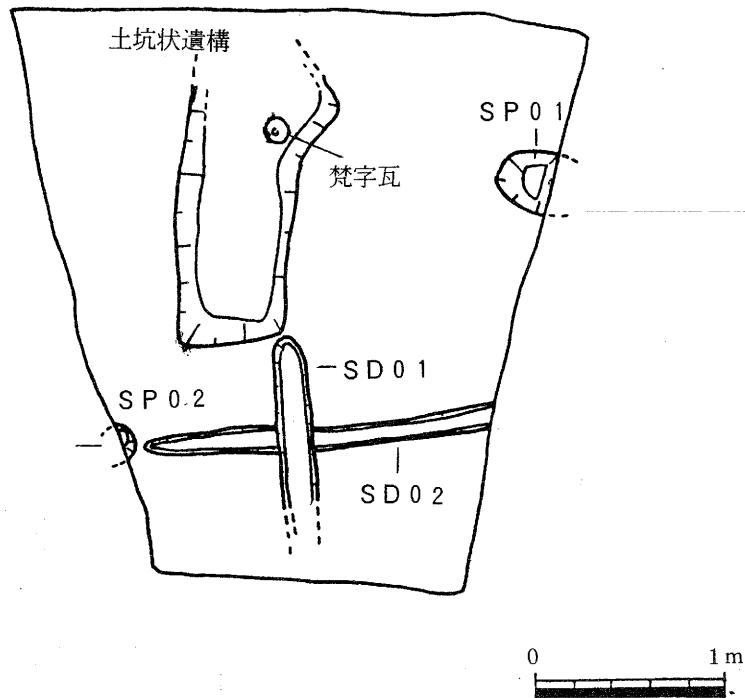


第87図 調査区設定図（1／1000）



- 87 —
- 1. 盛土
 - 2. 旧耕作土
 - 3. 黄褐色粘砂層
 - 4. 淡灰色粘砂層
 - 5. 黄褐色粘土
 - 6. 淡灰白色粘砂層
 - 7. 灰白色粘砂層
 - 8. 灰紫色粘土層
 - 9. 灰白色粘土層
 - 10. 灰白色シルト層
 - 11. 黄褐色シルト層
 - 12. 灰色粘土層
 - 13. 灰色粗砂層
 - 14. 褐色粘砂層
 - 15. 青灰色粘土層
 - 16. 灰褐色粘土層
 - 17. 灰白色粘土層
 - 18. 暗灰色粘土層
 - 20. 褐色粘砂層
 - 21. 淡暗灰粘砂層
 - 22. 暗灰茶色粘土層
 - 23. 淡褐灰色粘土層
 - 24. 淡灰色砂質土層
- 中世包含層

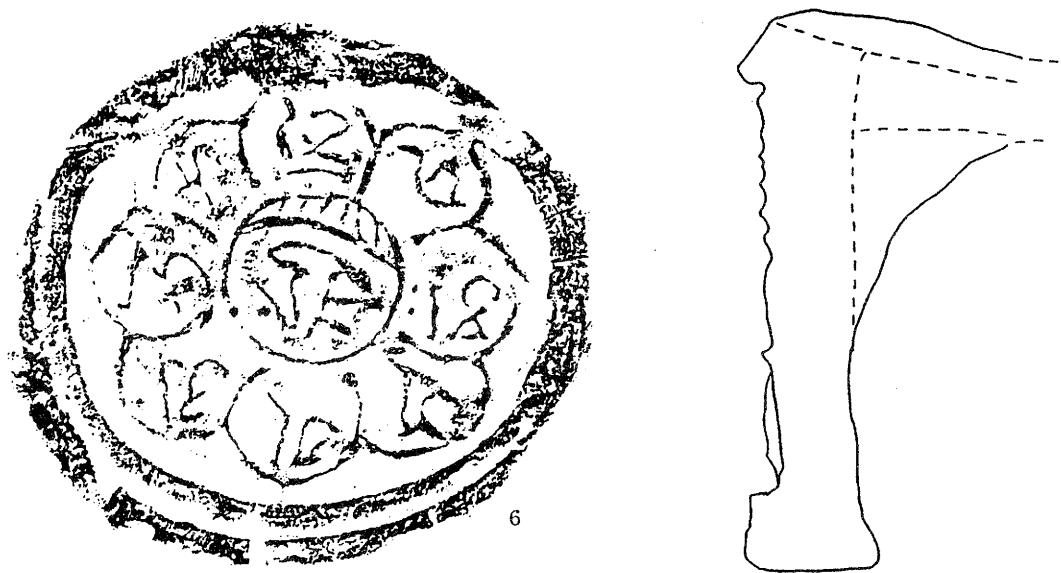
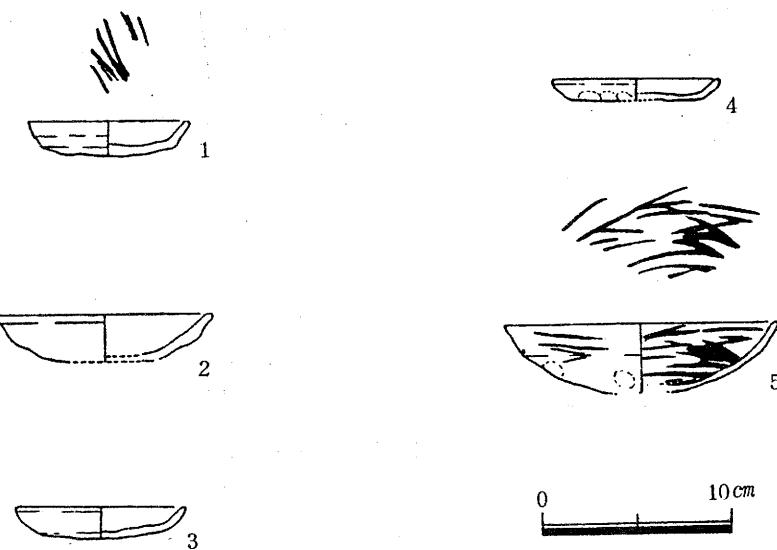
第88図 基本層序模式図(1／40) (左から第1調査区→第10調査区)



第90図 第1調査区平面図（1／40）

第1調査区では地表下1、7m前後、TP 14、7m前後の淡灰色粘砂層上面で土坑状遺構1基、溝2基、ピット2基を確認した。土坑状遺構は長さ1、7m以上、最大幅0、75m、最大の深さ0、2mを測り灰色粘砂層を埋土する。溝状遺構となる可能性もある。この遺構の北方、埋土の上方で梵字曼陀羅文軒丸瓦（6）が瓦当面を上にした状態で出土した。ここからはこの他に平瓦、土師器、瓦器などが出土している。特に平瓦は軒丸瓦の周辺から多く出土した。SP 01は径0、3m、深さ0、15mを測るピットで埋土は灰色粘砂層である。瓦器、土師器の破片が出土した。SD 01は最大幅0、2m、最大の深さ0、04mを測る。SD 02は最大幅0、15m、最大の深さ0、04mを測り、灰色粘砂層を埋土とする。

次に出土遺物について述べる。遺構面の上に堆積する黄褐色粘砂層からは瓦器、土師器が出土している。1は同層から出土した瓦器の皿、2は土師器の皿である。3、4はSP 01から出土した土師器の皿、5は瓦器の椀である。これらは13世紀頃の所産である。SP 02、SD



第91図 第1調査区出土遺物実測図

01、SD02からも同時期の遺物が出土している。土坑状遺構から出土した軒丸瓦は胎蔵界曼陀羅の中心部分である中台八葉院という部分を瓦当文様としたものであり、中台八葉院内に描かれる仏を梵字で象徴した梵字曼陀羅文軒丸瓦である。瓦当面の径は14.7cmを測る。瓦当文様は上下逆になっている。文様は断面三角形状の線で表現され、中台部分には大日如来を表す**丸**(アーンク)が蓮を示す文様の上に記される。周囲の八葉は上から時計周りに宝幢如来を表す**丸**(ア)、普賢菩薩を表す**丸**(アン)、開敷華王如来を表す**丸**(ア)、文殊菩薩を表す**丸**(ア)、無量寿如来を表す**丸**(アン)、觀世音菩薩を表す**丸**(ボ)、天鼓雷音如來菩薩を表す**丸**(ア)、弥勒菩薩を表す**丸**(ユ)を記す。瓦当部の丸瓦部への取り付けはほぼ直角で、内面には断面三角形状の粘土をやや厚めに補強する。色調は暗灰色で焼成は瓦質であるが、硬質である。胎土は粗い。伴出した土器や周囲の遺物のありかたから、12世紀後半、鎌倉時代の初め頃の所産と思われる。平安時代の末までさかのぼる可能性もあるが、判然としない。この軒丸瓦の類例は当麻寺曼陀羅堂から出土している。^(註1)近くでは堺市の塩穴寺の採集資料に類例がある。^(註2)第7調査区では地表下2.4m以下で水田構成層と思われる暗灰色粘土層を確認した。特に下層のそれは畦畔状に若干たかまる部分がある。

2.まとめ

本調査地では中世の包含層を非常に良好な状態で、しかも広範囲にわたって確認した。周辺の調査では津堂2丁目で藤井寺市によって西水川の改修に伴う発掘調査がおこなわれている。^(註3)幅1.0m~1.8mの直角に曲がる溝が検出されており、近くから12世紀~13世紀にいたる土器が出土しており、中世館の区画溝と考えられている。今回の調査で出土した梵字曼陀羅文軒丸瓦のあり方を考えても、平安時代から鎌倉時代にかけて館跡もしくは寺院の存在した可能性が高い。

註1 梵字曼陀羅文軒丸瓦の観察、類例の調査にあたっては、財団法人京都市埋蔵文化財研究所の吉村正親氏、羽曳野市教育委員会の河内一浩氏、大和郡山市教育委員会の浜口芳郎氏に御教示をいただいた。記して謝意を表したい。

註2 近藤康司 「和泉国大鳥郡塩穴郷 塩穴寺」 『摂河泉会報第16号』 1991年

註3 藤井寺市教育委員会 『藤井寺市文化財保護事業年報昭和60、61、62年度』 1990年

23. 成法寺遺跡（91-392）の調査

調査地 光南町1丁目2-23

調査期間 平成3年10月25日

1. 調査概要

成法寺遺跡は光南町、清水町、南本町、明美町一帯に拡がっており、旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に立地している。

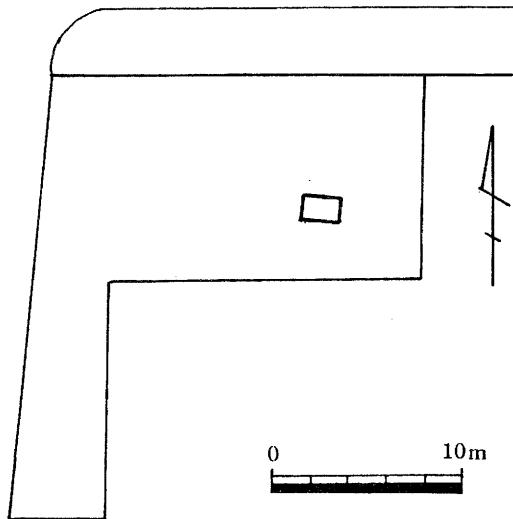
遺跡発見の契機は、当教育委員会が昭和56年に光南町1丁目において実施した調査によって弥生時代後期の土器溜、古墳時代前期の方形周溝墓4基、後期の掘立柱建物5棟を検出したことによる。（註1）その後、当教育委員会、（財）八尾市文化財調査研究会、大阪府教育委員会によって調査が行われ当遺跡は弥生時代中期～近世にいたる複合遺跡であることが判明している。

本調査はガソリンスタンドの改築工事に伴うもので、ガソリンタンク埋設位置に1m×2mの調査区を設定し、遺構・遺物の有無を確認するため地表下2.5mまで掘削を行った。

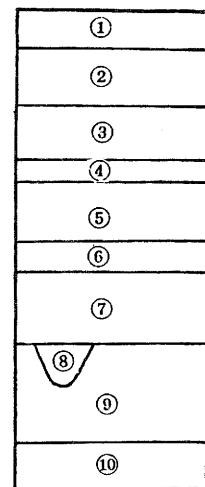
約0.2mの表土を取り去ると、旧の耕作土がみられ以前の建物による攢乱は受けていなかつ



第92図 調査地周辺図（1/1300）



第93図 調査区設定図（1／400）



第94図 基本層序模式図（1／400）

た。基本層序は、①表土、②旧耕作土、③淡緑灰色礫混粘砂、④淡緑灰色礫混粘質土、⑤緑灰色粘砂（Feを含む）、⑥緑灰色礫混粘質土、⑦淡灰緑色粘質土、⑧暗緑灰色粘質土、⑨黒灰色粘土、⑩黒灰色シルト混粘土である。

遺物包含層は本調査では2層確認できた。第1の層は地表下約1.20mの緑灰色礫混粘質土である。この層では土師器の小皿片が出土している。第2の層は地表下1.75mに存する黒灰色粘土とその下部層の黒灰色シルト混粘土である。特に黒灰色粘土層は約0.5mの厚さで堆積しており、最も密に遺物を包蔵している。遺物は弥生時代終末期の甕、高杯、古墳時代の土師器甕及び須恵器の高杯、杯身などである。また、黒灰色粘土層上面では幅約0.27m、深さ約0.24m暗緑灰色粘土質土を埋土とするピット1基を検出している。

2. 出土遺物

弥生時代終末期から古墳時代中期にかけての遺物が出土しているが、5世紀から6世紀に比定してうる遺物が最も多く出土している。1は高杯の脚柱部で、外面に縦方向のヘラミガキを施している。2は須恵器の無蓋高杯と思われ、脚部は外下方にゆるやかに開いたのち内湾している。中村氏編年のII形式4段階から6段階に比定でき得る。（註2）

3. まとめ

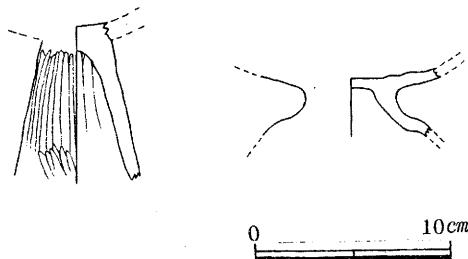
本調査は狭い面積ではあったが2層の遺物包含層を確認できた。特に黒灰色粘土層と黒灰色シルト混粘土層では弥生時代終末期から古墳時代中期にかけての非常に良好な包含層である。

今回の調査は当遺跡で行われた最も西側での調査のひとつと思われ、これまでの調査と併せて成法寺遺跡は東西約1kmにも及ぶ包含層が拡がっていることが確認できた。 (消)

参考文献

(註1) 八尾市教育委員会『成法寺遺跡－八尾市光南1丁目29番地の調査－』1983

(註2) 大阪府教育委員会『陶邑III』 大阪府文化財調査報告 第30輯 1978



第95図 出土遺物実測図 (1/4)

24. 中田遺跡（91-409）の調査

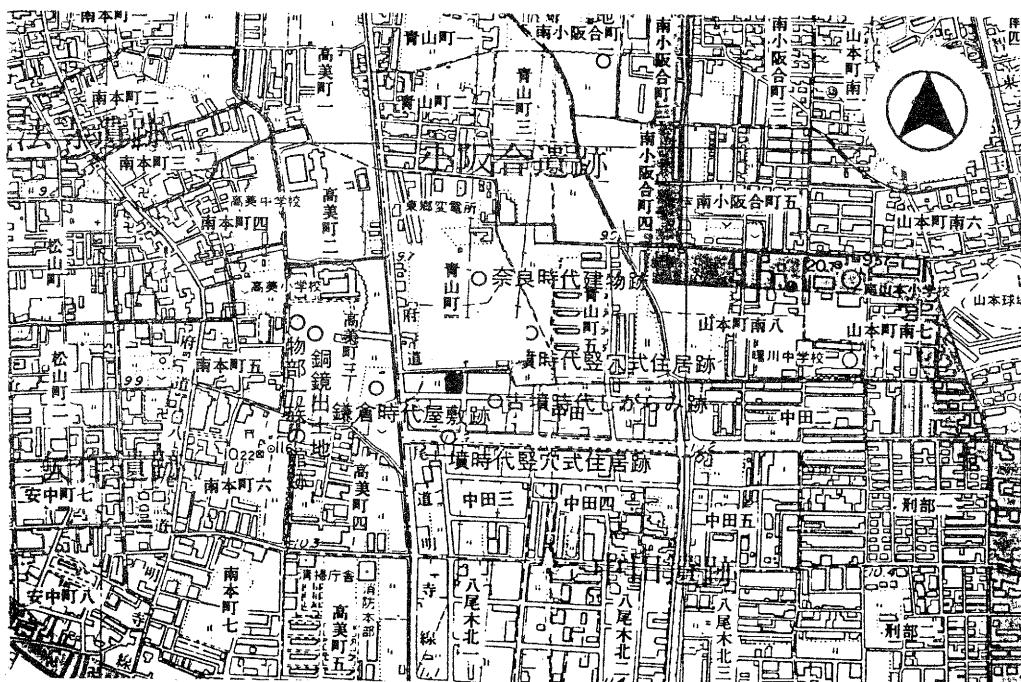
調査地 中田1丁目3番地

調査期間 平成3年11月15日

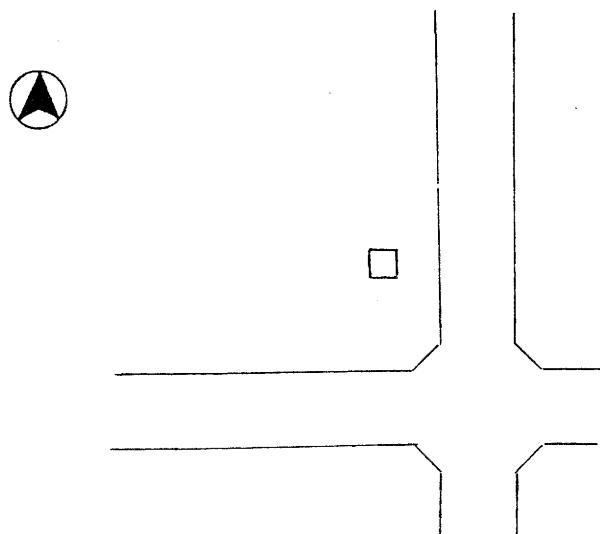
1. 調査概要

本調査は共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の南東よりに3m四方の調査区を設定した。重機と人力を併用して地表下3.0mまで掘削したところ、耕土直下の地表下1.2m～1.3mで近世陶磁を含む灰色粘砂層を確認した。地表下1.4mの赤褐色粘土層上面で深さ0.5mを測る溝ないしは土坑となる遺構を確認した。埋土は上から順に灰茶色粘砂層、褐色粘砂層、灰色粘土層、灰白色粘砂層で、12世紀頃の瓦器、土師器等が含まれていた。この下は地表下1.9mまで灰色粘土、灰白色シルト層等がつづき、さらにこの下は地表下3.0mまで掘削したが、灰白色粗砂層がつづいていた。

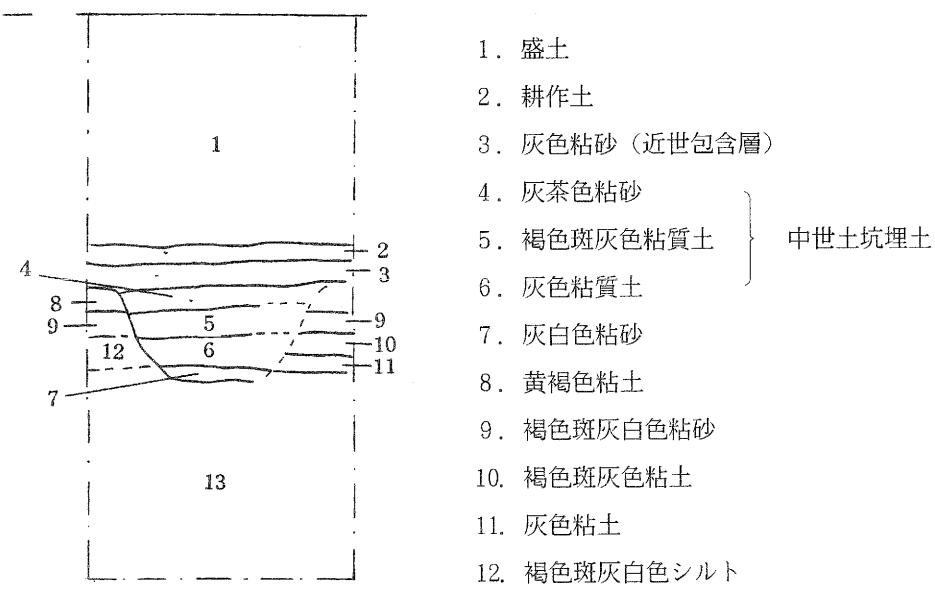
1は土坑状遺構から出土した瓦器碗である。体部から口縁にかけてはやや開きぎみである。体部外面上半は横方向の暗文を施す。体部外面下半はユビオサエを行なう。体部内面上半は横



第96図 調査地周辺図 (1/13000)



第97図 調査区設定図 (1/800)



第98図 基本層序模式図 (1/40)

方向の暗文を、下半は斜格子状の暗文を施す。高台は台形でやや外方に張る。12世紀末～13世紀にかけての所産であろう。この他にも土坑内からは土師器、瓦器の小片が出土している。

2. まとめ

本調査地では中世の遺構面を良好な状態で確認することができた。本調査地の周辺では弥生時代～中世にかけての遺構、遺物が豊富に確認されている。本調査では中世以前の包含層は確認することができなかった。下層確認の結果から自然河川の流路となっていたものと思われる。

(吉田)



第99図 出土遺物実測図(1/4)

25. 恩智遺跡（91-335）の調査

調査地 恩智北町2丁目169、170、172、173 の一部

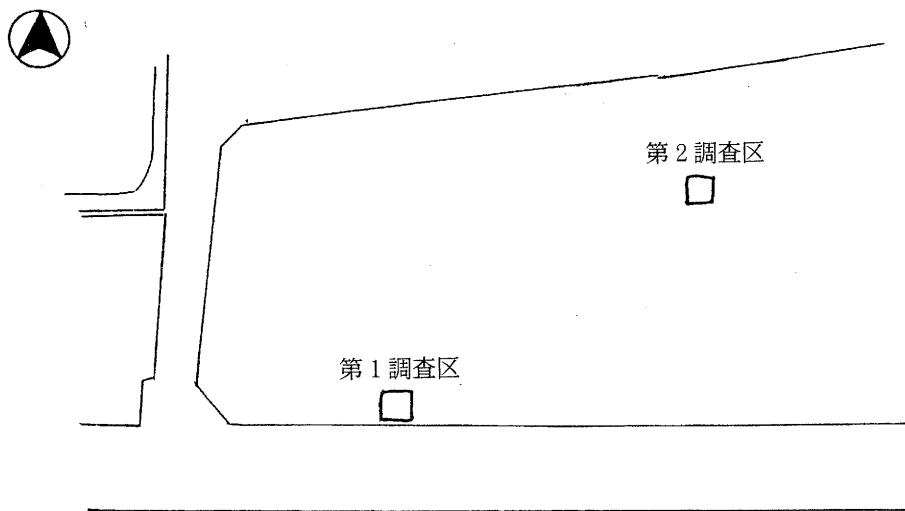
調査期間 平成3年11月29日

1. 調査概要

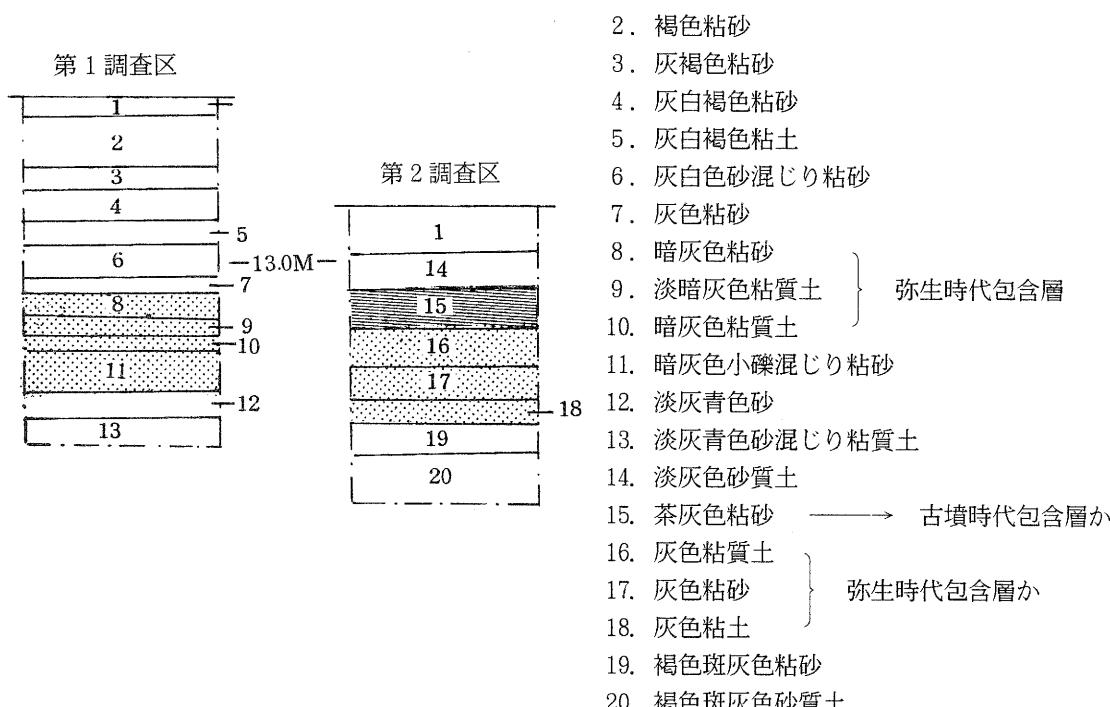
本調査は共同住宅建設に伴う遺構確認調査である。施工予定地の西と東に2、5 m四方の調査区をそれぞれ設定した。西調査区では重機と人力を併用して地表下約1、9 mまで掘削したところ、地表下1、0 m～1、6 m（TP 12、3～12、9m）で弥生時代の土器と石器を密に含む土層を確認した。この包含層は4層にわかれ、上から順に、暗灰色粘質土層、淡暗灰色粘質土層、暗灰色炭混粘質土層、暗灰色小礫混粘質土層となる。特に上の3層が密な包含層である。暗灰色炭混粘質土層の上面では石器の剥片が散在するような状態であり、この面が生活面となる可能性がある。この下の淡青灰色砂層、灰青色砂混粘質土層は遺物の量が少なかった。東調査区は現況の地表面が西調査地より0、6 m低い状況であった。ここでは地表下1、6 mまで掘削を行なったところ、地表下0、4 m～1、3 m（TP 12、0～12、8m）で弥生土器と石器を含む土層を確認した。この包含層は5層に分かれ、上から順に茶灰色粘砂層、灰色粘質土層、灰色粘砂層、灰色



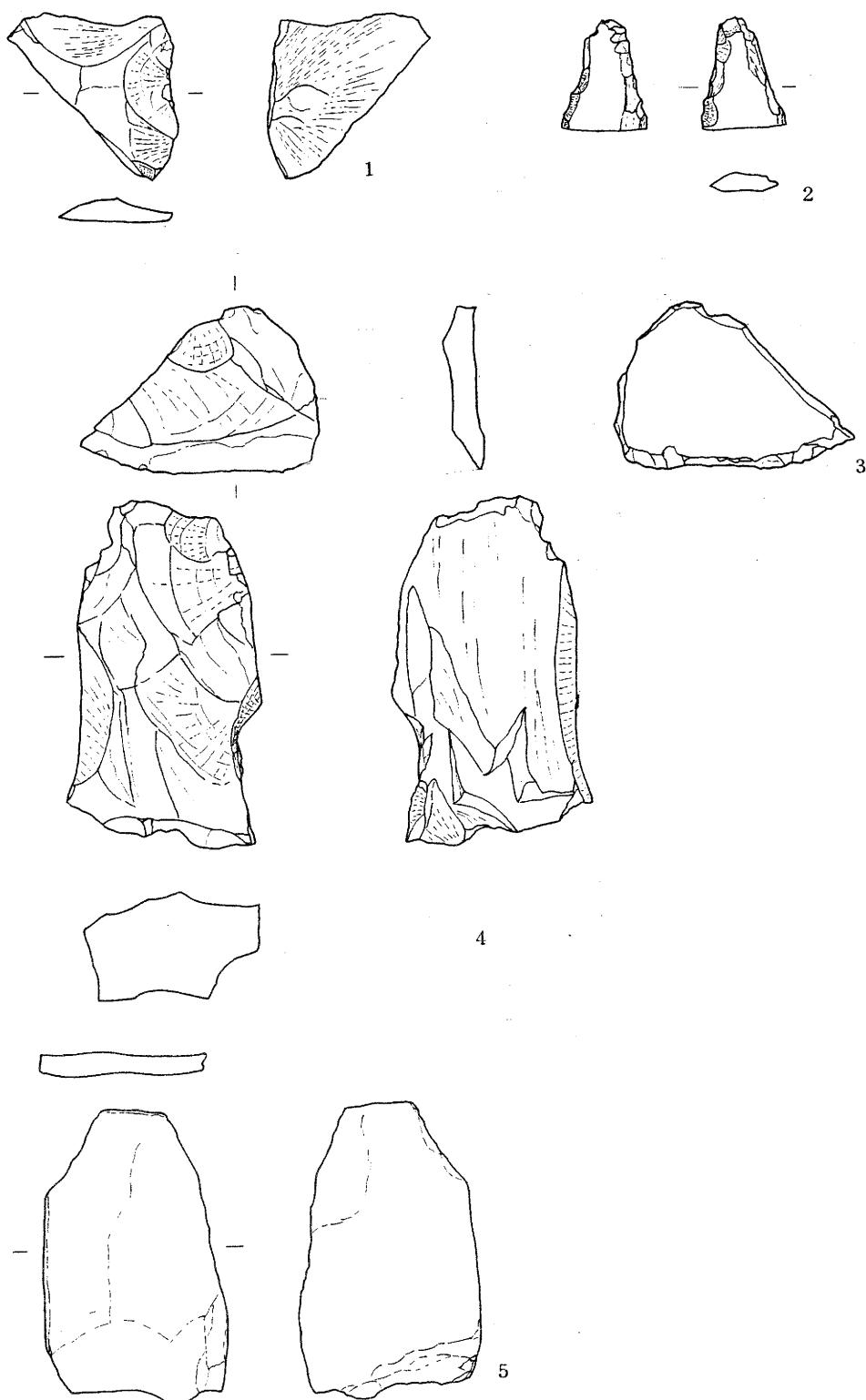
第100図 調査地周辺図 (1/13000)



第101図 調査区設定図 (1/600)



第102図 基本層序模式図 (1/40)



第103図 出土遺物実測図（石器1／2）

粘土層、褐色斑灰色粘砂層となる。出土遺物は弥生土器が中心だが、1層目の茶灰色粘砂層に布留式土器が若干含まれていた。このことから1層目は古墳時代を下限とする土器を包含する土層と捉えられる。第2層目の灰色粘質土上面で最大径0.7m前後、深さ0.1m前後を測る土坑を検出した。弥生土器の底部が正位で遺存していた。5層目の褐色斑灰色粘砂層では土器小片を確認したのみであり、この下の褐色斑灰色砂質土では遺物は確認できなかった。

1～4は第1調査区の暗灰色粘質土層、淡淡灰色粘質土層から出土した石器剥片、及び未製品である。2は石鏃の、3はスクレイパーの未製品かと思われる。5は第2調査区の灰色粘土層から出土した石包丁の未製品かとも思われるものである。図版25左は第2調査区の灰色粘砂層から出土した弥生土器の底部で、輪台状の高台をもつ。図版25右は、第2調査区土坑内より出土したの弥生土器の壺の底部で、外面に黒斑がある。

2.まとめ

当調査地周辺では東側の天王の杜付近を中心に縄文時代～弥生時代の遺物がかなり高い密度で確認されている。本調査はそれと一連のものと思われる遺構・包含層を確認できた点で重要である。
(吉田)



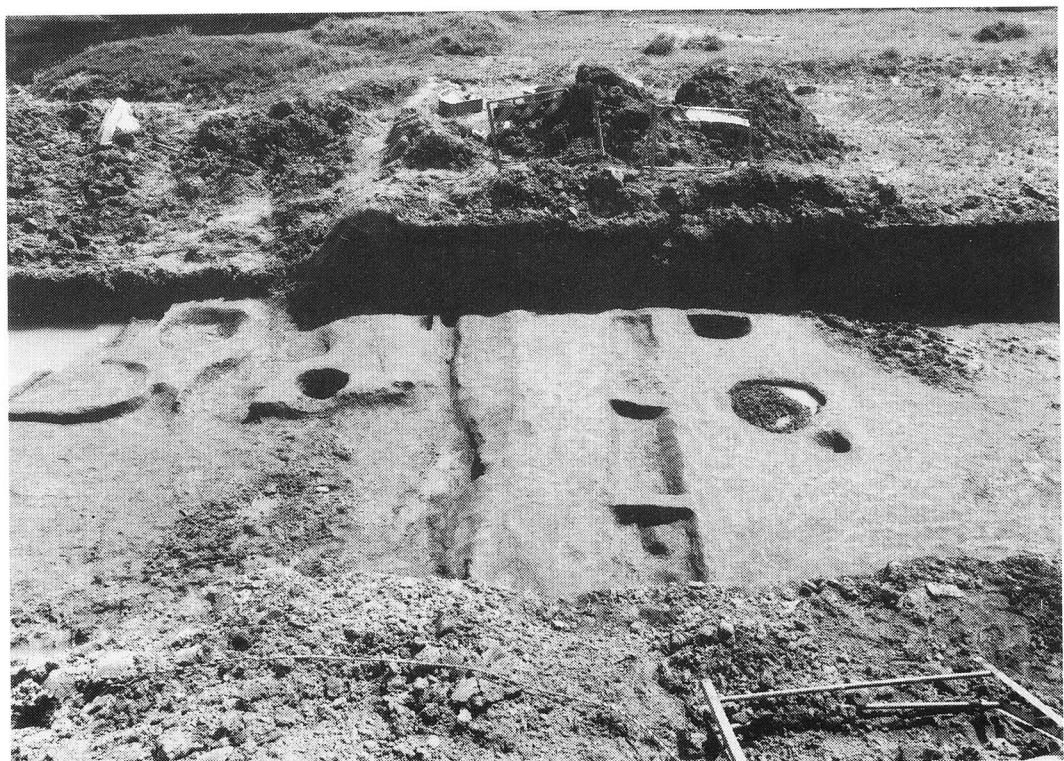
S F - 0 1



西壁断面 S K - 0 1



調査区全景（東から）



調査区中央（北から）



S E 0 1



S D 0 4 (北から)



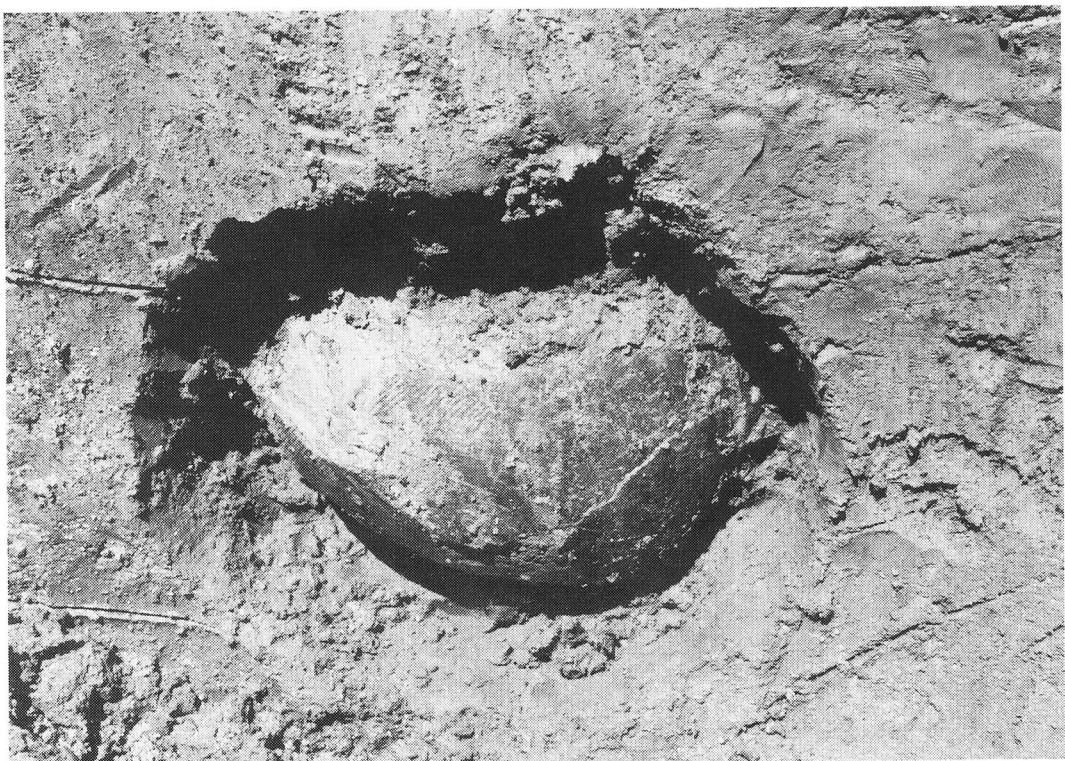
第5調査区



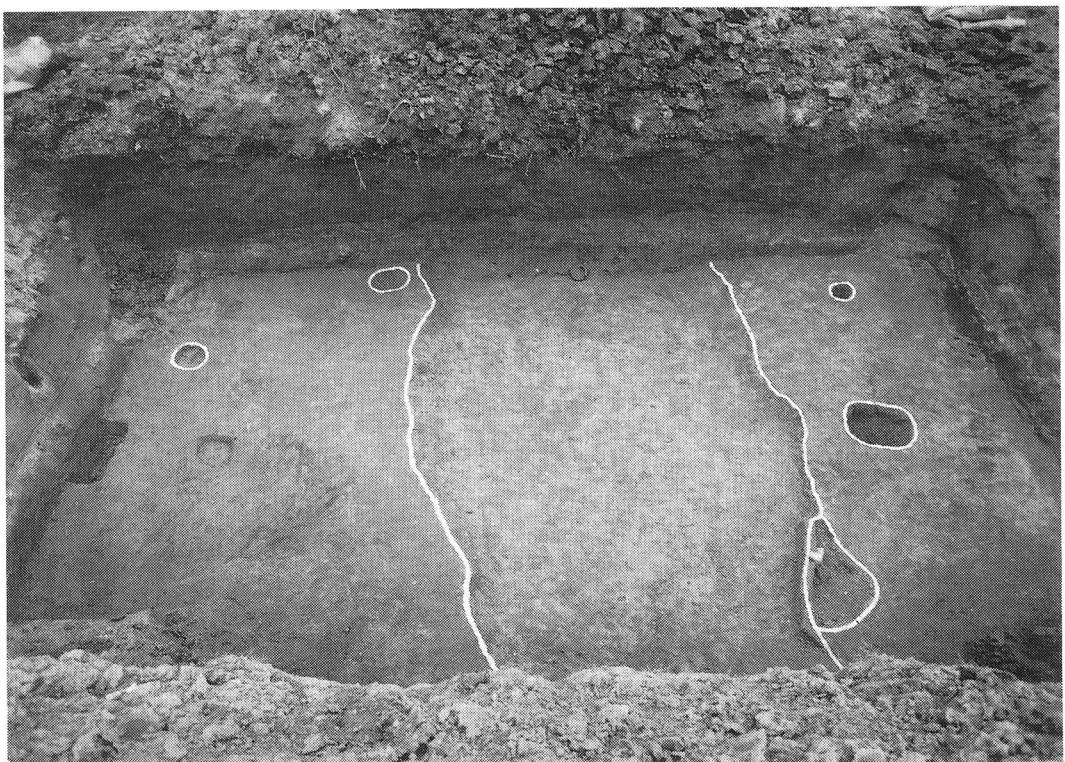
遺構検出状況



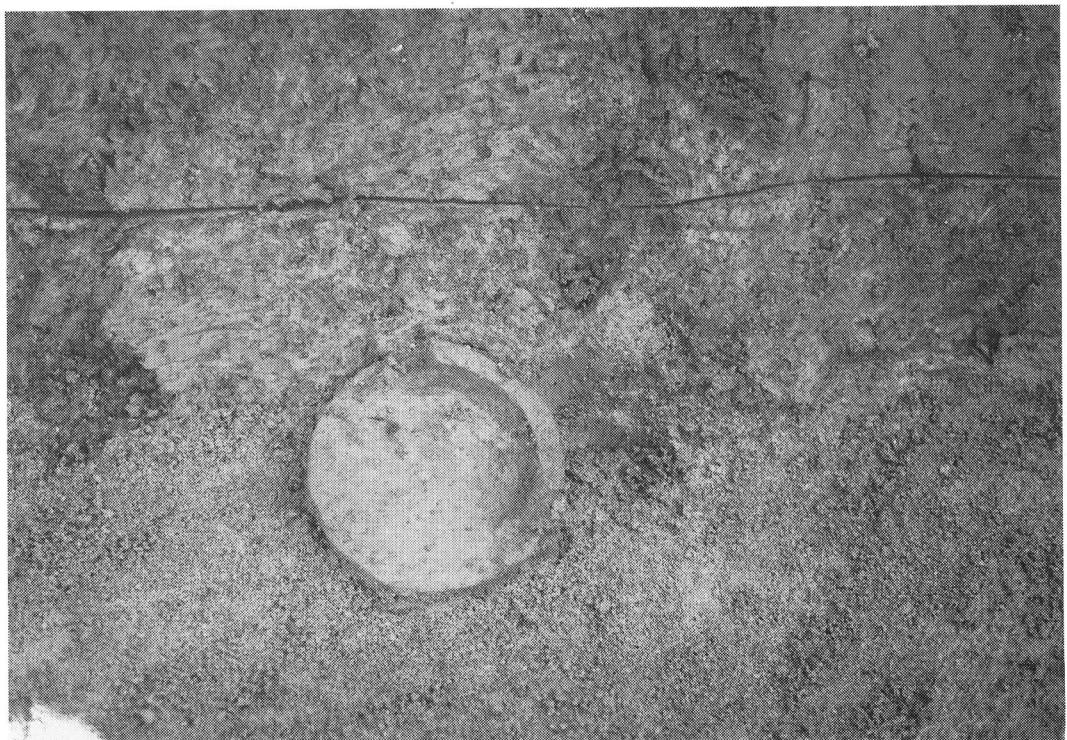
第1調査区北壁



第1調査区北壁 SK 0 1



調査区全景（北から）



軒丸瓦出土状況



上方テラス



下方テラス



調査区全景



第1調査区（南から）

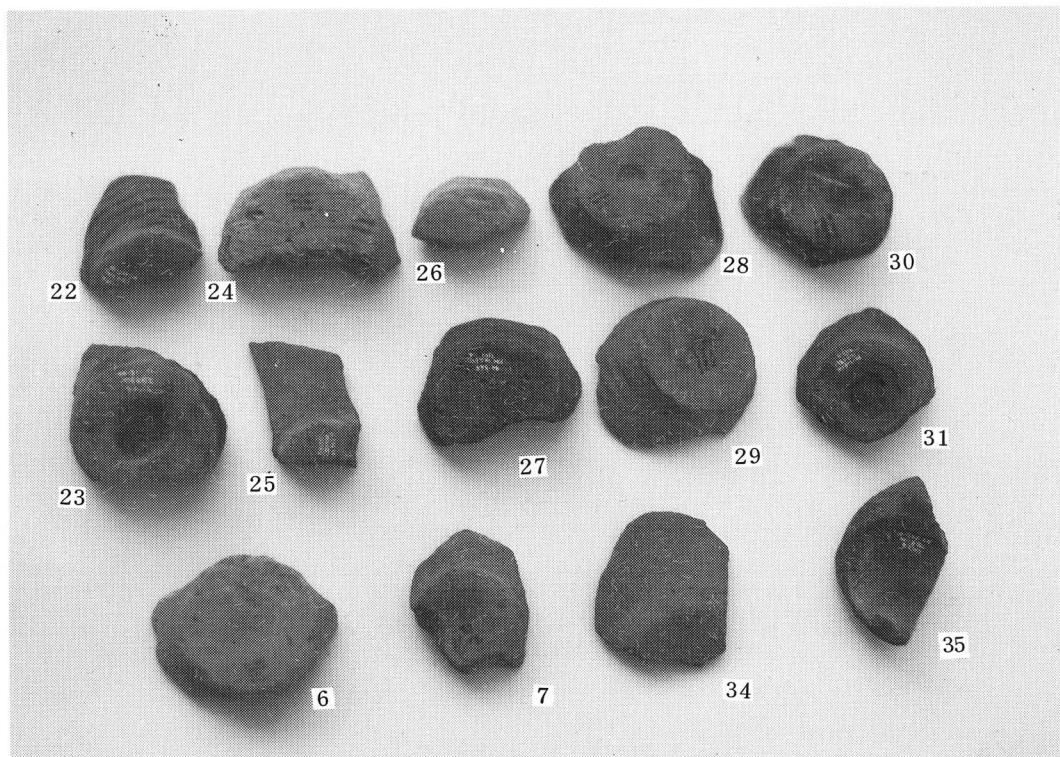
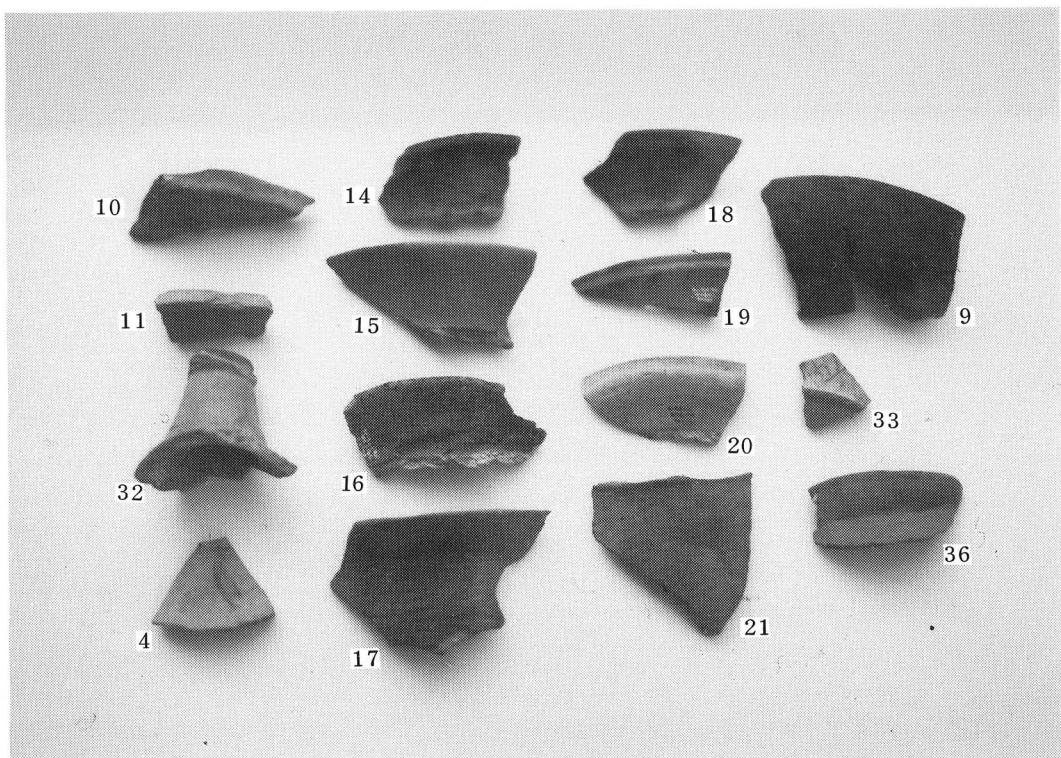
図版九 太田遺跡（91—185）、志紀遺跡（91—319）



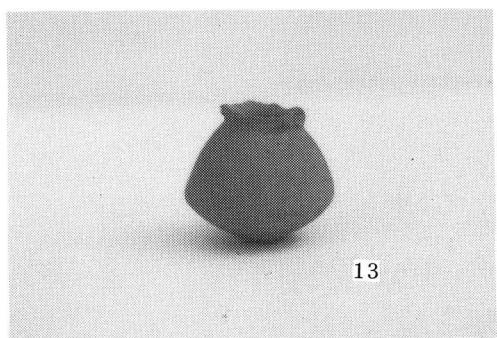
第1調査区 梵字瓦出土状況



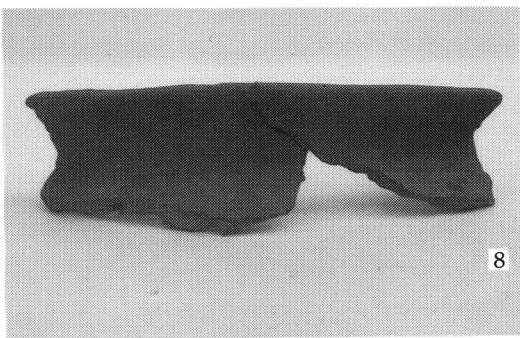
第2調査区 車壁



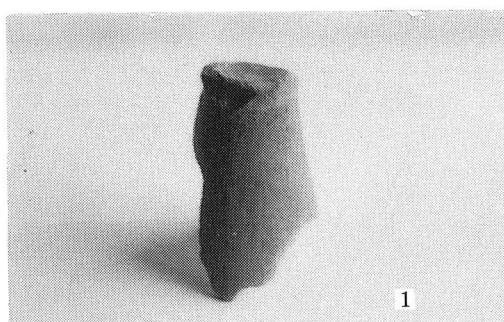
図版十一 久宝寺遺跡（90—566）



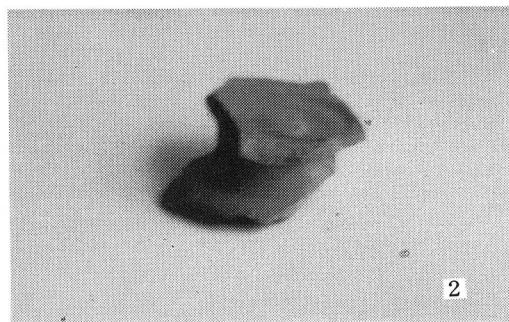
13



8

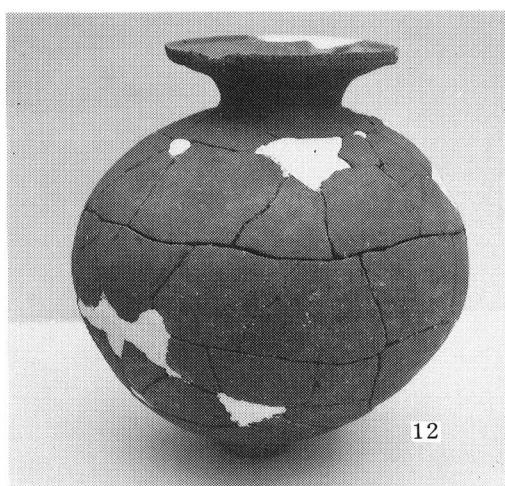


1



2

成法寺遺跡（91—392）



12



11



13



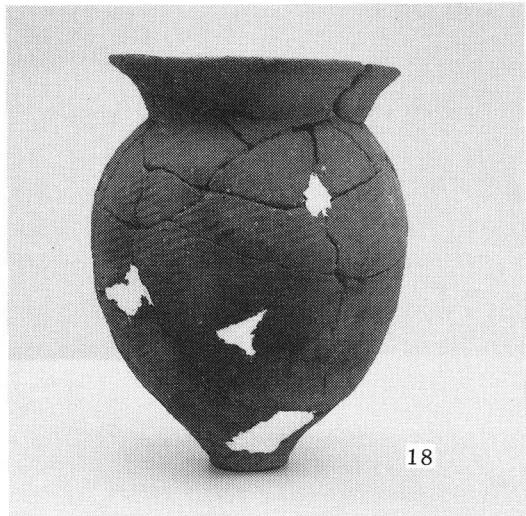
14

弓削遺跡（90—553）

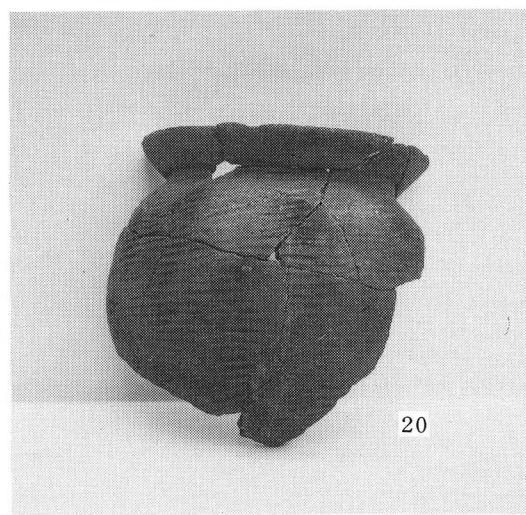
第5調査区出土遺物



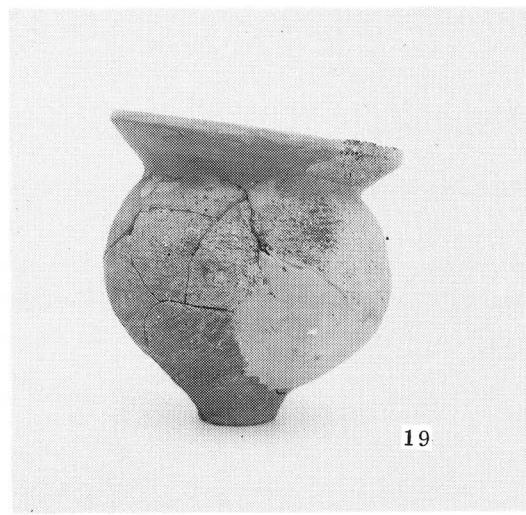
17



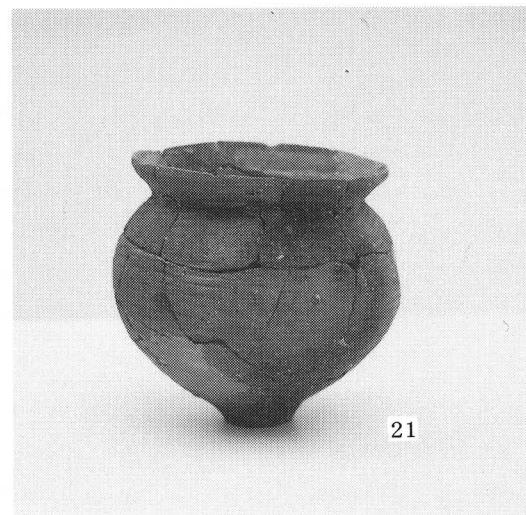
18



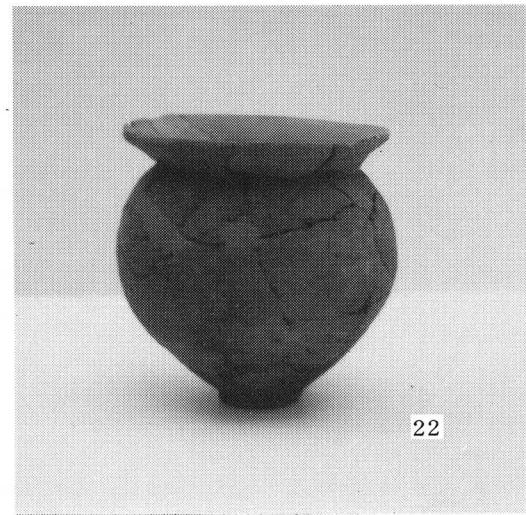
20



19

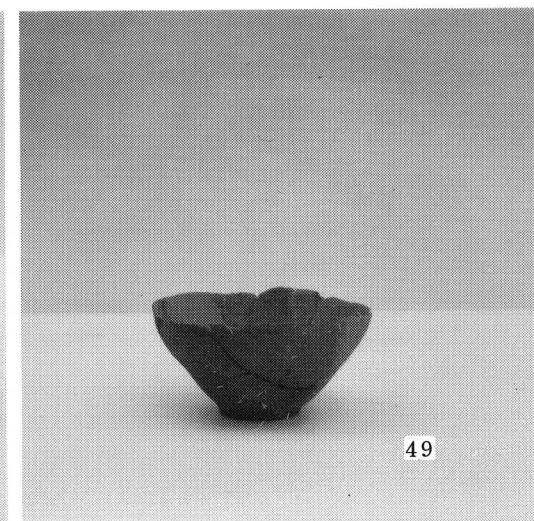
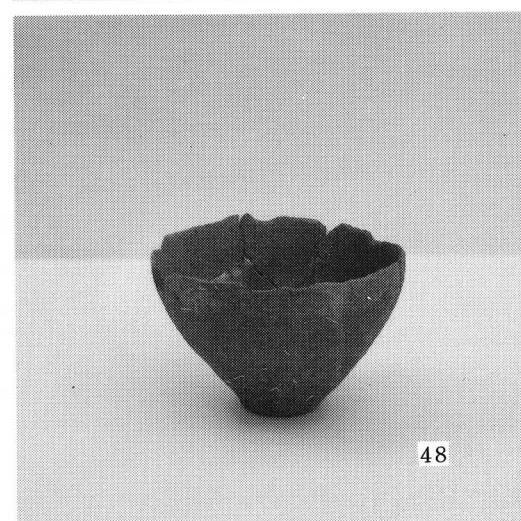
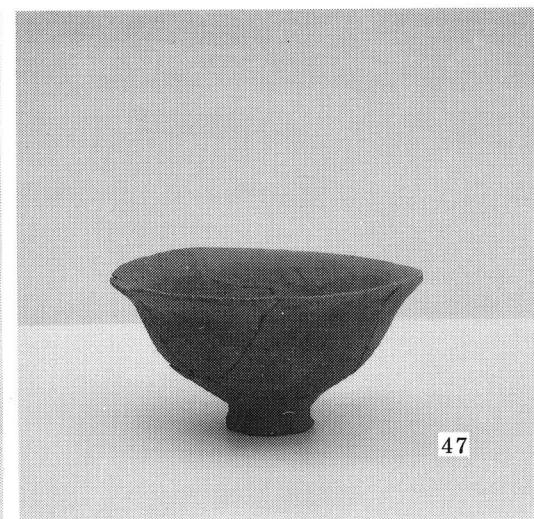
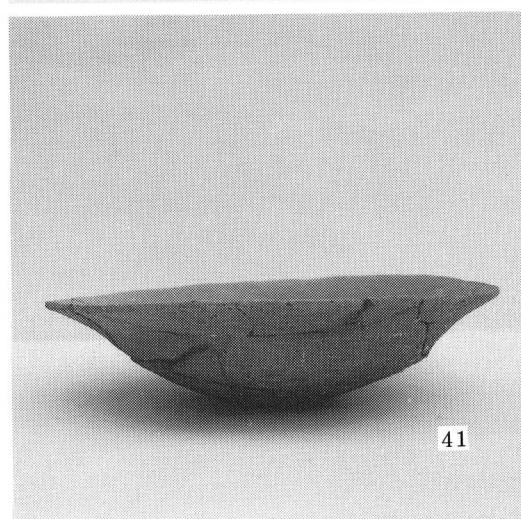
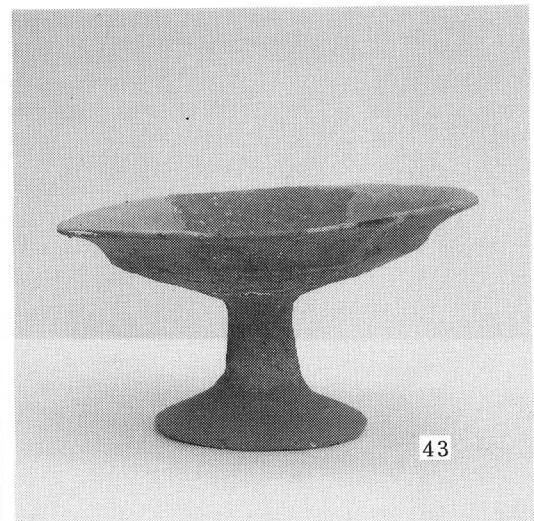
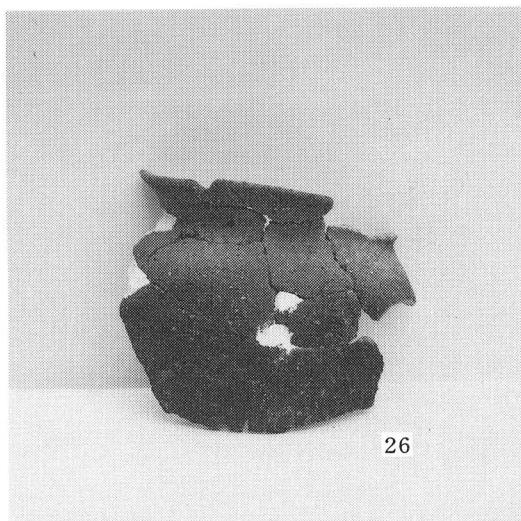


21



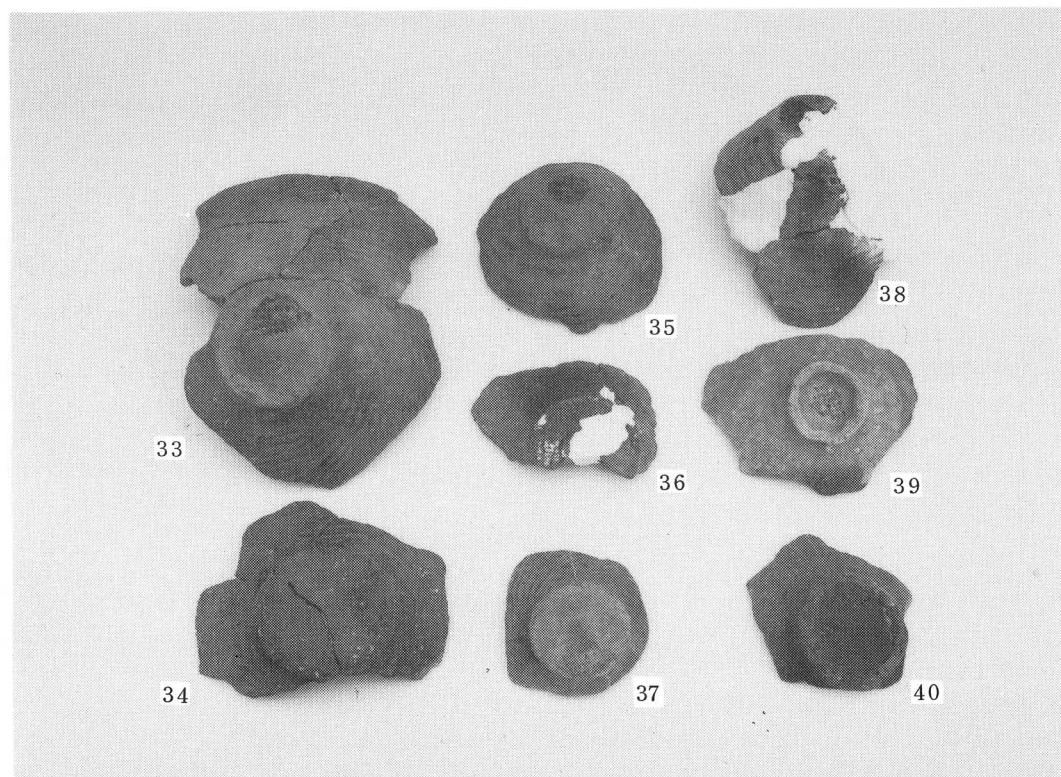
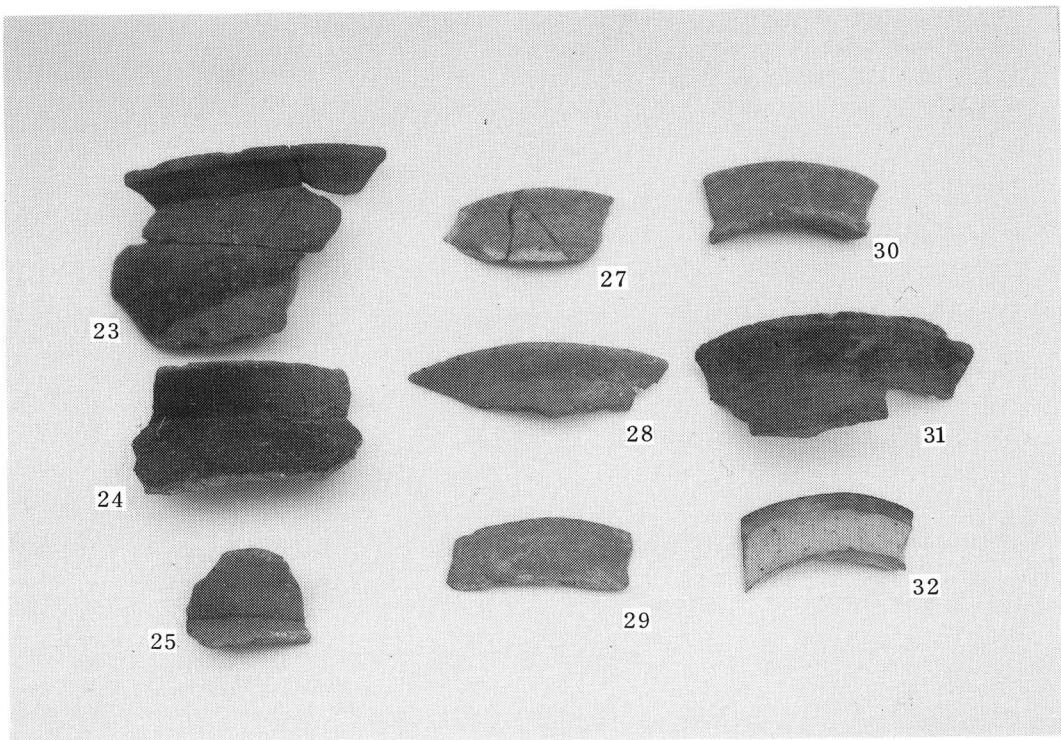
22

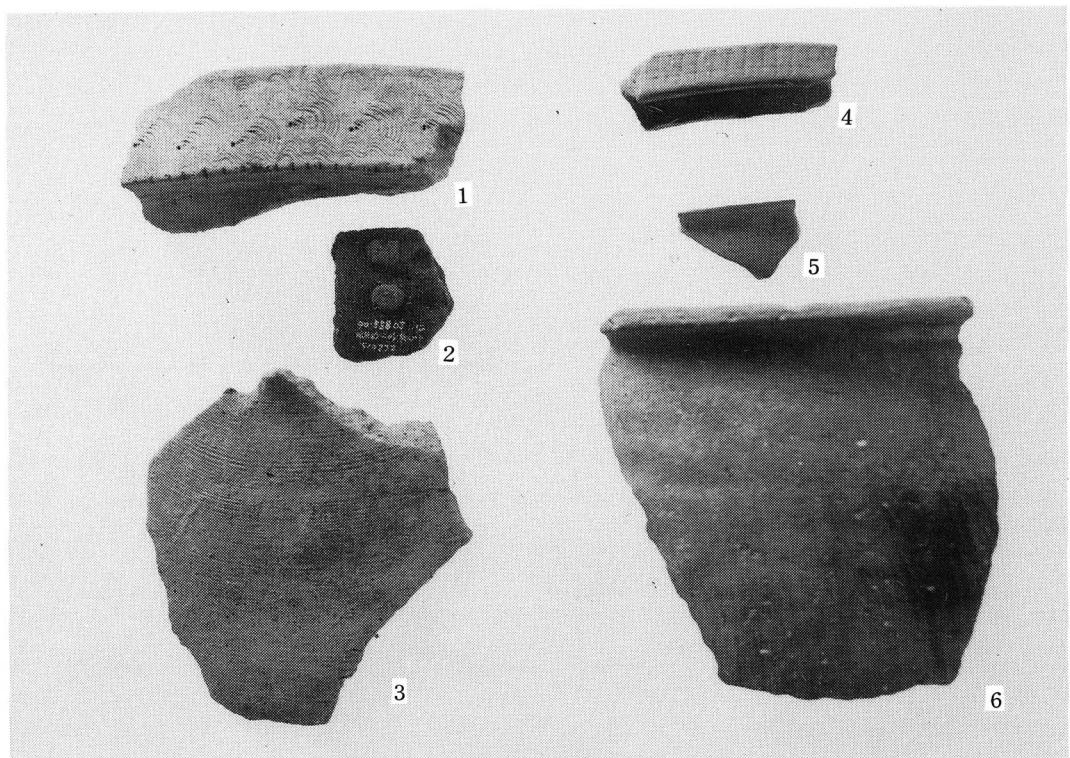
第5調査区出土遺物



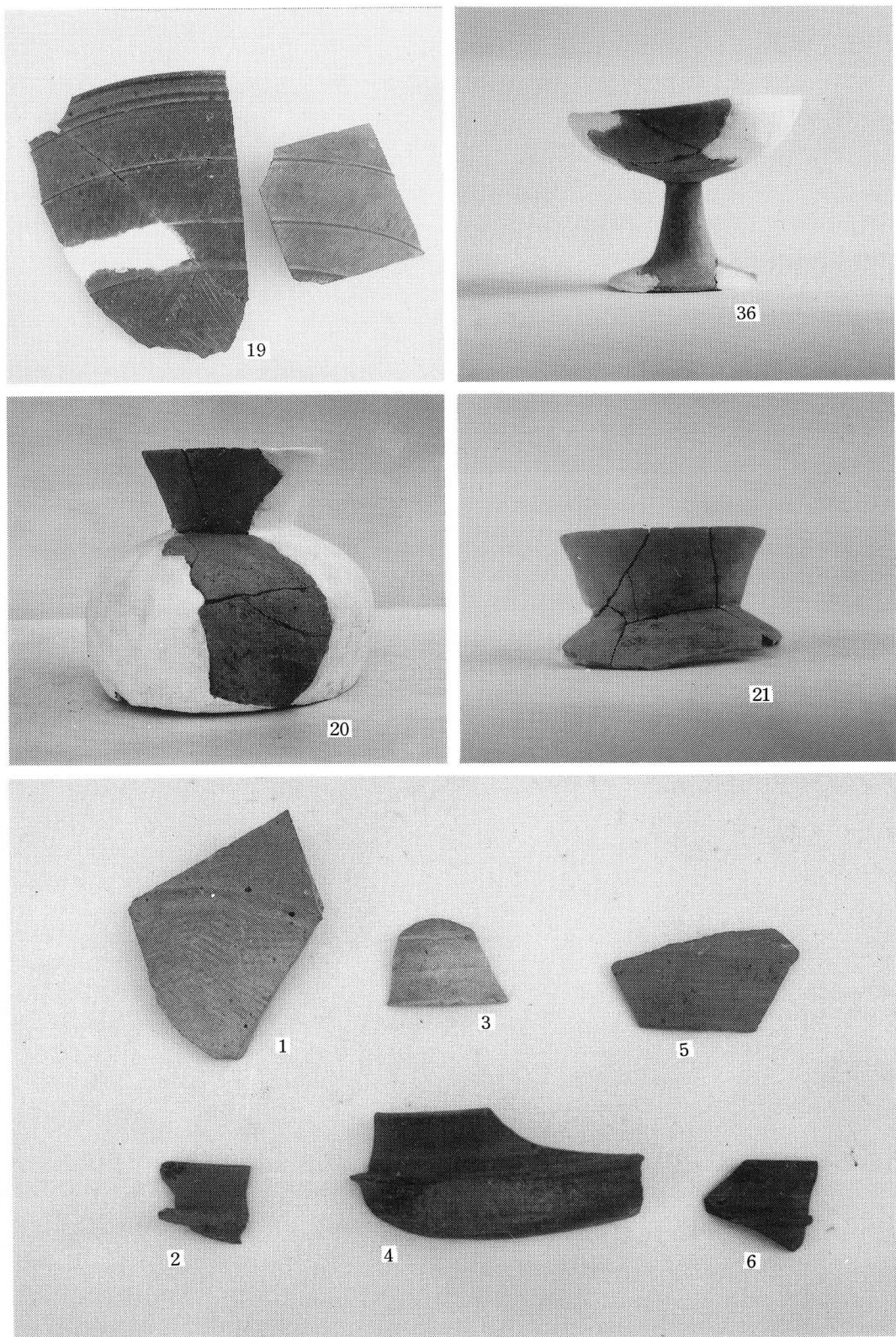
第5調査区出土遺物

圖版十四 三削遺跡 (90—553)

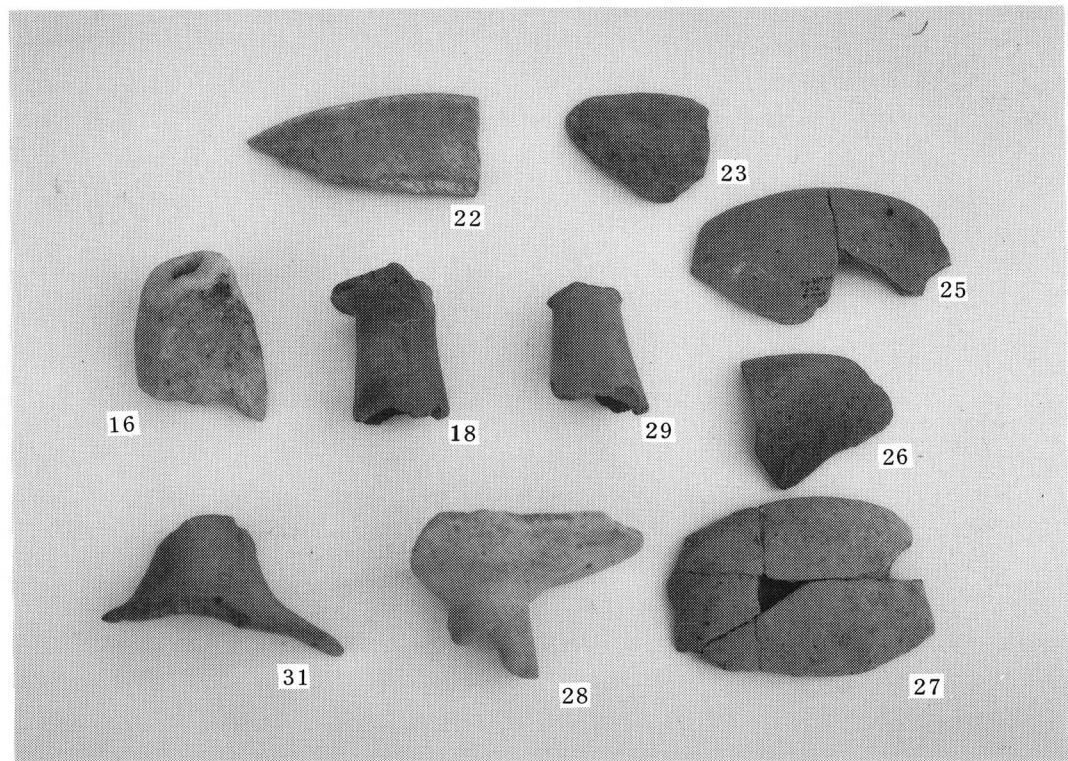
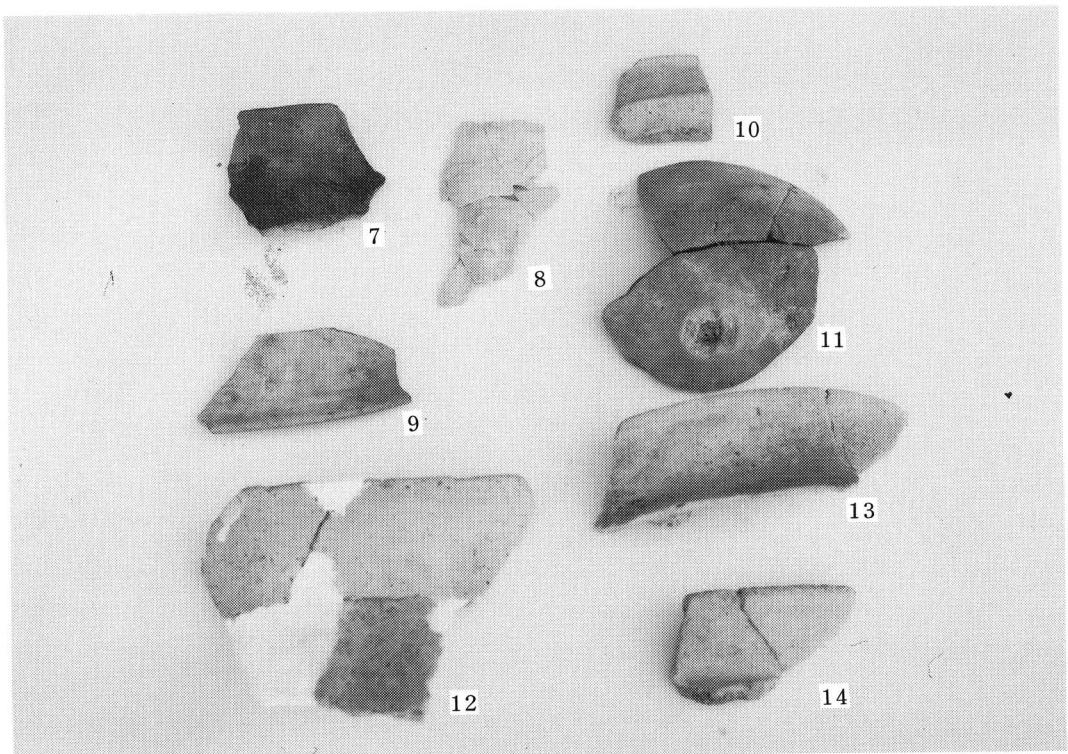




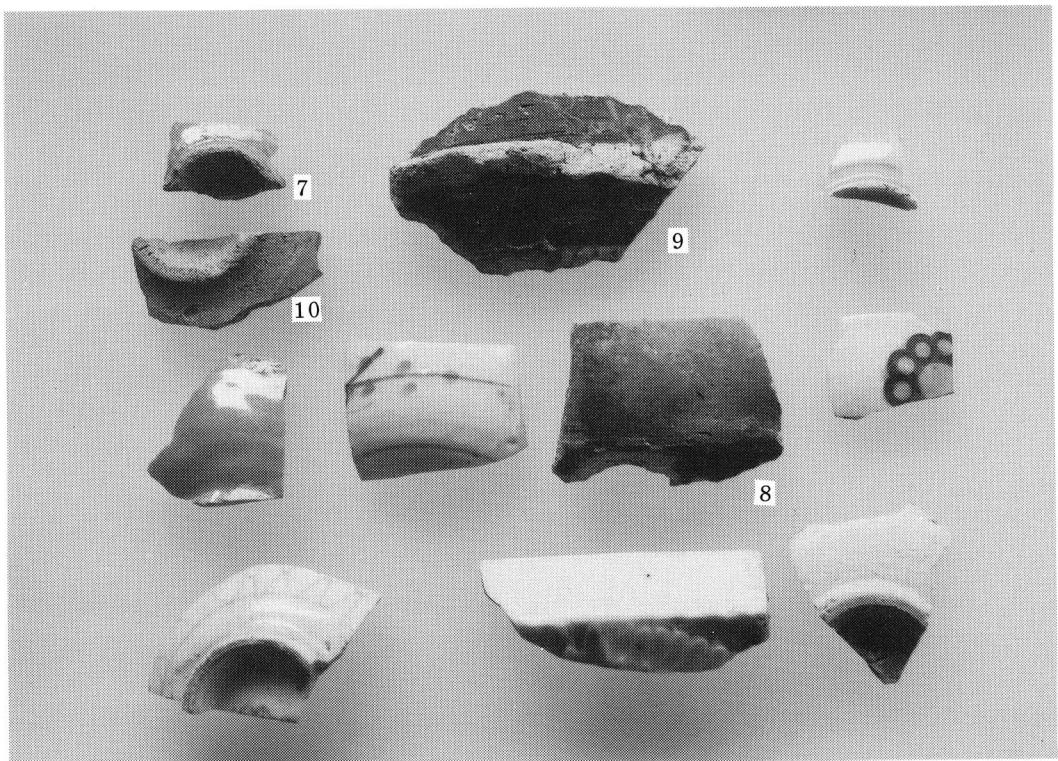
第1 グリット暗灰色砂層出土土器



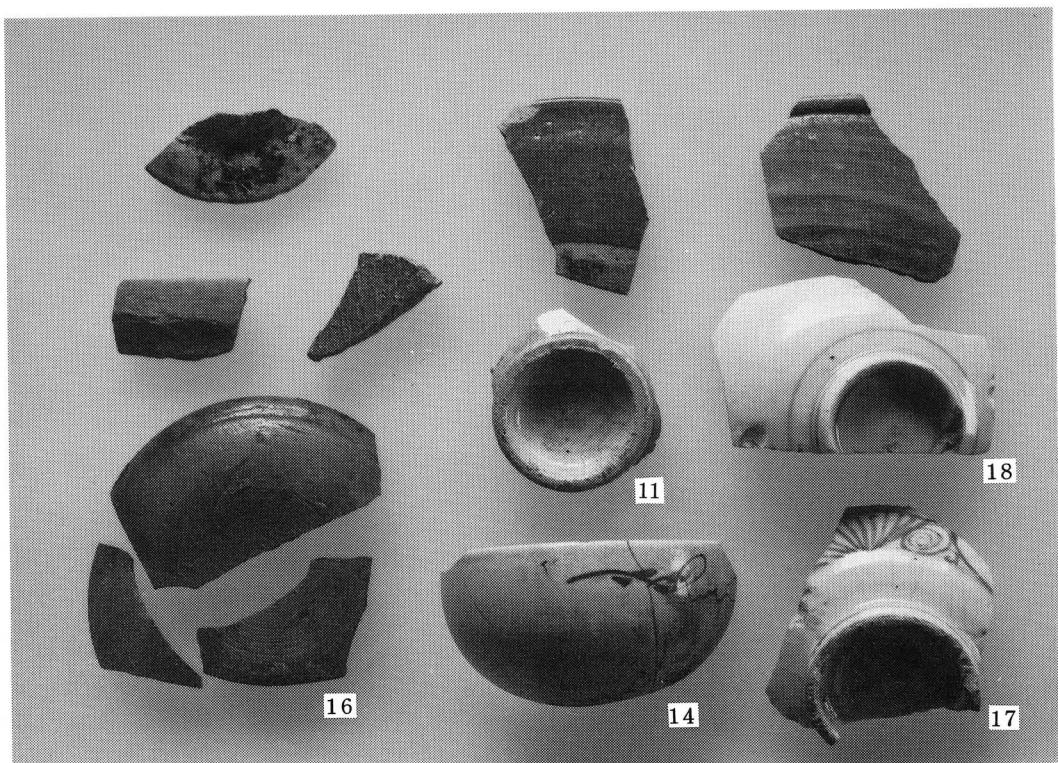
出土遺物



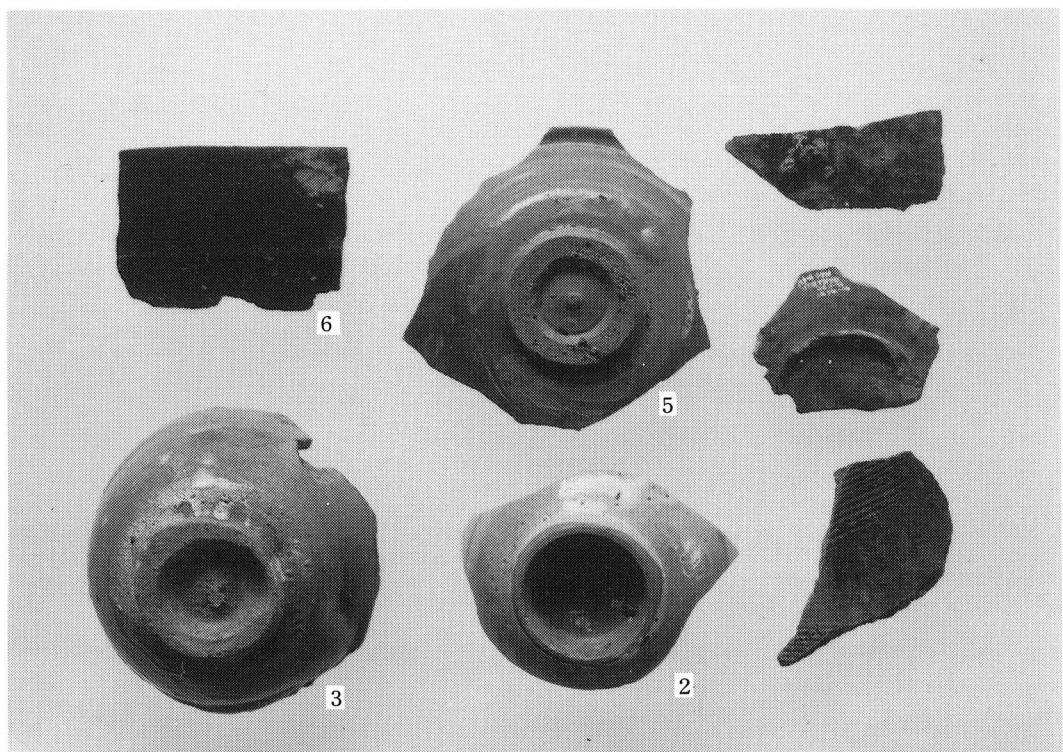
出土遺物



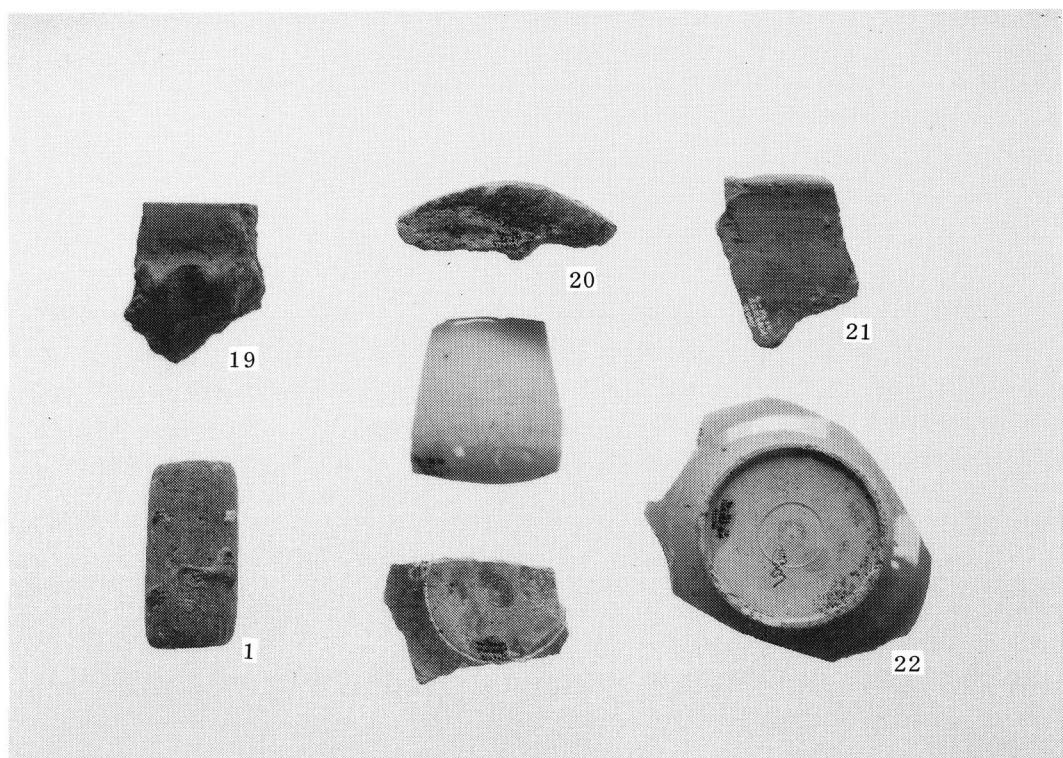
SK 02、SK 04、SK 05、SK 07 出土遺物



SK 08、SK 09、SK 10 出土遺物

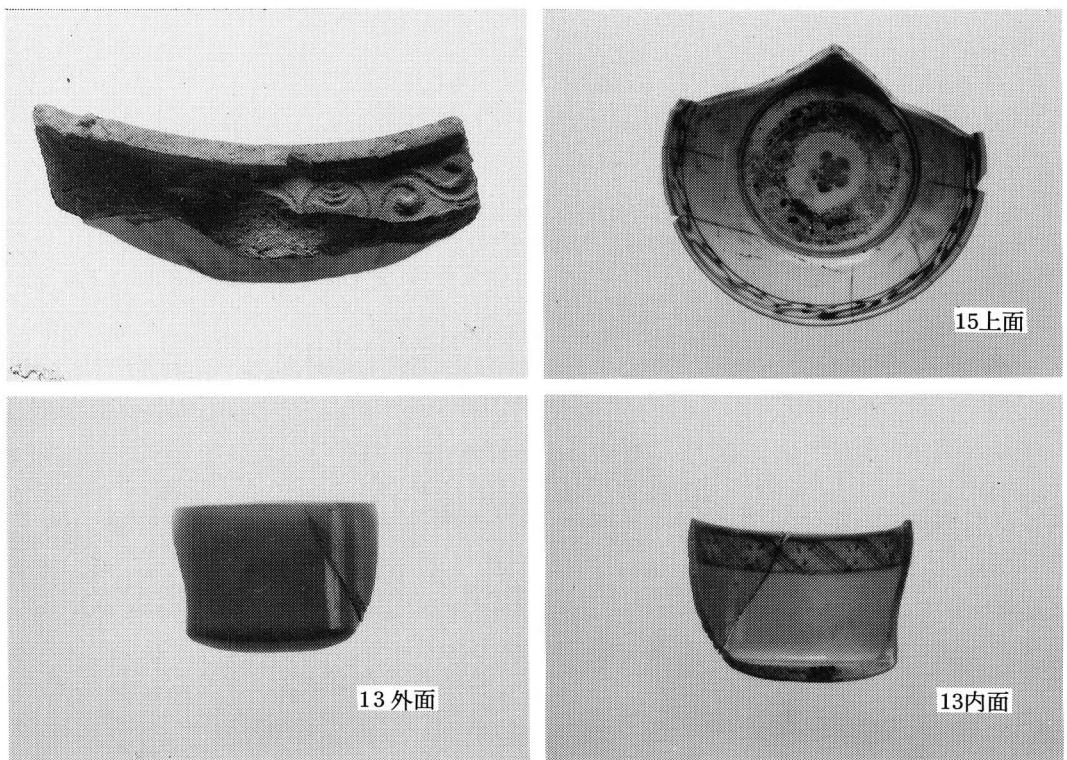


SE 01、SD 04 出土遺物

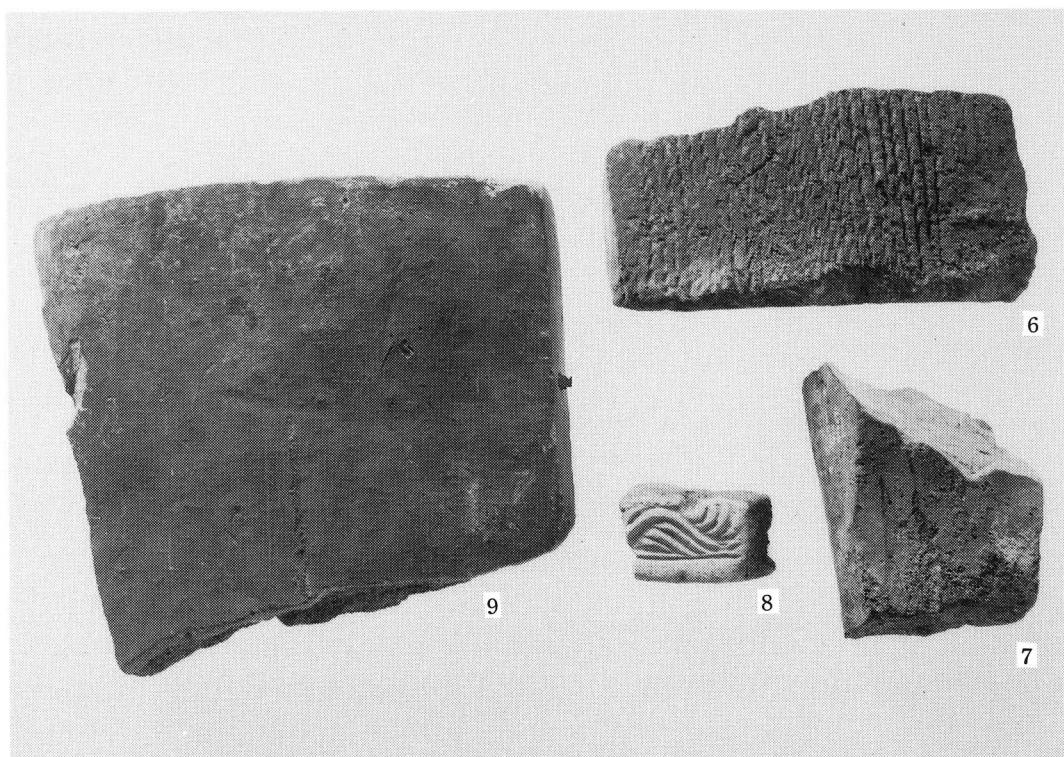


SK 01、SD 02 包含層 出土遺物

圖版二十 成法寺遺跡（90—356）、
宮町遺跡（90—615）

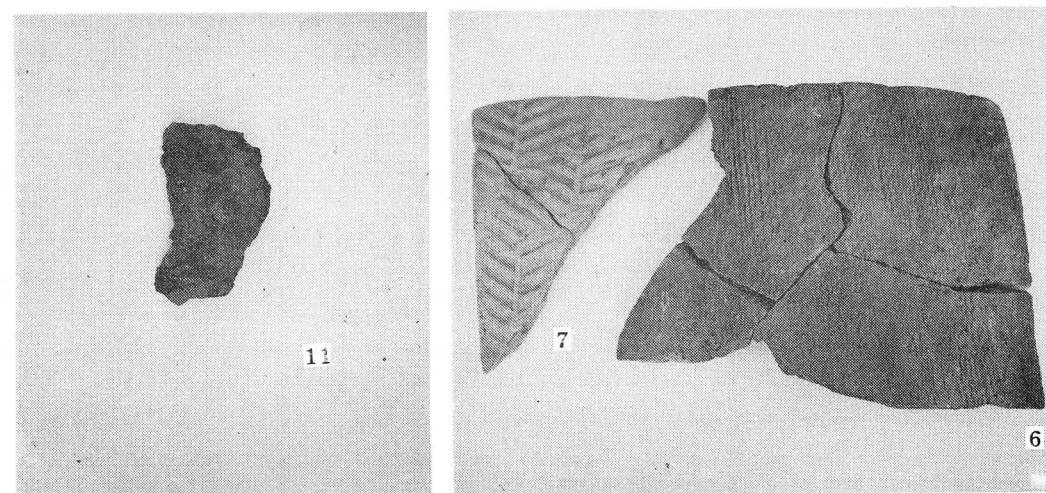
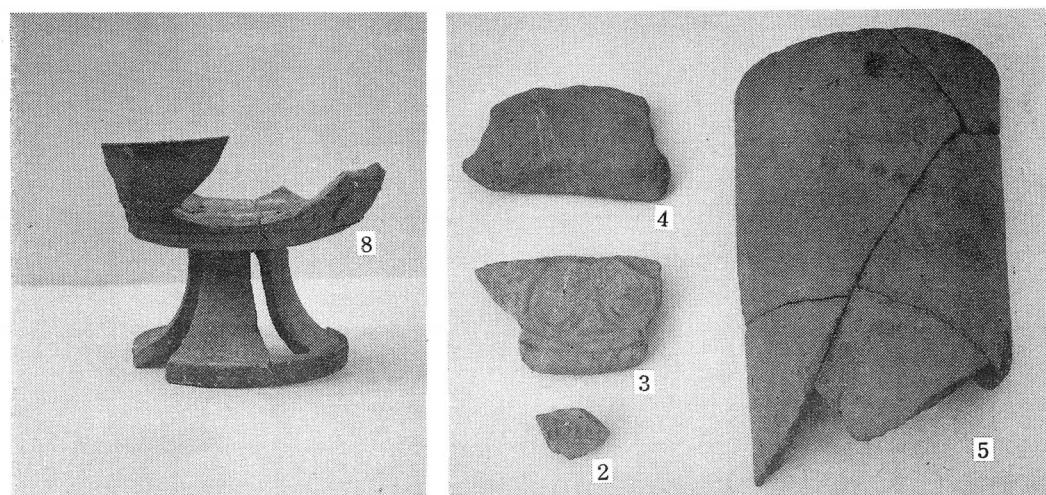
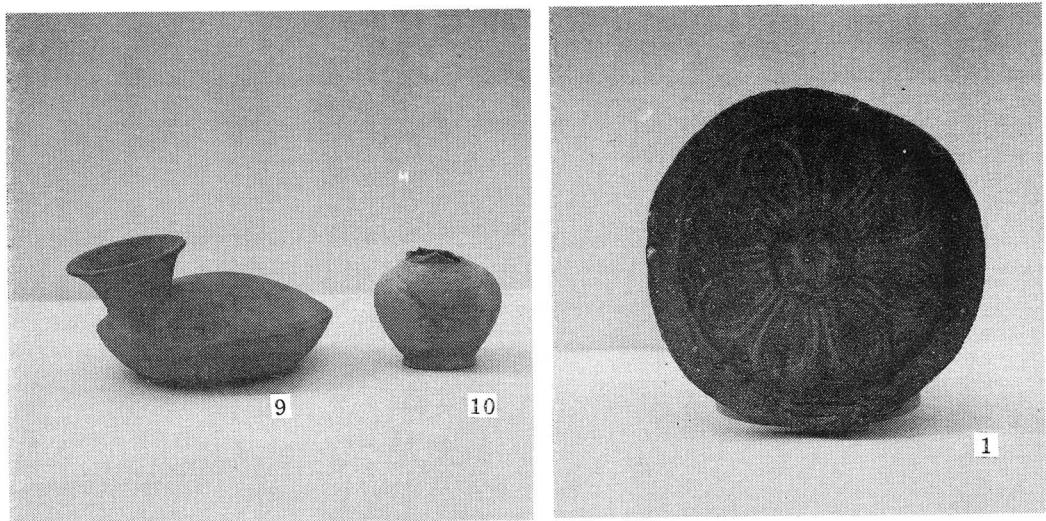


90—356 包含層出土瓦、SK09 出土陶磁

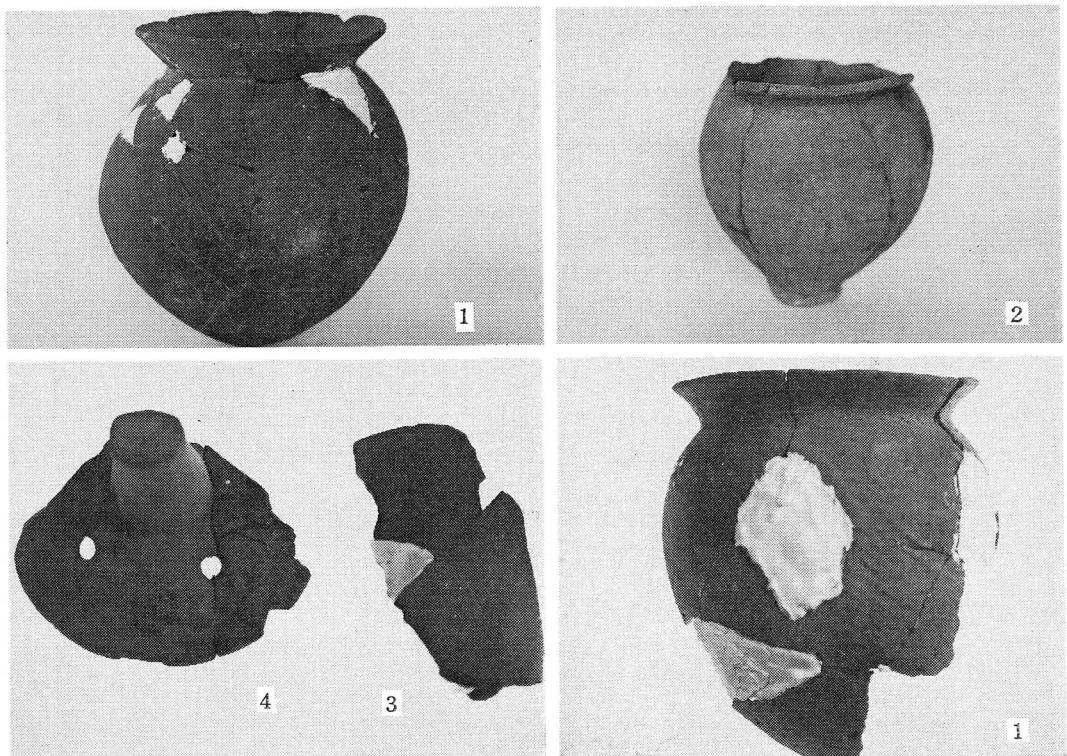


90—615

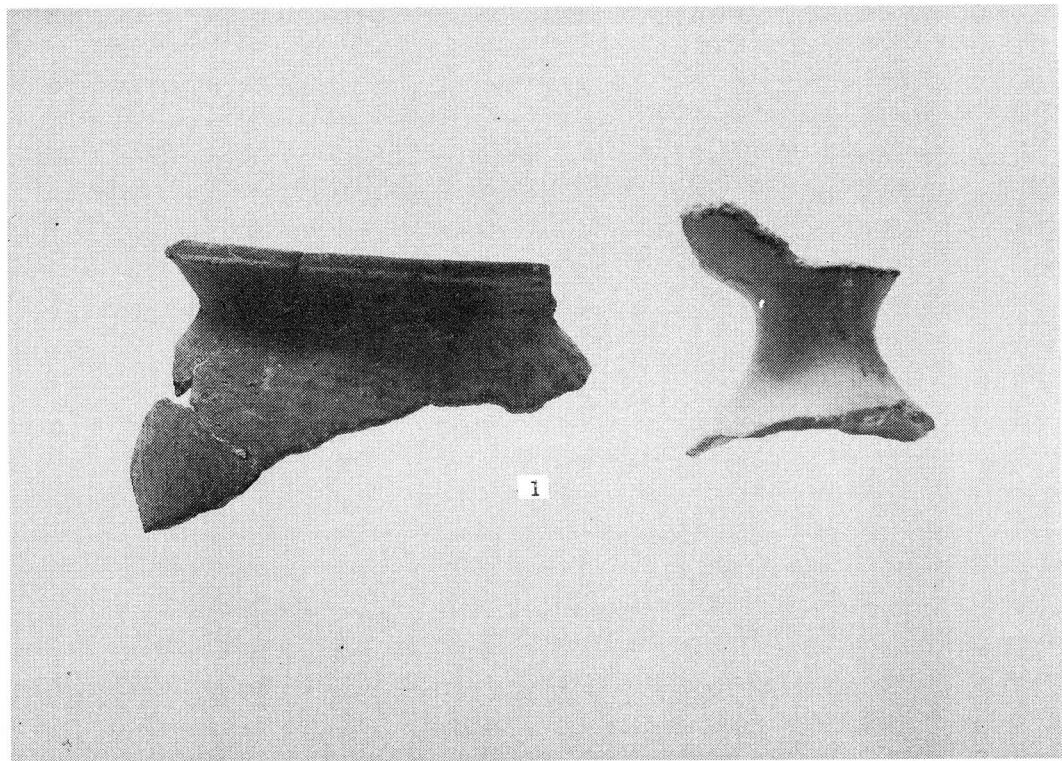
圖版二十一 東鄉廢寺（90—531）



出土遺物

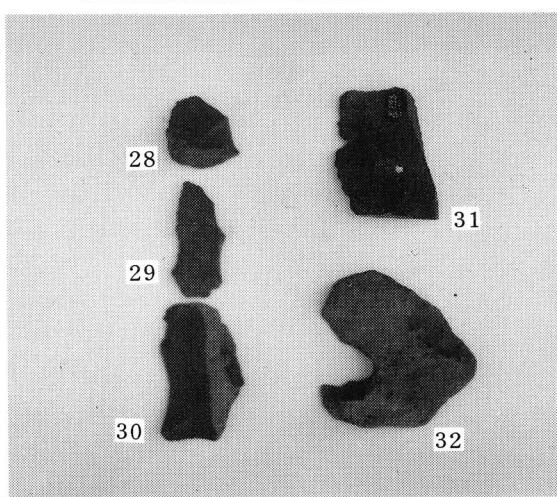
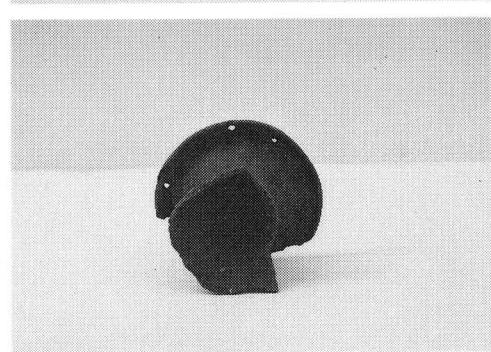
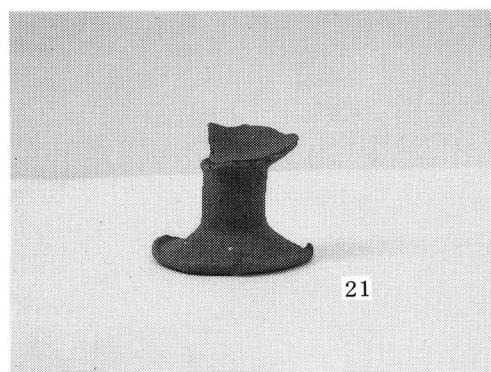
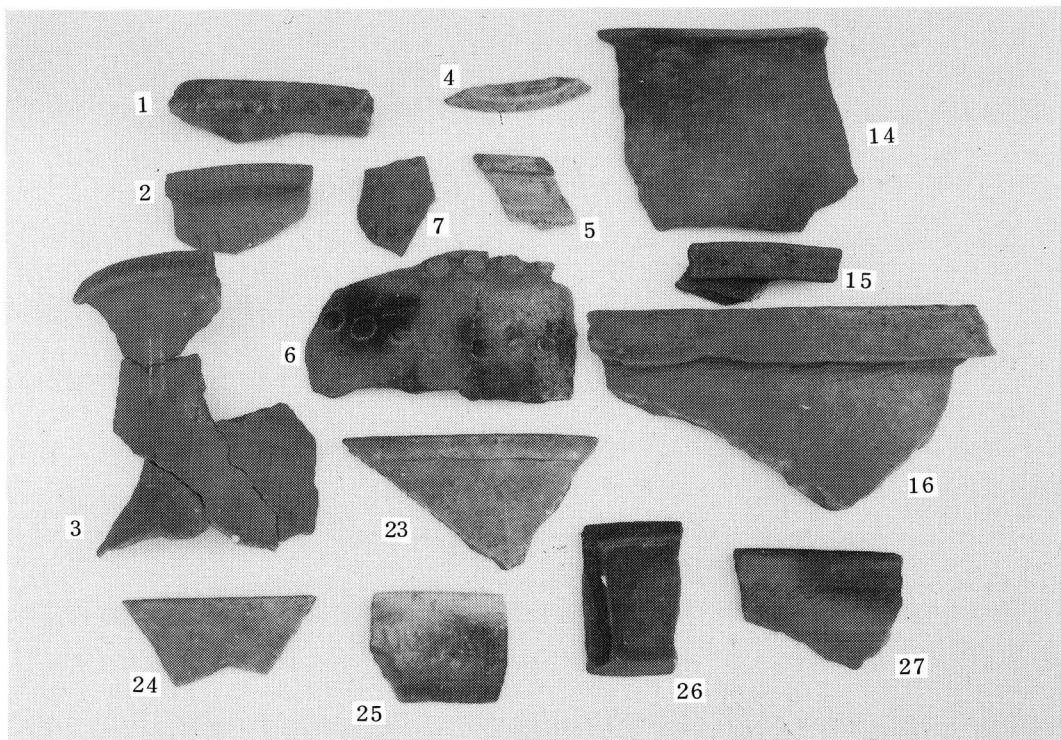


上段 91—08、下段 91—166

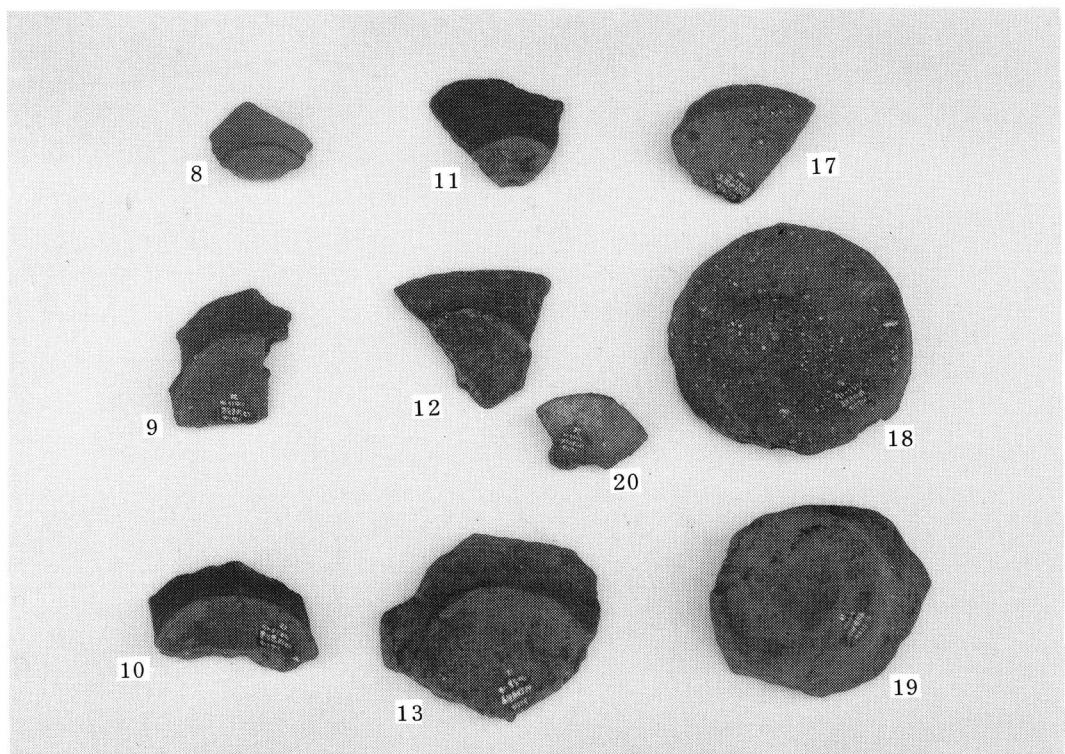


91—166

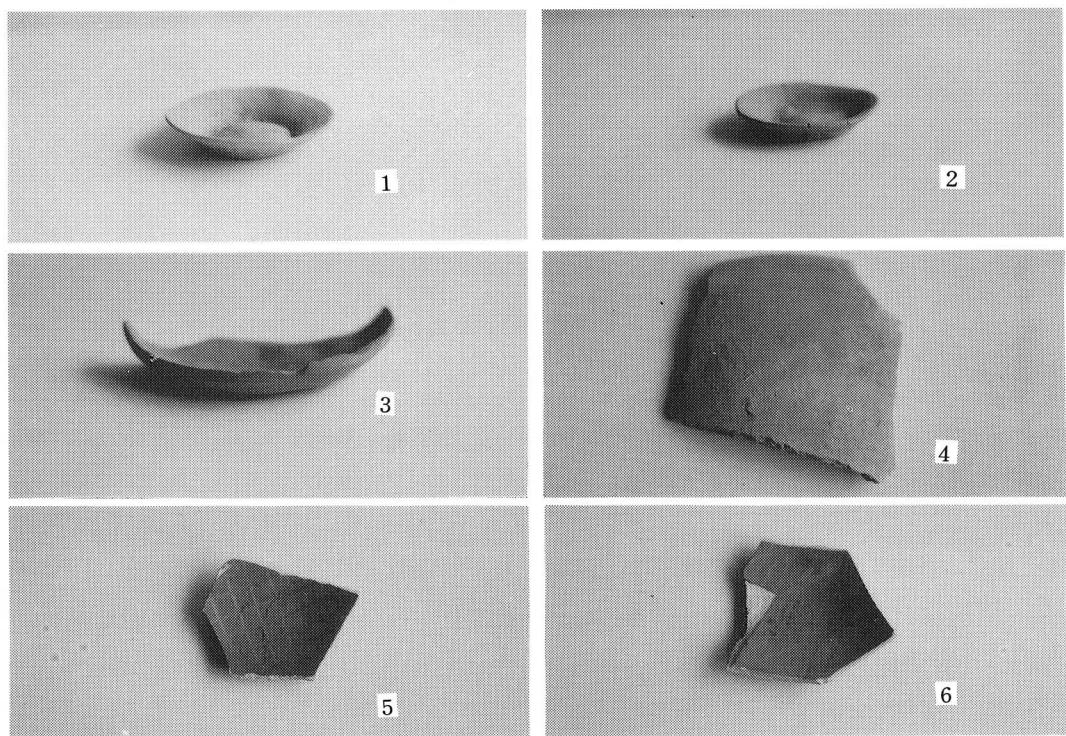
圖版二十三 恩智遺跡(91—055)



出土遺物

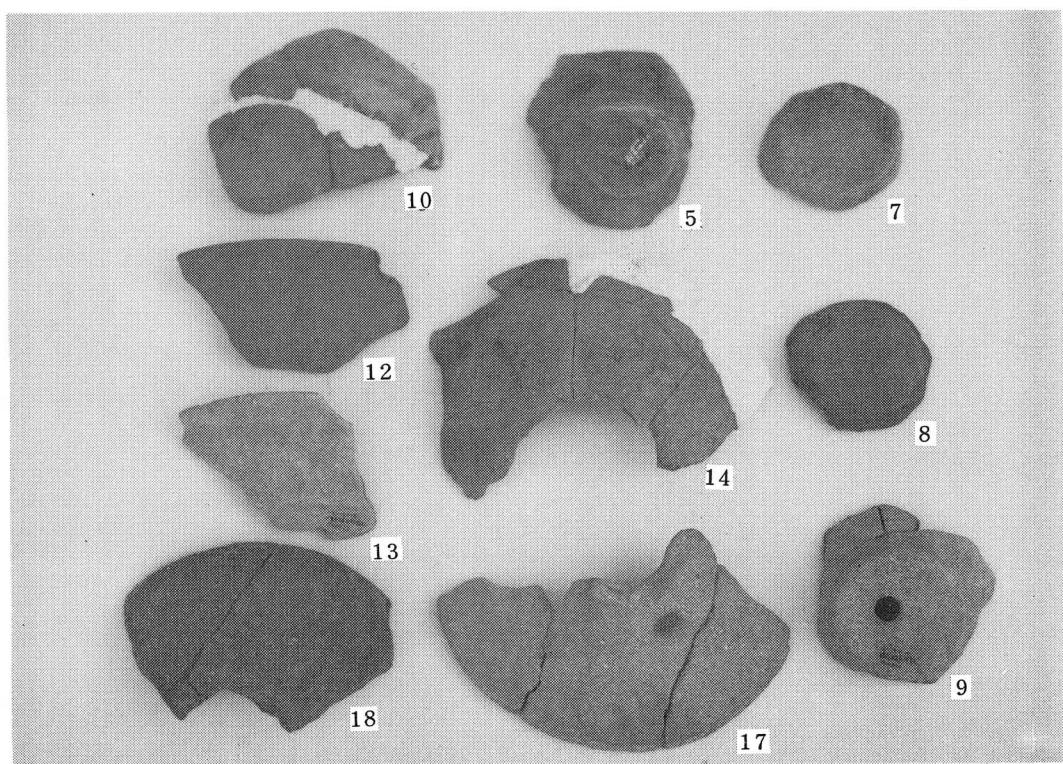
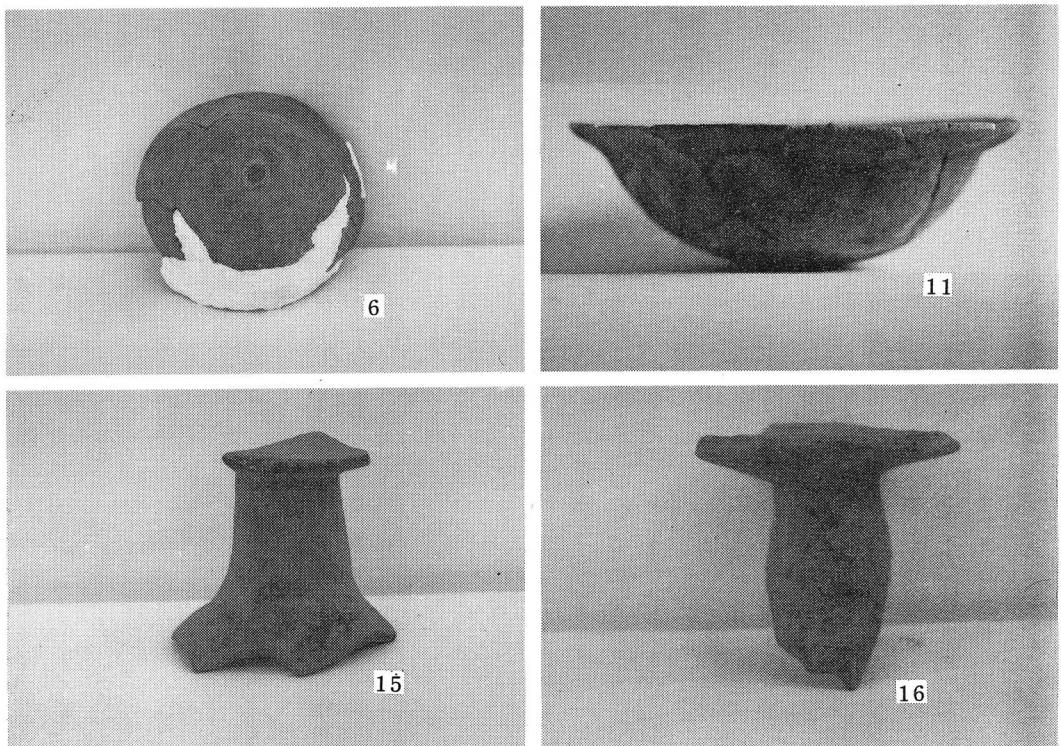


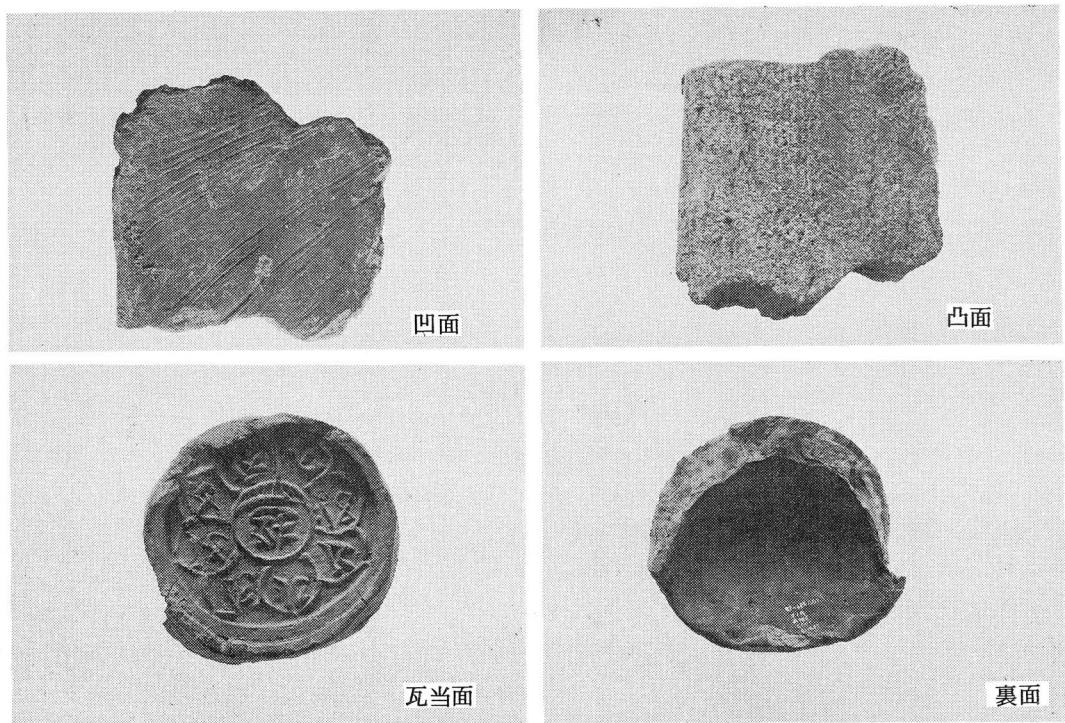
91-055



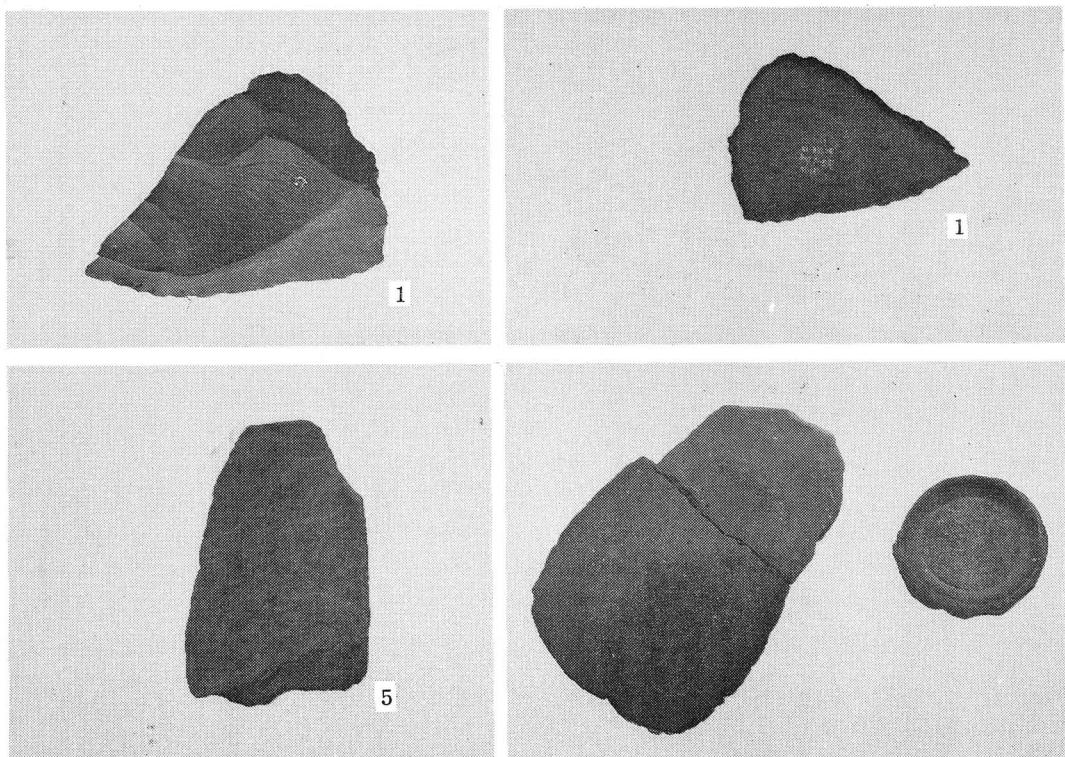
91-313

圖版二十五 矢作遺跡（91—189）



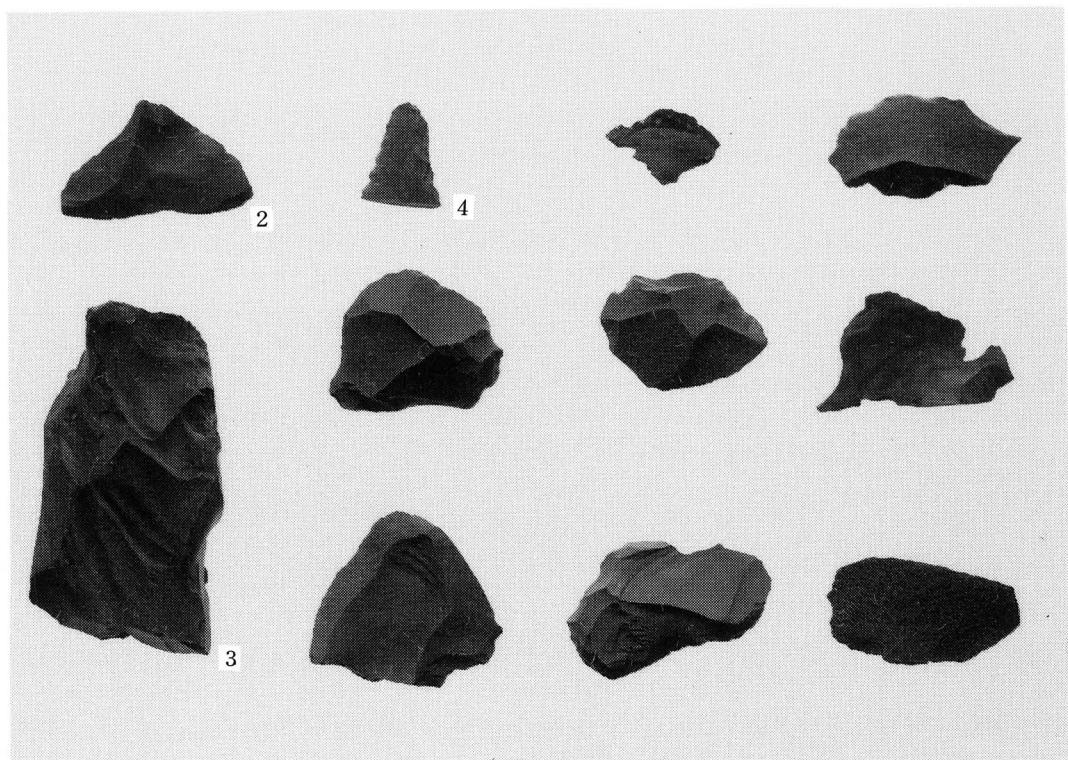


上段 出土平瓦、下段 出土梵字瓦



91—345 第3グリット出土瓦

圖版二十七 恩智遺跡（91—335）



八尾市文化財調査報告25
平成3年度国庫補助事業

八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅰ

発行日 1992年3月

発行所 八尾市教育委員会

印 刷 (株)やえの里タイプ

